

山の人生

柳田国男

青空文庫

自序

山の人生と題する短い研究を、昨年『朝日グラフ』に連載した時には、一番親切だと思つた友人の批評が、面白そうだがよく解らぬというのであつた。ああして胡麻ごまかすのだろうという類の酷評も、少しはあつたように感じられた。もちろん甚だむつかしくして、明めい晰せきに書いてみようもないのではあつたが、もしまだ出さなかつた材料を出し、簡略に失した説明を少し詳しくしてみたら、あれほどにはあるまいというのが、この書の刊行にあせつた

眞実の動機であつた。ところが書いているうちに、自分にも一層解釈しにくくなつた点が現れたと同時に、二十年も前から考えていた問題なるにもかかわらず、今になつて突然として心づくようなことも大分あつた。従つてこの一書の、自分の書齋生活の記念としての価値は少し加わつたが、いよいよ^{もつ}以て前に作つた荒筋の間々へ、切れ切れの追加をする方法の、不適當であることが顕著になつた。しかしこれを書き改めるがために費すべき時間は、もうここにはないのである。そのうえに資料の新供給を外部の同情者に仰ぐためにも、一応はこの形をもつて世に問う必要があるのである。なるほどこの本には賛否の意見を学者に求めるだけの、^ま纏まつた結論というものはないかも知れぬが、それでも自分たち

一派の主張として、新しい知識を求めることばかりが学問であることと、これを求める手段には、これまで一向に人に顧みられなかつた方面が多々であつて、それに今われわれが手を着けているのだということと、天然の現象の最も大切なる一部分、すなわち同胞国民の多数者の数千年間の行為と感想と経験とが、かつて観察し記録しまた攻究せられなかつたのは不当だということと、今後の社会改造の準備にはそれが痛切に必要なものであるということとは、少なくとも実地をもつてこれを例証しているつもりである。学問をもつて文雅の士の修養とし、ないしは職業搜索の方便と解して怪まなかつた人々は、このいわゆる小題大做たいさに対して果していかなる態度を取るであらうか。それも問題でありまた現象である故

に、最も精細に観測してみようと思う。

(大正十五年十月)

一 山に埋もれたる人生あること

今では記憶している者が、私の外には一人もあるまい。三十年あまり前、世間のひどく不景気であつた年に、西美濃^{みの}の山の中で炭を焼く五十ばかりの男が、子供を二人まで、^{まざかりき}鉞で斫り殺したことがあつた。

女房はとくに死んで、あとには十三になる男の子が一人あつた。そこへどうした事情であつたか、同じ歳くらいの小娘を貰^{もら}つてきて、山の炭焼小屋で一緒に育てていた。その子たちの名前はもう私も忘れてしまった。何としても炭は売れず、何度里^{さと}へ降りても、

いつも一合の米も手に入らなかつた。最後の日にも空手からってで戻つてきて、飢えきつている小さい者の顔を見るのがつらさに、すつと小屋の奥へ入つて昼寝をしてみました。

眼がさめて見ると、小屋の口一ぱいに夕日がさしていた。秋の末の事であつたという。二人の子供がその日当りのところにしやがんで、頻しきりに何かしているので、傍へ行つて見たら一生懸命に仕事に使う大きな斧おのを磨といでいた。阿爺おとう、これでわしたちを殺してくれといったそうである。そうして入口の材木を枕にして、二人ながら仰向あおむけに寝たそうである。それを見るとくらくらとして、前後の考えもなく二人の首を打ち落してしまつた。それで自分は死ぬことができなくて、やがて捕らえられて牢ろうに入れられた。

この親爺おやじがもう六十近くなつてから、特赦を受けて世の中へ出てきたのである。そうしてそれからどうなつたか、すぐにまた分らなくなつてしまつた。私は仔細しさいあつてただ一度、この一件書類を読んで見たことがあるが、今はすでにあの偉大なる人間苦の記録も、どこかの長持ながもちの底で蝕むしばみ朽ちつつあるであろう。

また同じ頃、美濃とは遙かに隔たつた九州の或る町の囚獄に、謀殺罪で十二年の刑に服していた三十あまりの女性が、同じような悲しい運命のもとに活いきていた。ある山奥の村に生まれ、男を持ったが親たちが許さぬので逃げた。子供ができて後に生活が苦しくなり、恥を忍んで郷里かえに還つてみると、身寄りの者は知らぬ

うちに死んでいて、笑い嘲ける人ばかり多かつた。すぐすぐと再び浮世に出て行こうとしたが、男の方は病身者で、とても働ける見込みはなかつた。

大きな滝の上の小路を、親子三人で通るときに、もう死のうじやないかと、三人の身体を、帯で一つに縛りつけて、高い樹の間から、淵を目がけて飛びこんだ。数時間ののちに、女房が自然と正気に復つた時には、夫も死ねなかつたものとみえて、濡れた衣服で岸の上つて、傍の老樹の枝に首を吊つて自ら縊れており、赤ん坊は滝壺の上の梢に引懸つて死んでいたという話である。こうして女一人だけが、意味もなしに生き残つてしまった。死ぬ考えもない子を殺したから謀殺で、それでも十二年までの宥

恕よがあつたのである。このあわれな女も牢を出てから、すでに年久しく消息が絶えている。多分はどこかの村の隅すみに、まだ抜ぬけ殻がらのような存在を続けていることであろう。

我々が空想で描いて見る世界よりも、隠れた現実の方が遙かに物深い。また我々をして考えしめる。これは今自分の説こうとする問題と直接の関係はないのだが、こんな機会でないと思ひ出すこともなく、また何びとも耳を貸そうとはしまいから、序文の代りに書き残して置くのである。

二 人間必ずしも住家を持たざること

黙って山へ入って還って来なかつた人間の数も、なかなか少ないものではないようである。十二三年前に、尾張瀬戸町にある感化院に、不思議な身元の少年が二人まで入っていた。その一人は例のサンカの児こで、相州の足柄あしがらで親に棄すてられ、甲州から木曾きその山を通って、名古屋まできて警察の保護を受けることになった。

今一人の少年はまる三年の間、父とただ二人で深山の中に住んでいた。どうして出てきたのかは、この話をした二宮徳君も知らなかつたが、とにかくに三年の間は、火というものをういなかつたと語つたそうである。食物はことごとく生なまで食べた。小さな弓を造つて鳥や魚を射て捕えることを、父から教えられた。

春が来ると、いろいろの樹の芽を摘んでそのまま食べ、冬は草

の根を掘って食べたが、その中には至って味の佳よいものもあり、年中食物にはいささかの不自由もしなかった。衣服は寒くなると小さな獣の皮に、木の葉などを綴つづつて着たという。

ただ一つ難儀であったのは、冬の雨雪の時であった。岩の窪くぼみや大木のうつろの中に隠れていても、火がないために非常に辛つらかった。そこでこういう場合のために、川の岸にあるカワヤナギの類の、髯ひげ根ねのきわめて多い樹木を抜いてきて、その根をよく水で洗い、それを寄せ集めて蒲団ふとんのかわりにしたそうである。

話が又また聞ききで、これ以上の事は何も分らない。この事を聴いた時には、すぐにも瀬戸へ出かけて、もう少し前後の様子を尋ねたいと思つたが、何なに分ぶんにも暇ひまがなかった。かの感化院には記録でも

残つてはいないであろうか。この少年がいろいろの身の上話をしたということだが、何かよくよくの理由があつて、彼の父も中年から、山に入つてこんな生活をしたものと思われる。

サンカと称する者の生活については、永い間にいろいろな話を聴いている。我々平地の住民との一番大きな相違は、穀物果樹家畜を当てにしておらぬ点、次には定まつた場処に家のないという点であるかと思う。山野自然の産物を利用する技術が事のほか発達していたようであるが、その多くは話としても我々には伝わっておらぬ。

冬になると暖かい海辺の砂浜などに出てくるのから察すると、

彼らの夏の住居は山の中らしい。伊豆へは奥州から、遠州へは信濃なのから、伊勢の海岸へは飛騨ひだの奥から、寒い季節にばかり出てくるといふことも聴いたが、サンカたにの社会には特別の交通路があつて、溪の中腹や林の片端かたはし、堤つつみの外などの人に逢あわぬところを縫うている故に、移動の跡が明らかでないのである。

磐城いわきの相馬地方そうまなどでは、彼らをテンバと呼んでいる。山の中腹の南に面した処に、いくつかの岩屋がある。秋もやや末になつて、里の人たちが朝起きて山の方を見ると、この岩屋から細々ほそほそと煙が揚がつている。ああもうテンバがきているなどという中に、子を負うた女がささらや竹籠たけかごを売りにくる。箕みなどの損じたのを引き受けて、山の岩屋に持つて帰つて修繕してくる。

土地の人とはまるまる疎遠そえんでもなかつた。若狭・越前わかさなどでは河原に風呂敷油紙ふろしきの小屋を掛かけてしばらく住み、断ことわりをいってその辺の竹や藤ふじかざら葛きを伐きつてわずかの工作をした。河川改修が河原を整理してしまつてからは、金を払つて材料の竹をかう者さえあつた。しかも土着する者は至まつて稀まれで、多くは程ほどなくいずれへか去いつてしまふ。路の辻つじなどに樹の枝または竹をさし、しるしを残して行く者は彼らであつた。小枝に由よつて先へ行つた者の数や方角を、後から来る者に知らしめる符号があるらしい。

仲間から出て常人に交わる者、ことに素性と内情とを談かたることはなはを甚いただしく悪にくむが、外から紛れてきてサンカの群に投なげずる常人は次第に多いようである。そうでなくとも人に問たねられると、遠い国

郡を名乗るのが普通で、その身の上話から真の身元を知ることがむづかしい。大体においおい世間なみの衣食を愛好する風を生じ、中には町に入つて混同してしまおうとする者も多くなつた。それが正業を得にくい故に、おりおりは悪いこともするのだが、彼らの悪事は法外に荒いために、かえつて容易にサンカの所業なることが知れるという。

しかも世の中とこれだけの妥協すらも敢てせぬ者が、まだ少しは残つてゐるかと思われた。大正四年の京都の御大典ごたいてんの時は、諸国から出てきた拝観人で、街道も宿屋も一杯になつた。十一月七日の車駕御到着の日などは、雲もない青空に日がよく照つて、御苑ぎよえんも大通りも早天から、人をもつて埋めうづてしまつたのに、な

お遠く若王子にやくおうじの山の松林の中腹を望むと、一ひとすじ筋二筋の白い煙が細々と立っていた。ははあサンカが話をしていているなど思うようであつた。もちろん彼らはわざとそうするのではなかつた。

三 凡人遁世のこと

かつて羽前の尾花おばなざわ沢附近において、一人の土木の工夫が、道を迷うて山の奥に入り人の住みそうにもない谷底に、はからず親子三人の一家族を見たことがある。これは粗末ながら小屋を建てて住んではいたが、三人ともに丸まるはだか裸はだかであつたという。

女房がひどく人を懐なつかしがって、いろいろと工夫に向かつて里の

話を尋ねた。なんでもその亭主ていしゅという者は、世の中に対してよほど大きな憤懣ふんまんがあつたらしく、再び平地へは下らぬという決心をして、こんな山の中へ入ってきたのだといった。

工夫は一旦その処ところを立ち去つたのち、再び引き返して同じ小屋に行つてみると、女房が彼と話をしたのを責めるといつて、縛り上げて折檻せつかんをしているところであつたので、もう詳しい話も聞きえずに、早々に帰つてきて、その後の事は一切不明になつてゐる。

この話はやまがたいしのすけ山方石之助君から十数年前に聴いた。山に住む者の無口になり、一見無愛想ぶあいそうになつてしまうことは、多くの人が知つてゐる。必ずしも世を憤つて去つた者でなくとも、木曾の山奥

で岩魚いわなを釣っている親爺おやじでも、たまたま里の人に出くわしても何の好奇心もなく見向きもせずみちに路を横ぎって行くことがある。文字に現わせない寂せき寞ぼくの威圧が、久しうして人の心理を変化せしめることは想像することができぬ。

そうしてこんな人にわずかな思索力、ないしはわずかな信心があれば、すなわち行ぎよう者じやであり、或いは仙せん人にんであり得るかと思われる。また天狗てんぐと称する山の霊が眼の色怖おそろしくやや気むつかしくかつ意地悪いものと考えられているのも、一部分はこの種山中の人に逢った経験が、根をなしているのかも知れぬ。

近世の武人などは、主君長上に対して不満のある場合に、無謀

に生命を軽^{かろ}んじ死を急ぎ、さらば討^{うちじに}死をして殿様に御損を掛け申すべしと、いったような話が多かった。戦乱の打ち続いた時世としては、それも自然なる決意でありえたが、人間の死ぬ機会はそう常にあつたわけでもない。死なずに世の中に背くという方法は必ずしも時節を待つという趣意でなくとも、やはり山寺にでも入つて法師とともに生活するのほかはなかつた。のちにはそれを出離の因縁とし、菩提^{ぼだい}の種と名づけて悦喜^{えつき}した者もあるが、古来の遁世者^{とんせいしゃ}の全部をもつて、仏道勝利の跡と見るのは当をえないと思う。

その上に山に入り旅に出れば、必ずそこに頃^{ころあい}合の御寺があるというわけでもなかつた。旅僧の生活をしようと思えば、少しは

学問なり智慧ちえなりがなければならなかつた。なんの頼むところもない弱い人間の、ただいかにしても以前の群とともにおられぬ者には、死ぬか今一つは山に入るといふ方法しかなかつた。従つて生活の全く単調であつた前代の田舎いなかには、存外に跡の少しも残らぬ遁世とんせいが多かつたはずで、後世の我々にこそこれは珍しいが、じつは昔は普通の生存の一様式であつたと思う。

それだけならよいが、人にはなおこれという理由がなくてふらふらと山に入つて行く癖のようなものがあつた。少なくとも今日の学問と推理だけでは説明することのできぬ人間の消滅、ことにこの世の執しゅう着じやくの多そうな若い人たちが、突如として山野に紛れこんでしまつて、何をしているかも知れなくなることがあつ

た。自分がこの小さな書物で説いて見たいと思うのは主としてこうした方面の出来事である。これが遠い近いいろいろの民族の中にもおりおりは経験せられる現象であるのか。はたまた日本人にばかり特に、かつ頻ひんぱん繁はんに繰り返されねばならぬ事情があつたのか。それすらも現在はお明めいりよう瞭りようでないのである。しかも我々の間には言わず語らず、時代時代に行われていた解釈があつた。それがあつた程度まで人の平常の行為と考へ方とを、左右していたことは立証することができる。我々の親たちの信仰生活にも、これと交渉する部分が若干はあつた。しかも結局は今なお不可思議である以上、将来いづれかの学問がこの問題を管轄すべきことは確かである。棄てて顧みられなかつたのはむしろ不当であると思

う。

四 稀に再び山より還る者あること

これは以前新渡戸博士にとべから聴いたことで、やはり少しも作り事らしくない話である。陸中二戸郡にのへの深山で、獵人が獵に入つて野宿をしていると、不意に奥から出てきた人があつた。

よく見ると数年前に、行方不明になつていた村の小学教員であつた。ふとした事から山へ入りたくなつて家を飛び出し、まるきり平地の人とちがつた生活をして、ほとんど仙人になりかけていたのだが、或る時この辺でマタギの者の昼弁当を見つけて喰くつた

ところが急に穀物の味が恋しくなつて、次第に山の中に住むことがいやになり、人が懐かしくてとうとう出てきたといったそうである。それから里に戻つて如何したか。その後の様子は今ではもう何びとにも問うことができぬ。

マタギは東北人およびアイヌの語で、獵人のことであるが、奥羽の山村には別に小さな部落をなして、狩獵本位の古風な生活をしている者にこの名がある。例えばとわだ十和田の湖水からなんそぼう南祖坊にお逐われてきて、秋田のはちろうがた八郎潟ぬしの主になつてゐるといふ八郎おとこなども、大蛇になる前は国境の山の、マタギ村の住民であつた。

マタギは冬分は山に入つて、雪の中を幾日となく旅行し、熊を捕ればその肉を食ひ、皮と熊胆くまぎもを附近の里へ持つて出て、穀物

に交易してまた山の小屋へ還る。時には峰づたいに上州・信州の
辺まで、下りてくることがあるという。

こんな連中でも用が済めばわが村へ戻り、また山の中でも火を
焚き米を煮て食うのに、教員までもしたという人が、友もなくし
て何年かの間、このような忍苦の生活をなしたしたのは、少なくと
も精神の異状であつた。しかもそれが単なる偶発の事件でなく、
遠く離れた国中の山村に、往々にして聞くところの不思議であつ
たのである。

マタギの根原に関しては、現在まだ何ぴとも説明を下しえた者
はないが、岩手・秋田・青森の諸県において、平地に住む農民た

ちが、ややこれを異種族視していたことは確かである。津軽の人が百二三十年前に書いた『奥民図彙』おうみんずいには、一二彼らが奇習を記し、菅江真澄すがえますみの『遊覧記』の中にも、北秋田の山村のマガギの言葉には、犬をセタ、水をワツカ、大きいをポロというの類、アイヌの単語のたくさんに用いられていることを説いてある。

もちろんこれに由つて彼らをアイヌの血筋と見ることは早計である。彼らの平地人との交通には、言語風習その他にしょうの障がいもなかつたのみならず、少なくとも近世においては、彼らも村にいる限りは附近の地を耕し、一方にはまた農民も山家に住む者は、傍かたわら狩猟に因つて生計を補うた故に、名称以外には明白に二者を差別すべきものはないのである。

ただ関東以西には獵を主業とする者が、一部落をなすほどに多く集まつておらぬに反して奥羽の果はてに行くともタギの村という者がおりおりある。熊野・高野を始めとして靈山開基の口碑こうひには獵師が案内をしたといい、または地を献上したという例少なからず、それを目して異人仙人と称していて、通例の農夫はかつてこの物語に参加しておらぬのを見ると、彼ら山民の土着が一期だけ早かつたか、または土着の条件が後世普通の耕作者とは、別であつたかということだけは察せられる。

しかも獵に関する彼らの儀式、また信仰には特殊なるものが多い。万次万三郎の兄弟が、山の神を助けて神敵を退治し、褒美ほうびに狩獵の作法を授けられたなどという古伝もその一例である。東北

ではシナの木のことをマダといい、山民は多くその樹皮を利用する。マタギ村でも盛んにこれを採用しまた周囲にこれを栽培するが、そのマダとは関係がないといっている。或いはふたまた二股つえの木の枝を杖にして、山中を行くような宗教上の習慣でもあつて、こんな名称を生じたのではないかとも思うが、彼ら自身は何と自ら呼ぶかを知らぬから、いまだこれを断定することができぬのである。

八郎という類の人が山中に入り、奇魚を食つて身を蛇体に変じたという話は、広く分布しているいわゆる低級神話の類であるが、津軽・秋田で彼をマタギであつたと伝えたのには、何か考うべき理由があつたらうと思う。

五 女人の山に入る者多きこと

天野信景翁のぶかげの『塩尻しおじり』には、尾州小木村こきの百姓の妻の、産後に発狂して山に入り、十八年を経てのち一たび戻ってきた者があつたことを伝えている。裸形にしてただ腰のまわりに、草の葉を纏まとうていたとある。山姥やまうばの話の通りであるが、しかも当時の事実譚じじつだんであつた。

この女も或る獵人に逢つて、身の上話をしたという。飢うえを感じずるままに始めは虫を捕つて喰つていたが、それでは事足ことたらぬように覚えて、のちには狐きつねや狸たぬき、見るに随したがい引裂いて食とし、次第に力づいて、寒いとも物ほしいとも思わぬようになったと語る。一

且は昔の家に還つてみたが、身内の者までが元の自分であること
を知らず、怖れて騒ぐのでせん方もなく、再び山中の生活に復つ
てしまったというのは哀れである。

明治の末頃にも、作州那岐山の麓、日本原の広戸の滝を中
心として、処々に山姫が出没するという評判が高かった。裸にし
て腰のまわりだけに襤褸を引き纏い、髪の毛は赤く眼は青くして
光っていた。或る時も人里近くに現われ、木こりの小屋を覗いて
いるところを見つかり、ついにその人夫どもに打ち殺された。
しかるにそれをよく調べてみると、附近の村の女であつて、ずつ
と以前に発狂して、家出をしてしまった者であることが分つた。

女にはもちろん不平や厭世のために、山に隠れるということ

がない。気が狂った結果であることは、その挙動を見れば誰にでも分った。羽後と津軽の境の田代岳たしろだけの麓ふもとの村でも、若い女が山へ遁にげて入ろうとするのを、近隣の者が多勢追いかけて、連れて戻ろうと引き留めているうちに、えらい力を出して振り切つて、走り込んでしまったという話を狩野亨吉先生かのうこうきちから承うけたまわつたことがある。

山に走り込んだという里の女が、しばしば産後の発狂であつたことは、事によると非常に大切な問題の端緒たんちよかも知れぬ。古来の日本の神社に従属した女性には、大神の指命を受けて神の御子を産み奉たてまつりし物語が多い。すなわち巫女みこは若宮の御母なるが故に、

ことに靈ある者として崇敬せられたことは、すこぶるキリスト教などの童貞受胎の信仰に似通うたものがあつた。婦人の神経生理にもしかよような変調を呈する傾向があつたとすれば、それは同時にまた種々の民族に一貫した宗教發生の一因子とも考えることを得る。しかしもちろん物のついでなどをもつて、軽々に取扱うべき問題ではないから、今は単に一二の類例を挙げて置くに止めるが、その一つは三百余年前に、いなば因幡国にあつた話で、少し長たらしいが原文のままを抄出する。『せつそうやわ雪窓夜話』の上巻に書いてある話である。

「寛永年中のこと也。なり安成久太夫やすなりきゆうだゆうといふ武士あり。備前くにかが因幡くにがへの時節にて、未だいま居屋敷も定まらず、鹿野かの（今のけたか気高郡鹿

野町)の在ざいに仮かに住みけり。或夜山に入りけるに、月の光も薄く、木立も奥暗おくあんき岨陰しんいんより、何とも知らぬ者駆け出で、久太夫が連れたる犬を追掛おけ、遙かの谷に追落して、傍がなる巖窟がんくつにかけ入りたり。久太夫不思議に思ひ、犬を呼返して其穴に追入れんとするに、犬怖おそれて入らざれば若党わくとうに命じてかの者を探り求めしむ。人のたけばかりなる猿さるの如ごときものなり。若党引出さんとするに、力強つめしがく爪つめ尖とがりて、若党の手を搔かき破やぶりけるを、漸ようくに引出したり。久太夫葛かづらを用こみて之これを縛り、村里へ引出し、燈をとぼして之を見るに髪長く膝たに垂れ、面相全く女に似て、その荒れたること絵にかける夜叉やしやの如し。何を尋ねても物言ふこと無く、只ただにこくと打笑ふのみ也、食を与ふれども食はず水を与ふれば飲あまみたり。遍あまね

く里人に尋ねれども、仔細しさいを知る者無し。一村集まりて之を見物す。其中そのに七十余の老農ありて言ふには、昔此村このに産婦あり。俄にわかに狂氣して駆け出でけるが、鷲峰山しうぶせんに入りたり。親族尋ね求むと雖いえども、終ついに遇あふこと無しと言ひ伝へたり。其年曆を計るに凡そ百年に余れり。もしは此者このものにてもあらんかと也。久太夫速すみやかに命を助け山に追ひ返しけるに、その走ること甚だ早し。其後又之を見る者無しといへり。」

佐々木喜善君の報告に、今から三年ばかり前、陸中上閉伊郡かみへいぐん附つ馬牛村くもうしの山中で三十歳前後の一人の女が、ほとんど裸体に近い服装に樹の皮などを纏いつけて、うろついていたのを村の男が見

つけた。どこかの炭焼小屋からでも持ってきたものかこの辺でワツパビツと名づける山弁当の大きな曲まげ物ものを携え、その中にいろいろの虫類を入れていて、あるきながらむしやむしやと食べていたという。遠野の警察署へ連れてきたが、やはり平気で蛙などを食っているので係員も閉口した。その内に女が臃おぼろげ気な記憶から、ふと汽車の事を口にし、それからだんだんに生まれた家の模様、親たちの顔から名前を思い出し、ついには村の名までいうようになったが、聴いて見ると和賀郡小山田村わがこやまだの者で七年前に家出をして山に入ったということがわかった。やはり産後であつて、不意に山に入ったというのであつた。親を警察へ呼び出して連れて行かせたが、一時はこの町で非常な評判であつた。なお同じ佐々木

君の話の中にこの附近の村の女の二十四五歳の者が、おつと夫とともに山小屋に入っていて、終日夫が遠くに出て働いている間、一人で小屋にいて発狂したことがあった。のちに落着いてから様子を尋ねて見ると、或る時背の高い男が遣やつてきて、それから急に山奥へ行きたくなくなって、堪えられなかったといったそうである。

六 山の神に嫁入すということ

羽後の田代岳に駆け込んだという北秋田の村の娘は、その前から口癖のように、山の神様の処ところへお嫁入りするのだと、いつていたそうである。古来多くの新米しんまいの山姥やまうば、すなわちこれから自

分の述べたいと思う山中の狂女の中には、何か今なお不明なる原因から、こういう錯覚を起こして、きんぜん欣然として自ら進んで、こんな生活に入った者が多かつたらしいのである。

そうすると我々がみわしき三輪式神話の残影と見ている竜婚・蛇婚の国々の話の中にも、存外に起原の近世なるものがないとは言われぬ。例えば上州のはるなこ榛名湖においては、美しい奥方はし強いて供の者を帰して、しずしずと水の底に入つて往つたと伝え、美濃のやしや夜叉ヶ池の夜叉御前は、ごぜん父母の泣いて留めるのも聴かず、あたら十六の花嫁姿で、ひと独り深山の水の神にとついだといっている。古い昔の信仰の影響か、または神話が本来かくのごとくにして、発生すべきものであったのか、とにかくにわが民族のこれが一つの不思議な

る癖であつた。

近ごろ世に出た『まぼろしの島より』という一英人の書翰しよかんしゆ集しゆに、南太平洋のニウヘブライズ島の或る農場において、一夜群衆のわめき声とともに、頻しきりに鉄砲の音がするので、驚いて飛び出して見ると、若い一人の土人が魔神に攫つかまれて、森の中へ牽ひいて行かれるところであつた。魔神の姿はもとより何ぴとも見えないが、その青年が右の手を前へ出して踏ふみとど止まろうと身をもがく形は、確かに捕われた者の様子であつた。他の土人たちは声で嚇おどし、かつ鉄砲をその前後の空間に打ち掛けて、悪魔を追い攘はらおうとしたがついに効を奏せず、捕われた者は茂みに隠れてしまつた。

翌朝その青年は正氣に復して、戻つて常のごとく働こうとしたけれども、仲間の者は彼が魔神と何か契約をしてきたものと疑い、^{おそ}畏れ憎んで近づかず、その晩のうちに毒殺してしまったと記している。わが邦で^{くに}狐や狸に憑^つかれたという者が、その獣らしい挙動をして、傍の者を信ぜしめるのと、最もよく似た精神病の兆候である。

猿の婿^{むこいり}入という昔話がある。どこの田舎に行つてもあまり有名であるために、かえつて子供までが顧みようとせぬようになって、じつは日本にばかり特別によく成育した話で、しかも最初いかなる事情から、こんな珍しい話の種が芽をくむに至ったかは、

説明しえた人がないのである。三人ある娘の三番目がことに発明で、一旦は猿に連れられて山中に入つて行くが、のちに才智をもつて相手を自滅させ、安全に親の家に戻つてくることになつてゐるのは、もとは明らかに魔界せいふくだん征服譚の一つであつた。今でも落語家の持つてゐる王子の狐、或いは天狗の羽団扇はうちわを欺あざむき奪う話などと同様に、だんだんに敵の愚かさが誇張せられて、聴く人の高笑いを催さずには置かなかつたのは、武勇勝利の物語に、負けて遁にげた者の弱腰を説くのと、目的は一つであつて、つまりは猿の媚おそも怖おそるるに足らずという教育の、かつて必要であつたことを意味している。餅を搗ついて白うすながら猿に負わせたり、白おろを卸おろさずに藤の花を折らせたり、いろいろと無理な策略をもつて相手を危地

おとしに陥れた話であるが、地方によつては瓢箪ひょうたんと針千本とを、親から貰もらい受けて出て行つたことになつてゐるのは、すなわち蛇神退治の古くからの様式で、猿の方にはむしろ不用なことであつた。変化か混同かいずれにしても、竜蛇の婿入の数多い諸国の例がこれと系統の近かつたことだけは察せられるので、ただ山城蟹旛かにはで寺の縁起えんぎなどにおいては、外部の救援が必要であつたに反して、こちらはかよわい小娘の智謀一つで、よく自ら葛藤かつとうを脱しえた点を、異なれりとするのみである。

大和の三輪みわの緒環おだまきの糸、それから遠く運ばれたらしい豊後の大神おおみわ氏の花の本の少女の話は、土地とわずかな固有名詞とをかえて、今でも全国の隅々すみずみまで行われているが終始一貫した発見

の糸口は、衣裳いしやうの端に刺した一本の針であつた。ところが後世
 になるにつれて、勝利は次第に人間の方に歸し蛇の媚は刺された
 針の鉄氣に制せられ、苦しんで死んだことになつて例が多い。
 糸筋いとすじを手繰たぐつて窈ひそかに洞穴の口に近づいて立聴たちぎきすると。親子
 らしい大蛇がひそひそと話をしている。だから留めるのに人間な
 どに思いを掛けるから命を失うことになつたのだと一方がいうと、
 それでも種だけは残してきたから本望だと死なんとする者が答え
 る。いや人間は賢いものだ、もし蓬よもぎと菖蒲しょうぶの二種の草を煎せんじて
 それでぎようずい行水ぎようずいを使つたらどうすると、大切な秘密を洩もらしてしま
 ったことにもなつてゐる。たつた一つの小さな昔話でも、だんだ
 んに源みなもとを尋ねて行くと信仰の變化が窺うかがわれる。もとは單純に指令

に服従して、怖しい神の妻たることに甘あまんじたものが、のちにはこれを避けまたは遁のがれようとしたことが明らかに見えるのである。しかも或いは婚姻慣習の沿革と伴うものかも知らぬが、猿の婿入の話には後代の蛇婿入譚とともに、娘の父親の約諾ということが、一つの要件をなしている。そうでなくとも堂々と押しかけてきて一門を承知させたことになっていて、大昔の神々のごとく夜陰密やいぬそかに通かよつてきて後に露顕したものはなかった。そうして天下晴れて連かえれて還つたことに話はできている。すなわち山と人界との縁組は稀有けうというのみで、想像しえられぬほどの事件ではなかったが、おいおいにこれを忌み憎むの念が普通の社会には強くなり、百方手段を講じてその弊害を防ぎつつ、なお十分なる効果を挙げ

えないうちに、国は次第に近世の黎明れいめいになつたのである。

狒ひひ々という大猿が日本にも住むということとはもう信ずることが

むつかしくなつた。出逢であつた見たという話は記事にも画にも残つ

ているものが多いが、注意してみると、まるまる幻覚の産物でな

ければ、必ずただの老猿を誤つてそう呼んだまでである。従つて

岩見重太郎、もしくは『こんじやくものがたり今昔物語語』のちゆうさんこうやの

ごとき例は、すこしでも動物学の知識を損益するところはないわ

けである。しかも昔話にまでなつて、このように弘く伝わってい

るのを見ると、猿の婿入は恐らくある遠い時代の現実の畏怖いふであ

つた。少なくとも女性失しつ踪そうの不思議に対する、世間普通の解釈

であつた。どうしてそんな愚かしい事が、信じえられたかと思う

ようであるが、他に真相の説明がつかかなかつた時代だから仕方がない。一種の精神病というがごとき漠然ぼくぜんたる理由では、今日でもまだ承知する者は少ないのである。正月と霜しもつき月の月初めの或る日を、山の神の樹かぞえなどと称して、戒めて山に入らぬ風習は現に行われている。もしこの禁を犯せばいかなる制裁があるかと問えば、算かぞえ込まれて樹になつてしまうというもあれば、山の神に連れて行かれるなどともいつているところがある。その山の神様はもとより神官の説くがごとき、大山おおやまつみのみこと山祇命ではなかつたのである。狼おおかみを山神の姿と見た言い伝えも多いが、猿はその一段の人間らしさから、かつては信仰の対象となつていた証拠もいろいろある。中世なんらか特別の理由があつて、その地位は動

揺したものらしい。その歴史を今少し考えて見ない以上、多くの昔話の意味がはつきりとせぬのも、やむをえざる次第である。

七 町にも不思議なる迷子ありしこと

北国筋すじの或る大都会などは、ことに迷子まいごというものが多かつた。二十年ほど前までは、冬になると一ひと晩ばんとしていわゆる鉦太鼓かねたいこの音を聞かぬ晩はないくらいであつたという。山が近くて天狗てんぐの多い土地だから、と説明せられていたようである。

東京でも以前はよく子供がいなくなつた。この場合には町内の衆が、各一個の提ちようちん灯てんを携えて集まり来たり、夜どおし大声で

喚よんで歩くのが、義理でもありません。また慣例でもあった。関東では一般に、まい子のまい子の何なま松まつやいと繰り返すのが普通であったが、上方かみがたへん辺では「かやせ、もどせ」と、ややゆるりとした悲しい声で唱となえてあるいた。子供にもせよ紛失したものを尋ねるのに、鉦太鼓でさがすというはじつは変なことだが、それは本来搜索ではなくして、奪還であったから仕方がない。

もし迷子がただの迷子であるならば、こんな事をしても無益なかわりに、たいていはその日その夜のうちに消息が判明する。二日も三日も捜しあるいて、いかにしても見つからぬというのが神か隠みかくしで、これに対しては右のごとき別種の手段が、始めて必要であったのだが、前代の人たちは久しい間の経験によって、子供

がいなくなれば最初からこれを神隠しと推定して、それに相応する処置を執つたものである。

神隠しをする神はいかなる悪い神であつたか。近世人の思想において、必ずしもごく精確に知られてはなかつた。通例は天狗・狗竇ぐひんというのが最も有力なる嫌疑者けんぎしやであつたが、それはこのように無造作なる示威運動に脅かされて、取つた児こをまた返すような気の弱い魔物ともじつは考えられていなかった。

狐もまた往々にして子供を取つて隠す者と、考えられている地方があつた。そういう地方では狐のわざと想像しつつも、やはり盛んに鉦太鼓たたを叩いたのであるが、今では単に狐はしばらくの間、人を騙だまし迷わすだけとして、これを神隠しの中にはもう算かぞえない

田舎がだんだんに多くなつて行くかと思う。近年の狐の悪戯いたずらはたいていは高が知れていた。誰かが行き合わせて大声を出し、または背中を一つ打つたら正気がついたという風ふうで、若い衆やよい年輩の親爺までが、夜どおし近所の人々に心配をかけ、朝になつて見ると土手の陰や粟あわばたけ 畠のまん中に、きよとんとして立つていたなどということも、またすでに昔話の部類に編入せられようとしていたのである。

しかし寂しい在ざい所しよの村はずれ、川端かわばた、森や古塚の近くなどには、今でも「良くない処ところだ」というところがおりおりあつて、その中には悪い狐がいるという噂うわさをするものも少なくはない。神隠しの被害は普通に人一代ひといちだいの記憶のうちに、三回か五回かは必

ず聴くところで、前後の状況は常にほぼ同様であった。従つて捜索隊の手配路順にも、ほぼ旧来のきまりがあり、事件の顛末も人の名だけが、時々新しくなるばかりで、各地各場合において、大した変化を見なかつたようである。

しかも経験の乏しい少年少女に取つては、これほど気味の悪い話はなかつた。私たちの村の小学校では、冬は子供が集まると、いつもこんな話ばかりをしていた。それでいて奇妙なことには、実際は狐につままれた者に、子供は至つて少なく、子供の迷子は多くは神隠しの方であつた。

子供のいなくなる不思議には、おおよそ定まつた季節があつた。

自分たちの幽かすかな記憶では秋の末から冬のかかりにも、この話が
あつたように思うが、或いは誤つているかも知れぬ。多くの地方
では旧暦四月、蚕かいこの上じょうぞく簇むぎかりいや麦むぎ蒔かりい入れの支度したくに、農夫が気を
取られている時分が、一番あぶないように考えられていた。これ
を簡明に高麦のころと名づけているところもある。つまりは麦が
成長して容易に小児の姿を隠し、また山の獣あせなどの畦あぜづたいに、
里に近よるものも実際に多かつたのである。高麦のころに隠れん
坊だまをすると、狸だまに騙だまされると豊後ぶんごの奥ではいうそうだ。全くこの
遊戯は不安心な遊戯で、大きな建物などの中ですらも、稀まれにはジ
エネヴィエバのごとき悲惨事があつた。まして郊野こうやの間には物陰
が多過ぎた。それがまたこの戯なれの永ながく行われた面白味おもしろみであつ

たろうが、幼い人たちが模倣を始めたより更に以前を想像してみると、忍術にんじゆつなどと起原の共通なる一種の信仰が潜んでいて、のち次第に面白い村の祭の式作法になったものかと思う。

東京のような繁華の町中でも、夜分だけは隠れんぼはせぬことにしている。夜かくれんぼをすると鬼に連れて行かれる。または隠し婆かくばあさんに連れて行かれるといつて、小児を戒める親がまだ多い。村をあるいていて夏の夕方などに、小児こを喚よぶ女の金切声かなきりごえをよく聴くのは、夕飯以外に一つにはこの畏怖いふもあつたのだ。だから小学校で試みに尋ねてみても分わかるが、薄暮はくぼに外ほかにおりまたは隠れんぼをすることが何故ゆゑに好よくないか、小児はまだその理由を知っている。福知山ふくちやま附近では晩に暗くらくなってからかくれんぼをす

ると、隠し神さんに隠されるといふそうだが、それを他の多くの地方では狸狐といい、または隠し婆さんなどともいふのである。かくばあ隠し婆は古くは子取尼ことりあまなどともいって、実際京都の町にもあつたことが、『園太暦』えんたいりやくの文和二年三月二十六日の条に出ている。取上げ婆とりあばあの子取りとはちがつて、これは小児を盗んで殺すのを職業にしていたのである。なんの為にといいことは記していないが、近世に入ってからちとりは血取とも油取あぶらとりとも名づけて、罪なき童児の血や油を、何かの用途に供するかのごとく想像し、近くは南京皿なんきんざらの染附そめつけに使うというがごとき、いわゆるこうけちじょう纈纈城式せきせきじょうしきの風説が繰り返された。そうしてまだ全然の無根というところまで、突き留められてはいないのである。

しかし少なくともこの世評の大部分が、一種の伝統的不安であり、従つて話であることは時過ぎて始めてわかつた。例えば迷子が黙つて青い顔をして戻つてくると、生血を取られたからだと解して悲んだ者もあつたが、そんな方法のありえないことがもう分つて、だんだんにそうはいわなくなつた。秩父地方では子供が行方不明になるのを、隠れ座頭かくざとうに連れて行かれたといい、またはヤドウカイに捕られたというそうだが、これなどは単純な誤解であつた。隠れ座頭は弘く奥羽・関東にわたつて、巖窟の奥に住む妖まじ怪うかいと信ぜられ、相州の津久井などでは踏唐臼ふみからうすの下に隠れているようにもいつていた。すなわち普通の人の眼に見えぬ社会の国民ではあつたのだが、これを座頭としたのは右のごとき地底の国

を、かく隠れ里と名づけたのが元もとである。隠れ里本来は昔話ねずみの鼠の浄ようど土などのように、富貴具足ふうきぐそくの仙界せんかいであつて、禱いのれば家具を貸し金銭を授与したなどと、説くのが昔の世の通例であつたのを、人の信仰が変化したから、こんな恐ろしい怪物とさえ解せられた。多分は座頭の職業に若干の神秘分子が、伴うていた結果であろう。それからヤドウカイはまたヤドウケと呼ぶ人もあつた。文字には夜道怪と書いて子取ことりの名人のごとく伝えられるが、じつはただの人間の少し下品な者で、中世ちゆうやひじり高野聖の名をもつて諸国を修行した法師すなわち是これである。武州小川の大塚おほづか梧堂君の話では、夜道怪は見た者はないけれども、蓬ほうはつ髮弊衣へいいの垢あかじみた人が、大きな荷物を背負うてあるくのを、まるで夜道怪のようだと土地では

いうから、おおかた大方そんな風態の者だろうとこのことである。實際高野聖は行商かかたしやうばい片商売で、いつも強ごうりき力同様に何もかも背負うてあるいた。そうして夕方には村の辻に立って、ヤドウカと大きな声でわめき、誰も宿を貸しましよと言わぬ場合には、また次の村に向って去った。旅に摺すれて掛かけひき引が多く、その上おりおりは法力を笠かさに着て、善人たちを脅おびやかした故に、「高野聖に宿やどかすな、娘取られて恥かくな」などという、諺ことわざまでもできたのである。だんだんこんな者が村に来なくなつてから、単に子供を嚇おどかす想像上の害敵となつて永く残りその子供がまた成人して行くうちに、次第に新しい妖怪の一種にこれを算えるに至つたのは注意すべき現象だと思ふ。我々日本人の精神生活の進化には、こういう村里の

隠し神のようなものまでが、取り残されていることはできなかつたのである。

八 今も少年の往々にして神に隠さるること

先^{さきごろ}頃も六つとかになる女の児が、神奈川県の横須賀から汽車に乗ってきて、東京駅の附近をうろついており、警察の手に保護せられた。大都のまん中では、もとより小児の親にはぐれる場合も多かつたらうけれども、幼小な子供が何ぴとも怪まれずに、こんなに遠くまできていたというは珍しい。故に昔の人もこれら

の実例の中で、特に前後の事情の不可思議なるものを迷子と名づけ、冒流ぼうとくを忌まざる者は、これを神隠しとも呼んでいたのである。

村々の隣に遠く野山の多い地方では、取分とりわけてこの類の神隠しが頻ひん繁ばんで、哀れなることには隠された者の半数は、永遠とこえに還かえつて来なかつた。私は以前盛んに旅行をしていたころ、力つとめて近代の地方の迷子の実例を、聞いて置こうとしたことがあつた。伊豆の松崎で十何年前にあつたのは、三日ほどしてから東の山の中腹に、一人で立っているのを見つけた。そこはもう何度となく、捜す者が通行したはずだのにと、のちのちまで土地の人が不思議にした。なおそれよりも前に、上総とうがねの東とうがね金附近の村では、これ

も二三日してから山の中の薄の叢すすぎくさむらの中に、しやがんでいたのをさがしだしたが、それから久しい間、抜け殻ぬがらのような少年であつたという。

珍しい例ほど永く記憶せられるのか、古い話には奇抜なるものが一層多い。親族が一心に祈禱きとうをしていると、夜分雨戸にどんと当あたる物がある。明けて見るとその児が軒下にきて立っていた。或いはまた板葺いたぶき屋根の上に、どしんと物の落ちた響がして、驚いて出てみたら、気を失つてその児が横たわっていた、という話もある。もつとえらいのになると、二十年もしてから阿呆あほうになつてひよつこりと出てきた。元もとの四よつ身みの着物を着たままで、縫目ぬいめが弾はじけて綻ほころびていたなどと言ひ伝えた。もちろん精確なる記録は少

なく、概して誇張した噂のみのようであった。学問としての研究のためには、更に今後の観察を要するはもちろんである。

愛知県北設楽郡段嶺村大字豊邦字笠井島の某という十歳ばかりの少年が、明治四十年ごろの旧九月三十日、すなわち神送りかみおくの日の夕方に、家の者が白餅しろもちを造るのに忙しい最中、今まで土間まにいたと思つたのが、わずかの間に見えなくなった。最初は氣にもしなかつたが、神祭を済ましてもまだ姿が見えず、あちこちと見てあるいたが行方が知れぬので、とうとう近所隣までの大騒ぎとなった。方々捜しあぐんで一旦家いったんの者も内に入っていると、不意におも屋の天井てんじょうの上に、どしんと何ものか落ちたような

音がした。驚いて梯子はしごを掛けて昇ってみると、少年はそこに倒れている。抱いて下へ連れてきてよく見ると、口のまわりも真ま白しろに白餅だらけになっていた。(白餅というのは神に供える糝しとぎのことで、生なまの粉を水でかためただけのものである。) 気の抜けたようになつてゐるのを介抱して、いろいろとして尋ねてみると少年はその夕方に、いつのまにか御宮おみやの杉きの樹の下に往いつて立つていた。するとそこへ誰とも知らぬ者が遣やつてきて彼を連れて行つた。多おおぜい勢せいの人にまじつて木の梢こずえを渡りあるきながら、処々方々の家ごちそうをまわつて、行く先々で白餅や汁粉しるこなどをたくさん御馳走ごちそうになつていた。最後にはどこか知らぬ狭いところへ、突き込まれるようにして投げ込まれたと思つたが、それがわが家の天井であつたと

いう。それからややしばらくの間その少年は、気が疎うとくなつていたようだったと、同じ村の今三十五六の婦人が話をしたという

(早川孝太郎君報)。

石川県金沢市の浅野町で明治十年ごろに起こった出来事である。徳田秋声君の家の隣家の二十歳ばかりの青年が、ちようど徳田家の高窓たかまどの外にあつた地境じぎかいの大きな柿の樹の下に、下駄げたを脱ぎ棄すてたままで行方不明になった。これも捜しあぐんでいると、不意に天井裏にどしんと物の墮おちた音がした。徳田君の令兄が頼まれて上つて見ると、その青年が横たわっているの、背負うて降してやったそうである。木の葉を嚙かんでいたと見えて、口の端を真青まっさおにしていた。半分正氣しきづいてから仔細しさいを問うに、大きな親お

爺やじに連れられて、諸処方々をあるいて御馳走を食べてきた、また行かねばならぬといつて、駆けだそうとしたそうである。尤もつとも常から少し遅鈍な質たちの青年であつた。その後どうなつたかは知らぬという（徳田秋声君談）。

紀州西牟婁郡上三栖むろの米作みすという人は、神に隠されて二昼夜してから還かえつてきたが、その間に神に連れられ空中を飛行し、諸処の山谷を經廻へめぐつていたと語つた。食物はどうしたかと問うと、握にぎり飯めしや餅菓子もちがしなどたべた。まだ袂たもとに残つていゝるので、出させて見るにみな柴しばの葉であつた。今から九十年ほど前の事である。また同じ郡岩田の万蔵という者も、三日目に宮の山の笹原の中で寝ているのを発見したが、甚だしく酒臭かつた。神に連れられて

摂津の西ノ宮に行き、盆ほんの十三日の晩、多勢の集まって酒を飲む席にまじって飲んだといった。これは六十何年前のことと、ともに宇井可道翁の『璞屋随筆』ぼくおくずいひつの中に載せられてあるという（雑賀貞次郎君報）。

大正十五年二月の『国民新聞』に出ていたのは、遠州相良在さからぞいの農家の十六の少年、夜中の一時ごろに便所に出たまま戻らず、しばらくすると悲鳴の音が聞えるので、両親が飛び起きて便所を見たがいな。だんだんに声を辿たどって行くと、戸じまりをした隣家の納屋なやの中に、兵児帯へこおびと禪ぜんをもつて両手足を縛られ、梁はりから兎うさぎつるしに吊つるされていた。早速引ひき卸おろして模様を尋ねても、便所の前に行ったまでは覚えているが、それから先のことは少しも知らぬ。

ただふと気がついたから救いを求めたといっていた。奇妙なことには納屋には錠がかかつて、親たちは捻じ切つて入つた。周囲は土壁で何者も近よつた様子がなかつたという。警察で尋ねてみたら、今少し前後の状況が知れるかも知れぬと思う。

不意に窮屈な天井裏などに入つて倒れたということは、とうてい我々には解釈しえない不思議であるが、地方には意外にその例が多い。また沖繩の島にもこれとやや似た神隠しがあつて、それを物迷いまたは物に持たるといふそうである。比嘉春潮君ひがしゆんちようの話によれば、かの島でモノに攫さらわれた人は、木の梢や水面また断崖絶壁のごとき、普通に人のあるかぬところを歩くことができ、また下水の中や洞窟床下等をも平気で通過する。人が捜して

いる声も姿もはつきりとわかるが、こちらからは物を言うことができぬ。洞窟の奥や水の中で発見せられた実例も少なくない。こういう狭い場処や危険な所も、モノに導かれると通行ができるのだが、ただその人が尻へをひるときはモノが手を放すので、たちまち絶壁から落ちることがある。水に溺おぼれる人にはこれが多いように信じられていそうである。備中賀陽かやの良藤という者が、狐の女と婚姻して年久しくわが家の床下に住み、多くの児女を育てていたという話なども、昔の人には今よりも比較的信じやすかつたものらしい。

九 神隠しに遭いやすき気質あるかと

思うこと

変態心理の中村古峽こきよう君なども、かつて奥州七戸しちのへ辺の実例について調査をせられたことがあった。神に隠されるような子供には、何かその前から他の児童と、ややちがった気質があるか否か。これが将来の興味ある問題であるが、私はあると思つてゐる。そして私自身なども、隠されやすい方の子供であつたかと考へる。ただし幸いにしてもう無事に年を取つてしまつてそういう心配は完全になくなつた。

私の村は県道に沿うた町まちなみ並で、山も近くにあるのはほんの丘陵であつたが、西に川筋かわすじが通つて奥在所おくざいしょは深く、やはりグヒ

ンサンの話の多い地方であつた。私は耳が早くて怖い噂をたくさん
んに記憶している児童であつた。七つの歳としであつたが、筋向すしむかい
の家に湯に招かれて、秋の夜の八時過ぎ、母より一足さきにその
家の戸口を出ると、不意に頬冠ほおかむ冠むりをした屈強な男が、横合よこあいか
ら出てきて私を引抱ひつかかえ、とつとつと走る。怖おそろしさの行止まりで、
声を立てるだけの力もなかつた。それが私の門までくると、くぐ
り戸の脇わきに私をおろして、すぐに見えなくなつたのである。もち
ろん近所の青年の悪戯いたずらで、のちにはおおよそ心当りもついたが、
その男は私の母が怒るのを恐れてか、断じて知らぬとどこまでも
主張して、結局その事件は不可思議に終つた。宅ではとにかく大
問題であつた。多分私の眼の色がこの刺戟しげきのために、すっかり変

つていたからであろうと想像する。

それからまた三四年の後、母と弟二人と茸きのこ狩がりに行つたことがある。遠くから常に見ている小山であつたが、山の向うの谷に暗い淋さびしい池があつて、しばらくその岸へ下おりて休んだ。夕日になつてから再び茸をさがしながら、同じ山を越えて元登もとつた方の山の口へきたと思つたら、どんな風にあるいたものか、またまた同じ淋しい池の岸へ戻つてきてしまつたのである。その時も茫ぼうとしたような気がしたが、えらい声で母親がどなるのでたちまち普通の心こころ持もちになつた。この時の私がもし一人であつたら、恐らくはまた一つの神隠しの例を残したことと思つている。

これも自分の遭遇ではあるが、あまり小さい時の事だから他人の話のような感じがする。四歳の春に弟が生まれて、自然に母の愛情注意も元ほどでなく、その上にいわゆる虫気があつて機嫌の悪い子供であつたらしい。その年の秋のかけりではなかつたかと思う。小さな絵本をもらつて寝ながら見ていたが、頻りに母に向かつて神戸には叔母さんがあるかと尋ねたそうである。じつはなのだけけれども他の事に気を取られて、母はいい加減な返事をしていたものと見える。その内に昼寝をしてしまったから安心をして目を放すと、しばらくして往つてみたらもういなくなつた。ただし心配をしたのは三時間か四時間で、いまだ鉦太鼓の騒ぎには及ばぬうちに、幸いに近所の農夫が連れて戻つてくれた。県道を南

に向いて一人で行くのを見て、どこの児だろうかといった人も三人はあつたそうだが、正式に迷子として発見せられたのは、家から二十何町離れた松林の道みちばた傍ばたであつた。折よくこの辺の新しんか開い島ばたにきて働いていた者の中に、隣の親爺がいたために、すぐに私だということが知れた。どこへ行くつもりかと尋ねたら、神戸の叔母さんのところへと答えたそうだが、自分の今幽かすかに記憶しているのは、抱かれて戻ってくる途みちの一つ二つの光景だけで、その他はことごとく後日に母や隣人から聴いた話である。前の横須賀から東京駅まできた女の児の話も聴いても、自分はおおよそ事情を想像し得る。よもやこんな子が一人でいることはあるまいと思つて、駄夫も乗客もかえつてこれを怪まなかつたのだらうが、

外部の者にも諒解しえず、自身ものちには記憶せぬ衝動があつて、こんな幼い者に意外な事をさせたので、調べて見たら必ず一時性の脳の疾患であり、また體質か遺伝かに、これを誘発する原因が潜んでいたことと思う。昔は七歳の少童が庭に飛降つて神怪驚くべき言を発したという記録が多く、古い信仰では朝野ちようやともに、これを託宣と認めて疑わなかつた。そのみならず特にそのような傾向ある小児を捜し出して、至つて重要な任務を託していた。

因よりわらわ童よりわらわというものがすなわちこれである。一通りの方法で所要の状態に陥らない場合には、一人を取囲んで多勢で唱となえ言ごとをしたり、または単調な楽器の音で四方からこれを責めたりした。警察などがやかましくなつてのちは、力つとめて内々にその方法を講じた

ようだが、以前はずいぶん頻繁にかつ公然と行われたものとみえて、今もまま事と同様にこれを模倣した小児の遊戯が残っている。
「中なかの中の小坊主こぼうず」とか「かアごめかごめ」と称する遊びは、正まさしくその名残である。大きくなって世の中へ出てしまうと、もう我々のごとく常識の人間になつてしまふが、成長の或る時期にその傾向が時あつて顕あらわれるのは、恐らくは説明可能なる生理学の現象であろう。神に隠されたという少年青年には、注意してみれば何か共通の特徴がありそうだ。さかしいとか賢いとかいう古い時代の日本語には、普通の兎のように無邪気でなく、なんらかやや宗教的ともいふべき傾向をもっていることを、包含していたのではないかとも考える。物狂いという語なども、時代によつてその

意味はこれとほぼ同じでなかったかと思う。

一〇 小児の言によつて幽界を知らんとせしこと

運強くして神隠しから戻つてきた児童は、しばらくは氣抜けの体で、たいていはまずぐつすりていと寝てしまう。それから起きて食い物を求める。何を問うても返事が鈍く知らぬ覺えないと答える者が多い。それをまた意味ありげに解釈して、たわいもない切れ切れの語から、神秘世界の消息をえようとするのが、久しい間のわが民族の慣習であつた。しかも物々しい評判のみが永く伝わつ

て、本人はと見ると平凡以下のつまらぬ男となつて活いきているのが多く、天狗てんぐのカゲマなどといつて人がこれを馬鹿にした。

この連中の見聞談は、若干の古書の中に散見している。鋭い眼をした大きな人が来いといつたからついで往つた。どこだか知らぬ高い山の上から、海が見えた里が見えたの類の、漠然ぼくぜんたる話ばかり多い。ところがこれとは正反対にごくわずかな例外として、むやみに詳しく見てきた世界を語る者がある。江戸で有名な近世の記録は、『神童寅とらきち吉物語』、神界にあつて高山嘉津間たかやまかつまと呼ばれた少年の話である。これ以外にも平田派の神道家が、最も敬けい虔けんなる態度をもつて筆記した神隠しの談がいくつかあるが記録の精確なるために、いよいよ談話の不精確なことがよく分る。各

地各時代の神隠しの少年が、見てきたと説くところには、何一つとして一致した点がない。つまりはただその少年の知識経験と、貧しい想像力との範囲より、少しでも外へは出ていなかっただのである。

故に神道があまり幽冥道ゆうめいどうを説かぬ時代には、見てきた世界は仏法の浄土や地獄であつた。『続鉞石集ぞくこうせきしゅう』の下の巻に出てゐる「阿波国不ふきゆう朽物語」などはその例で、その他にも越中の立山そとなんぶ外南部の宇曾利山うそりざんで、地獄を見たという類の物語も、正直な人が見たと主張するものは、すべてみなこの系統の話である。

『黒甜瑣語こくくてんさご』第一編の卷三に曰く、いわ「世の物語に天狗のカゲマと

云ふことありて、爰こゝかしこに勾こう引いんさるゝあり。或は妙義山に將もて行かれて奴やつことなり、或は讚岐さぬきの杉本坊の客となりしとも云ふ。秋田藩にてもかゝる事あり。元禄の頃仙北稻いなさわ沢村の盲人が伝へし『不思議物語』にも多く見え、下賤げせんの者には別して拘引さるゝ者多し。近くは石井某が下男は、四五度もさそはれけり。始はじめは出し奔ゆつぽんせしと思ひしに、其そのもの者の諸器おんぼう襪おんぼう袍も残りあれば、それとも言はれずと沙汰さたせしが、一ひとつき月ばかりありて立歸れり。津輕つがるを残らず一見して、委くわしきこと言ふばかり無し。其後一年ほど過ぎて此このおとこ男へやの部屋何か騒がしく、宥ゆるして下されと叫ぶ。人々出て見しに早くも影無し。此このたび度も半月ほど過ぎて越後えちごより歸りしが、山の上にてかの国の城下の火災を見たりと云ふ。諸人委しく

其事を語らせんとすれども、辞を左右に托して言はず。若し委い曲きを告ぐれば身の上にも係かるべしとの戒いましめを聞きしと也なり。四五年を経て或人に従ひ江戸に登りしに、又道中にて行方無ゆくえくなれり。此度は半年ほどして、大阪より下くだれり」と云う。

右の話の始めにある『不思議物語』という本は、この他にもたぐさんの珍しい記事を載せてあるらしい。二百数十年前の盲人の談話ときいて、ことに一度見たいと思つている。江戸の人の神に隠された話は、また新井白石も説いている。『白石先生手簡』、年月不明、小瀬復菴おせふくあんに宛あてた一通には、次のごとく記してある。

「正月七日の夜、某旧きゆう識しの人の奴僕ぬぼく一人、忽たちまちに所在そうろうを失うひ候う。

二月二日には、御直参ごじきさんの人にて文筆共当時ともの英材、某多年の旧

識、是も所在を失し、二十八日に帰られ候。其事の始末は、鬼の
 為に誘はれ、近く候山々経歴し見候。此外二三人失せし者
 をも承り候へ共、それらは某見候者にも無く候。たしかに目撃候
 間、如あいだかくのごとき此の事また候へば云々うんぬん（末の方は誤写があるらし
 い）。

『神童寅吉物語』は舞台が江戸であっただけに、出た当時からす
 でに大評判となり、少なからず近世のいわゆる幽界研究を刺戟し
 た。今でも別様の意味において貴重なる記録である。知っている
 人も多いと思うが、大正十四年の四月に、周防宮市の天行居
 から刊行した『幽冥界研究資料』と題する一書は、この類の珍

本のいくつかを合わせて覆ふつこく刻している。『嘉津間答問かつまとうもん』四卷附

録一卷は、すなわち前にいう寅吉の談話筆記で、平田翁の手を経

て世おおよけに公おおよけにせられたものであるが別にそれ以外に『幸安こうあん仙界せんかい

物語ものがたり』三卷、紀州和歌山の或る浄土寺じょうどでらの小僧が、白髪しらがの老翁

に導かれてしばしば名山に往来したという話であり、『仙界真せんかいしん

語ご』一卷は、尾州の藩医柳田泰治の門人沢井才一郎という者が、

遠州秋葉山に入つて神になつたという一条で、いずれも十七歳の

青年の異常なる実験を、最も誠実に記述したものである。高山嘉

津間の方は、七歳の時から上野うえのの山下で薬を売る老人につれられ、

時々常陸ひたちの或る山に往来していたと語っているが実際にいなくな

つたのは十四とじの歳の五月からで、十月とつきほどして還つてきていとも

饒舌じょうぜつに靈界の事情を語っていた。遍あまねく諸州を飛行したそうだが、本居ほんきよは常陸の岩間山の頂上にあつた。紛れもなく天狗山人の社会で方式にも教理にも修験道しゅげんどうの香気が強かつたが、あの時代の学者たちは一種の習合をもつて自派の神道の闡明せんめいにこれを利用した。それでも不用意なる少年の語の中には、あまりなる口から出まかせがあつて、指摘し得べき前後の矛盾さえ多かつたのだが、それは記憶の誤りだろう隠すのだろう、或いは何か凡慮に及ばぬ仔細しさいがあるのだらうと、ことごとく善意に解しようとした跡がある。非常なる骨折ほねおりであつた。これに比べると紀州の幸安の神隠しは、三十年余も後の事であるが、この期間の日本の学問の進歩は、早著はやしくその話の内容に反映している。幸安はまず和

歌山近くの花山というに登り、それから九州某地の赤山といふところ^{せんじん}に往つたと語つたが、赤山の住^{じゅうりよ}侶はいずれも仙人で、おのおの『雲^{うん}笈^き七^{しち}籤^{せん}』にでもあるような高尚な漢名を持つていた。天狗などは身分の低いものだといふにこれを軽蔑^{けいべつ}してゐる。また支那にも飛べば北亞細亞^{アジア}の山にも往つたとあつて、その叙説の不精確さは正^{まさ}に幕末ごろの外国地理の知識であつた。よくもこんな話が信じられたと、今の人ならば驚くのが当然だが、道教の神秘も日本の固有信仰がこれを支配し得るかのごとく、曲解し得るだけ曲解するのが、言わばあの時代の学風であつたので、すなわちたくさん^{ゆめがた}の夢語りも、やはり平田翁一派の研究以外へは一足だつて踏出してはいないのである。

名古屋のあきばだいごんげん秋葉大権現の神異に至つては、話が更に一段と単純になつてゐる。これは前にいう紀州の事件よりも、また十五年も後のことであるが、これに参加した人たちが学問に深入りしなかつた故に、古風な民間の信仰の清らさを留めてゐる。すなわち神隠しの青年は口がちようちよう喋々きすいと奇瑞を説かなかつたかわりに、我々の説明しえないいろいろの不思議が現われ、それを見たほどの者は一人として疑い怪しむことができなかった。そうして多くの信徒の興奮と感激との間に、当の本人は靈魂のみを大神におおかみ召されて、若い骸を留めて去つたのである。およそ近代の宗教現象の記録として、これほど至純なる資料はじつは多くない。身親みしたしくこの出来事を見聞した者の感を深め信心を新たにすることも、誠に当然

の結果のように思われる。ただ我々の意外とすることは、こういう珍しいいろいろの実験をならべてみて、一方が真実なら他方は誤りでなければならぬほどの不一致には心づかず、幽界の玄妙なる、なんのあらざる事あらんやと、一切の矛盾を人智不測の外に置こうとした、後世の学徒の態度であつた。もし盲信でなければ、これは恐らく同種の偽にせもの物に対する寛容であつて、やがては今日のごとき鬼術横行の原因をなしたものとも言えられる。

江戸の高山嘉津間、和歌山の島田幸安等の行ゆくすえ末はどうであつたか。今なら尋ねて見たらまだ消息が知れるかもしれない。もし彼らの行者生活が長く続いていたとすれば、これらの覚おぼえがき書類は時の進むとともに、幾たびかその価値を変化しているはずである。

少なくとも口で我々にあんなことを説いて聞かせても、もう今日では耳を傾ける者はあるまい。故に書物になつて残つているといふだけで、特段にこれを尊重すべき理由はない道理である。

と
一一 仙人出現の理由を研究すべきこと

「うそ」と「まぼろし」との境は、決して世人の想像するごとくはつきりしたものでない。自分が考えてもなおおあやふやな話でも、なんどとなくこれを人に語り、かつ聴く者が毎つねに少しもこれを疑わなかつたなら、ついには実験と同じだけの強い印象になつて、

のちにはかえって話し手自身を動かすまでの力を生ずるものだったらしい。昔の精神錯乱と今日の発狂との著しい相異は、じつは本人に対する周囲の者の態度にある。我々の先祖たちは、むしろ^{れいり}伶俐にしてかつ空想の豊かなる児童が時々変になって、凡人の知らぬ世界を見てきてくれることを望んだのである。すなわちたくさんの神隠しの不可思議を、説かぬ前から信じようとしていたのである。

室町時代の中ごろには、若狭^{わかさ}の国から年齢八百歳という尼が京都へ出てきた。また江戸期の終りに近くなつてからも、筑前の海岸に生まれた女で長命して二十幾人の亭主を取替えたという者が津軽方面に出現した。その長命に証人はなかつたが、両人ながら

古い事を知つてよく語つたので、聴く人はこれを疑うことができなかつた。ただしその話はもうしあわ申合せたようにげんべい源平のかつせん合戦、よしつね義経・べんけい弁慶の行動などの外には出なかつた。それからまた常たちぼうかいそん陸坊海尊の仙人になつたのだという人が、東北の各地には住んでいた。もちろん義経の事蹟じせき、ことに屋島やしま・壇の浦だんうら・高館等たかだて、『義経記』や『盛衰記』に書いてあることを、あの書をそらで読む程度に知つていたので、まったくそのために当時彼が眞の常陸坊なることを一人として信用せざる者はなかつたのである。

今日の眼から見れば、これを信ずるのは軽率のようであり、欺あざむく本人も憎いようだが、恐らくは本人自身も、常陸坊であり、ないしは八百比丘尼びくになることを、何かわけがあつて固く信じていた

ものと思われる。それも決してありえざることではない。参河みかわの
 長篠ながしの地方でおとらという狐に憑つかれた者は、きつと信玄や山本
 勘助の話をする。この狐もまた長生で、かつて武田合戦を見物し
 ていて怪我けがをしたという説などが行われていたために、その後憑
 かれた者が、みなその合戦を知っているような気持にならずには
 おられなかつたのである。

若狭の八百比丘尼は本国おぼま小浜の或る神社の中に、玉たま椿つばきの花
 を手に持った木像を安置しているのみではない。北国は申すに及
 ばず、東は関東の各地から、西は中国四国の方々の田舎いなかに、この
 尼が巡遊したと伝つうる故跡こせきは数多く、たいていは樹を栽うえ神を祭
 り時としては塚つかを築き石を建てている。それが単なる偶合ぐうごうでな

かつたと思うことは、どうしてそのように長命をしたかの説明にまで、書物を媒介とせぬ一部の一致と脈絡がある。つまりは靈怪なる宗教婦人が、かつて巡国をしてきたことはあつたので、その特色は驚くべき高齢を称しつつ、しかも顔色の若々しかった点にあつたのである。人はずいぶんと白髪しわの皺だらけの顔をしていても、八百といえは嘘だと思わぬ者はないであろうに、とにかくにこれを信ぜしめるだけの、術だか力だかは持っていたのである。それが一人かはた幾人もあつたのかは別として、京都の地へも文安から宝徳のころに、長寿の尼が若狭から遣やつてきて、毎日多くの市民に拝まれたことは、『がうんにつけんろく臥雲日件録』にも書いてあれば、また『やすとみき康富記』などにもちやんと日記として載せてあるから、

それを疑うことはできないのである。尤もこの時代は七百歳の車僧のように、長生を評判にする風は流行であつた。然らば何か我々の想像しえない方法が、これを証明していたのかも知れぬが、いずれにしても『平家物語』や『義経記』の非常な普及が、始めて普通人に年代の知識と、回顧趣味とを鼓吹したのはこの時代だから、比丘尼の昔語りは諸国巡歴のために、大なる武器であつたことと思う。ただ自分たちの想像では、単なる作り事ではこれまでに人は欺きえない。或いは尼自身も特殊の心理から、自分がそのような古い^{おうな}嫗であることを信じ、まのあたり義経・弁慶一行の北国通過を、見ていたようにも感じていた故に、その言うことが強い印象となつたのではなからうか。越中立山の口碑では、
結^{けっか}

界いを破つて靈峰に登ろうとした女性の名を、若狭の登とう宇呂うの姥ばと呼んでいる。もしこの類の山で修業した巫女みこが自身にそういう長命を信じている習ならいであつたら、のちに説ひゅうこうとする日向小菅岳げだけの山女が、山に入つて数百年を経たと人に語つたというのも、必ずしも作り話ではないことになるのである。やたらに人の不誠実を疑うにも及ばぬのである。

常陸坊海尊の長命ということは、今でもまだ陸前の青麻あおそごんげん権現の信徒の中には、信じている人が大分だいぶんあつて、これを疑つては失礼に当るか知れぬが、じつはこの信仰には明らかに前後の二期があつて、その後期においては海尊さまはもう人間ではなかつたの

である。これに反して足利時代の終りに近く、諸国にこの人が生きていたという話の多いのは、正しく八百比丘尼と同系統の現象であつた。事のついでに少しくあのころの世間の噂を比較してみると、例えば会津あいづの実相寺じつそうじの二十三世、桃林契悟とうりんけいごぜんじ禅師号は残夢、別に自ら秋風道士とも称した老僧はその一人であつた。和尚わうは奇行多くまた好んで源平の合戦その他の旧事を談ずるに、あたかも自身その場において見た者のごとくであつた。無々という老翁いしきの石城郡いしきに住する者、かつて残夢を訪ねてきて、二人で頻りしきに曾我そがの夜討やうちの事を話していたこともあつた。しかも曾我とか源平合戦とかがもうちゃんと言物になつてゐることを知らず、あまり詳しいので喫驚びっくりするような人が、まだこの地方には多かつた

らしいのである。年を尋ねると百五六十と答え、強いて問いつめるとかえって忘れたといつて教えなかつた。然らば常陸坊海尊だろうと噂したというのは、恐らくはこのころすでにかの仙人がまだ生きてどこかにいるように評判する者があつたからであろう。また別の伝えには福仙という鏡かがみ研とぎがきた。残夢これを見て彼は義経公の旗持ちだつたという、福仙もまた人に向つて、残夢は常陸坊だと告げたとともいうが、そんな事をすれば露あらわれるにきまつている。しかも和尚は天正四年の三月に、たくましい一篇の偈げを留とどめて円えん寂じやくし、墓もその寺にあるにかかわらず、その後なお引続いて、常陸坊が生きているという説は行われた。『本朝ほんちよ故事因縁集』には、「海尊遁にげ去りて富士山に入る、食物無

し、石の上に飴あめの如き物多し、之を取りて食してより又飢うるこ
 と無く、三百年の久しき木の葉を衣として住む。近代信濃の深山
 に岩窟がんくつあり、之に遊びて年未だ老いず」とある。山におりきり
 の仙人ならば、こんな歴史も伝わらぬ道理で、やはり時々は若狭
 の尼のように人間の中に入ってきていたのである。能登の狼煙村のろし
 の山伏山やまぶしやまでは、常陸坊はこの地まできて義経と別れ、仙人にな
 ってこの山に住んだ、おりおりは山伏姿で出てきたと『能登国のとのくに
 名跡志いせきし』に書いてあるが、それでは高館たかだて・衣川ころもがわの昔話を
 するのに、甚だ勝手が悪かったわけである。加賀には残月という
 六十ばかりの僧、かつて犀川さいかわと浅野川の西東に流れていた時を
 知つてるといった。越後の田中という地に来て、小松原宗雪なる

者と同宿し、穀を絶ち松脂まつやにを服して暮していたが、誰言うとも

なく残月は常陸坊、小松原は亀井六郎だと評判せられた。人が

『義経記』を呼んで聴かせると覚えぬ釣込まれてそのころの話を
したと『提醒紀談』ていせいきだん 卷一にあるが、亀井と馬が合うたとすれば

能登で別れてしまったのではなさそうだ。『広益俗説弁』こうえきぞくせつべん 卷

十三には、海尊かいそん高館たかたねの落城に先だつて山に遁れのが、仙人となつて

富士・浅間あさま・湯殿山ゆどのさんなどに時々出現するとあるが、羽前最上郡もがみ

古ふる口くち村むらの外川とかわ神社のの近くにも、海尊仙人が住んでいたという口

碑あり、また陸前気仙郡けせんの唐丹とうにの観音堂の下にも、昔常陸坊が松ま

前つまえから帰りがけにこの地を通つて、これは亀井の墓だと別当山

伏じょうじゆいんの成就院じょうじゆいんに、指さし教えたと伝うる墓があつた。永い年月

には何処へでも往つたろうが、それにしてもあまりに口が多く、また話が少しずつ喰違っているのは、やはりたくさんの同名異人があつたためではなかつたか。ことに寛永の初年に陸中平泉ひらいずみの古戦場に近い山中で、仙台の藩士小野太左衛門が行逢ゆきあうたというのは、よほど怪しい常陸坊であつた。源平時代の見聞を語るこ
と、親しくこれを歴へた者の通りであつた故に、小野はただちに海
尊なることを看破し、就ついて兵法を学び、また恭うやうやしく延年益寿の
術たすを訊ねた。異人答えて曰く、もと修するの法なし、かつて九郎
判官ほうがんに随従して高館にいるとき、六月衣ころもがわ川つりに釣つりして達谷たつこく
に入る。一老人あり招きて食きようを供す。肉ありその色は朱しゆのごとく
味美なり、仁じんこう羹と名づく。従者怪みて食わず、これを携えて帰

る。その女子これを食べまた不死であつたが、天正十年までいて
いずれへか往いつてしまつたと語つた。この話は若狭・越中その他
の地方において、八百比丘尼の長生の理由として、語り伝うるも
のと全然同じで、仁羹はすなわち人魚の肉であつた。日本の仙人
が支那のように技術の力でなく、とうてい習得しがたい身の運の
ようなものを具うえていたことを、説明しようとする昔話に過ぎぬ
のだが、これをさえ受うけうり売するからには仙翁でもなかつたのであ
る。しかるにもかかわらず、小野太左衛門はその説に感歎して、
これを主人の伊達政宗に言だてまさむね上ごんじょうし、後日に清悦御目見えの沙せいえつおめみ
汰たがあつた。清悦とはこの自称長寿者ののちの名で、現行行われ
ている『清悦物語』の一書は、彼が『義経記』を一読してこ

れは違っているといい、自ら口授したところの源平合戦記であった。『吾妻鏡』^{あづまかがみ}や『鎌倉実記』と比較して、一致せぬ点が多いというのは当り前以上である。しかし出来事の評判は非常であったと見えて、寛永以後なお久しい間、清悦の名は農民の頭から消えなかつた。岩切の青麻権現の岩窟に出現したのは、それからおよそ五十年の後、ちようど『清悦物語』が世に出てから、十五年目の天和二年であつたという。鈴木所兵衛という、信心深い盲人が、彼に教えられて天に^{いの}禱り、目が開いたという奇跡もあつた。その時は氣高い老人の姿で現れて、われは常陸坊海尊、今の名は清悦である。久しく四方を巡つて近ごろ下野の大日窟にいたが、これからはここへきて住もう。この窟には何神を祭つてあるかと

尋ねるので、大日・不動・虚空蔵こくうぞうの三尊だと答えると、それは幸いのことだ、自分の念ずるのも日月星、今より三光穴と名づくべしと行って、すなわち岩窟に入って鉄鑊てつさくをもって上下した。これが人魚を食べた常陸坊のまた新たなる変化であつた。ただしこの縁起えんぎはそれから更に八十余年を経て、再びこの社が繁昌はんじやうしたのちのもので、以前の形のままか否かは疑わしい。近年になつては一般に、常陸坊は天狗だと信じられていた。常陸国の阿波あばの大杉だいみ大明神めいようじんも、この人を祭るといふ説があり、特別の場合のほかは姿を見ることができなかつた。しかも一方には因縁がなお繋がつながつて、おりおりは昔の常陸坊かも知れぬという老人が、依然として人間にまじつて遊んでいた。

話が長過ぎたがやはり附添つけそえておく必要がある。青麻権現の奇跡と同じところに、同じ仙台領の角田かくたから白石しろいしの辺にかけて、村々の旧家に寄寓きぐうしてあるいた白石翁しろいしという異人があつた。身のたけ六尺眼光は流電のごとく、またなかなかの学者で神儒しんじゆ二道の要義に通じていた。この翁の特徴は紙さえ見れば字をかくことと、それからまた源平の合戦を談ずることとであつた。年齢は言わぬが誰を見てもセガレと呼び、角田の長泉寺の天鑑てんかん和尚などは百七つまで長命したのに、やはりセガレをもつて交まじわつていた。或る時象棋しようぎをさして、ふと曲まがり淵ふち正左衛門の事を言いだしたが、この人は二百年前にいた人であつた。身元が知れぬのでいろいろの風説が生じ、或いは甲州の山県昌景かといひ、信玄の

次男の誓聖堂こせいの子かともいい、或いはまた清悦であろうともいった。元禄六年の二月十八日に、白石在の某家でたしかに病没したのだが、それから十何年ののち、或る商人が京都に旅行して、途中で白石翁を見たという話も伝わっていたから、かりに海尊であったとしても理窟だけは合うのである（以上『東藩野乗』とうはんやじょう下巻および『封内風土記』四）。

さてこれらの話を集めてみて、結局目に立つのは、常に源平の合戦を知っていることが長命の証拠になったという点である。東北地方の旧家のことに熊野神社と関係あるものは、最も弁慶や鈴木・亀井の武勇談を愛好し、なるたけ多く聴きたいという希望が、ついに『義経記』のごとき地方の文学を成長せしめたのだ。これ

に新材料を供与する人ならば、異常の尊敬を受けたのは当然である。それも作り事と名乗つては、人が承知せぬのが普通であつた。すなわち座頭の坊の物語が夙くから、当時實際に参与した勇士どもの靈の、託言または啓示なることを要した所以である。常陸坊は高館落城の当時から、行方不明と伝えられていた故に、後日生いきりよう靈となつて人に憑つくにさしつかえはなく、また比較的重要でない法師であつて、観みていた様子を語るには都合がよかつた。だから、一時的には吾われは海尊と名乗つて、実歴風に処々の合戦や旅行を説くことは、いずれの盲法師めくらほうしも昔は通例であつたかと思つた。それがあまりに巧妙かたわらで傍の者が本人と思つたか、はたまた本人までが常陸坊になりきつて、いわゆる見てきたような嘘うそをつい

たかは、今日となつてはもう断定ができぬ。それから第二の点は支那の寒山拾得かんざんじつとくの話のごとく、残夢は無々と語り福仙と相あいゆ指びざし、残月は小松原宗雪と同宿し、清悦は小野某を伴ない、また白石翁が天鑑和尚を倅せがれと呼んだこと、これも多分は古くからの方式であつたらうと思う。陸中江刺郡えさし黒石くろいしの正法寺しょうぼうじで、石地蔵が和尚に告げ口をしたために常陸かいどうの身の上あらわが露れた。帰りにその前を通ると地蔵がきな臭いような顔をしたので、さてはこやつが喋しゃべつたかと、鼻をねじたといつて鼻曲はなまがり地蔵がある。これは紛れもなく海神わたつみの宮の口女くちめであり、また猿の肝きもの昔話の竜宮りゅうぐうの海月くらげであつて、こういう者が出てこないと、やはり話にはなりにくかつたのである。だから眼前のただ一つの例を執とつ

て、不思議を説明しようとするのは誤った方法である。近くは天明の初年に、上州伊香保いかほの木樵きせり、海尊に伝授を受けたと称して、げたきゆう下駄灸という療治を行ったことが、『翁おきな草なぐさ』の卷百三十五にも見えている。彼も福仙と同じく義経の旗持ちであつたのが、この山に入つて自分もまた地仙となつたという。下駄げただの灸あしだのあしという近代生活にまで、なお昔の奥浄瑠璃おくじようるりの年久しい影響が、痕あとを留とどめているのはなつかしいと思う。

と

一一一 大和尚に化けて廻国せし狸のこ

話が山から出てきたついでに、おかしな先例を今少し列挙して見たい。関東各府県の村の旧家には、狐や狸の書いた書画というものがあり、これに伴うて必ず不思議な話が残っている。たいていは旅の僧そうりよ侶に化けて、その土地にしばらく止とどまっていたというのである。どうしてその僧の狸であることを知ったかといえば、後日少しかけ離れた里で、狗いぬに噛かみ殺ころされたという話だからというものと、その僧が滞在をしている間、食事と入浴に人のいるのをひどく厭いやがる。そつと覗のぞいてみたら食物を膳ぜんの上にあけて、口をつけて食べていたからというのがあり、また湯ゆ殿どのの湯気ゆげの中から、だらりと長い尻尾しっぽが見えたからというものもある。書や画は多くは乱暴な、しかも活かっ澆ぱつな走り書きであった。

この化の皮の露れた原因として、狗に殺されたはいかにも實際らしくない。もし噛まれて死んでいたものの正体が狸であれば、果してあの和尚か否かがわからず、和尚の姿で死んでおれば、狸とはなおさらいわれない。要するに山芋やまいもと鰻うなぎ、雀すずめと蛤はまぐりの關係も同じで、立会たちあいのうえで甲から乙へ変化するところを見届けぬかぎりには、真の調書は作成しえなかつた道理である。おそらくはじつは和尚の挙動、或いはその内々の白状が、この説の基礎をなしたものであつたろうと思う。

いわゆる狸和尚の話は、鈴木重光君の『相州内郷村話』うちごうの数ページが、最も新しくかつ注意深い報告である。同君の居村附近、

すなわち こぼとけとうげ 小仏峠 を中心とした武相甲の多くの村には、天明年間に むじな 貉が鎌倉建長寺の御使僧に化けたという話とともに、描いて残した書画が多く分布している。鈴木君が自身で見たものは、東京府南多摩郡 みなみたま 加住村 かすみ 大字宮下にある白沢 はくたく の図、神奈川県津久井郡 ちぎり 千木良村に伝わる布袋川渡りの図であったが、後者は布袋らしく福々しいところは少しもなく、なんとなく むじな 貉に似た顔にできていた。書は千木良の隣の小原町の本陣、清水氏にも一枚あった。形は字らしいが何という字か判らなかつた。それよりも更に奇 きつか 怪なことは、この僧が狗に噛み殺されて、貉の正体を顕 あらわ したと伝うる場処が、或いは書画の数よりも多いかと思うくらい方々の村にあることである。また建長寺の方でもこの事件は否定せぬそ

うだ。ただし貉が勧化かんげの使僧を咬かみ殺して、代つてこれに化けた
 というかちかち山式風説は認めず、途中で遷化せんげした和尚の姿を借
 りて、山門再建の遺志を果したという他の一説の方を執とつており、
 現に寺にもその貉の書いたものが、二枚も蔵しまつてあるというのは、
 すこぶる次に述べる文ぶん福茶釜ぶくちやがまの話と似ている。

右と同様の話はなおたくさんあるが、今記憶する二つ三つを挙
 げて見ると、『静岡県安倍郡誌あべ』には、この郡大里村大字下島の
 長田氏には、これも建長寺の和尚に化けて、京に上ると称して堂
 々と行列を立て、乗り込んできたという貉の話あり、その書が今
 に残っている。横物の一軸いちじくに「」というような変な字が一字
 書いてある。ムジナすなわち狸だという幽かすかな暗示とも解せられ

る。隣区西脇の庄屋萩原氏にも宿泊し、かの家にも一枚あったがそれは紛失した。そうしてやはりのちに安倍川の川原で、犬に喰殺されたと伝えられる。信州下伊那郡泰阜村しもいな やすおかの温田ぬくたというところにも、狸のえがくという絵像のあることが、『伝説の下伊那』という書に報ぜられてある。人の顔に獣の体を取りつけたような不思議な画姿えすがたであつたという。ただしこれは和尚ではなくて、よし由ある京都の公家くげという触込ふれこみ込で、遠州路から山坂を越えて、この村に遣つてきて泊つた。出入ともに駕籠かごの戸を開かず、家の者も見ることさえなかつたが、翌朝出発の時に礼だと称して、こんな物を置いて去つたという。この狸はそれから柿野という部落に入つて同じことをくりかえし、だんだんと天竜筋てんりゅうすじを上つて行

くうちに、上穂うわぼの光善寺の飼犬に正体を見現わされ、咬み殺されてしまったというが、その光善寺の犬は例のヘイボウ太郎で、遠州見附みつけの人身御供問題ひとみごくうを解決した物語の主人公だから、どこまでが昔話か結局は不明に帰するのである。

『蕉齋筆記』しやうさいひつぎにはまた次のような話が出ている。三州亀浜かめはまの鳴田又兵衛という富人の家へ、安永の初年ころに、京の大徳寺の和尚だというのがただ一人でふらりと遊びにきて、物の三十日ほども滞在し、頼まれて額がくだの一行物だのを、いくらともなく書いて還かえった。あとから挨拶あいさつの状を京のぼに上せると、大徳寺の方では和尚一向にそんな覚えがないとある。ただしもこの寺に一匹の狸がいて、夜分縁えんさき先ちようもんにきて法談を聴聞ちようもんしていたが、のち

に和尚の机の上から石印を盗んでいずれへか往つてしまった。其そ奴やつではなかうかといつてみると、果して後日の噂には江州大津の宿で、駕籠を乗替えようとして犬に喰殺された狸だか和尚だかが、その石印を所持していたそうである。三州の方には屏風びょうぶが一つ残つていた。見事な筆蹟であつたという。しかしこれだけの材料を総合して、狸が書家であつたと断定することは容易でない。やはり最初から、旅僧の中には稀まれには狸ありという風説が、下したぞ染めをなしている必要はあつたのである。狐の書という話も例は多いが、『塩尻しおじり』（帝国書院本）の卷六十八および七十五にも、これと半分ほど似た記事がある。美濃安八郡春近あはちの井上氏に、はるちか伝えた書というのがそれであつて、その模写を見ると鳥啼花ちやうていから

落と立派に書いて、下に梅菴ばいあんと署名してある、本名は板益亥正、年久しく井上家の後園に住む老狐であつて、しばしば人間の形をもつて来訪した。筆法以外医道の心得こころえもあり、また能くよ禪を談じたが、一旦中絶して行方が知れず、どうした事かと思つていると、或る時村の者が京に上る途みちで、これも大津の町で偶然にこの梅菴ゆきあに行逢うた。もう年を取つて死ぬ日が近くなつた。日ごろ親しくした井上氏と、再会の期もないのは悲しいと落涙し一筆認したためてこれを托し、なお井上が子供にもよく孝行をして学問を怠らぬようにと、伝言を頼んで別れたそうである。梅菴は野狐にして僧、長齋一食なりとあつて、何だか支那の小説にでもありそうな話だが、現に鳥啼花落のこが遺つているのだからしかたがない。し

かし『みやがわのやまんびつ宮川舎漫筆』卷三には、早同じ話に若干の相違を伝え、公表せられた狐の書というものにも、やかんぼうげんせい野干坊元正とれいれい麗々と署名がしてあつた。

實際この類の狐になると、果して人に化けたのやら、もしくは人の形になりきっているのやら、その境さかいめ目がもうはつきりしてはいなかつた。それ故にかえつて本人の方から、たとえ露骨には名乗らぬまでも、やや自分の狐であることを、暗示する必要があつたと見える。くうあん空菴という狐が自ら狐の一字を書したことは『いちわい一話一言』にあり、また駿州安倍郡の貉は狸という字に紛わしい書を遺した。しかも他の一方においては、人が狐に化けたという話も近世は存外に多かつた。ものな物馴れた旅人が狐の尻尾を腰さ

げにして、わぎとちらちらと合羽かつぱの下から見せ、駕籠屋かごや・馬方うまかた・宿屋の亭主に、尊敬心を起こさせたという噂は興味をもつて迎えられる、甚だしきはあべこべに、狐を騙だましたという昔話さえできている。だから私は村々の狸和尚が、いずれも狸の贋物にせものであったとはもちろん言わぬが、少なくともいかにしてこれを発見したかは、考えてみる必要があると思うのである。

狐狸の大多数が諸国を旅行する際に、武士にも商人にもあまり化けたがらず、たいてい和尚や御使僧になつてきたのも曰いわくがあらう。上州茂林寺もりんじの文福茶釜を始めとしてかつて異僧が住してそれがじつは狸であり、いろいろと寺のために働いて、のちにいなくなつたというのみならず、何か末世の手証てあかしとなるものを、遺

して往つたという例はたくさんにある。禅宗の和尚たちはこれを怪奇として斥しりぞけず、むしろ意味ありげに語り伝えるのが普通であつた。会津の或る寺でも守鶴しゅかく西堂せいどうの天目てんもくを什宝じゅうほうとし、稀有けうの長寿を説くこと常陸坊海尊同様であつたが、その守鶴もやはり何かのついでに微々として笑つて、すこぶる自己のじつは狸なることを、否定しなかつたらしい形がある。東京の近くでは府中の安養寺あんようじに、かつて三世の住職に随逐ずいぢくした筑紫三位という狸があつて、それが書いたという寺起立の由来記を存し、横浜在の関村の東樹院とうじゆいんには、狸が描くと称する渡唐天神の像もあつた（『新篇風土記稿』二十四および二十八）。建長寺ばかりではないのである。

それからまた有用無害の狐狸がいたという話は、今では多く寺々の管轄の下に歸し、かつは仏徳の如によ是ぜち畜く生しょうに及んだことを証しているようだが、最初はその全部が僧たちの親切に基づいた因縁話でもなかったらしい。今日の思想から判はんずれば、狐はこれ人民の敵で、人は汲き々ゆう乎きゆうとしてその害を避くるに専もつらであるけれども、祭つた時代にはいろいろの好意を示し、また必ずしも仏法の軌範の内に跣きよく踏せきしていかなかった。例えば越後の或る山村では、正月十五日の宵よいに山から大きな声を出して、年の吉凶を予言し、または住民の行為を批判した。『東備郡村誌』によれば、岡山市外の円城村に老狸あり、人に化けて民間に往来し、能よく人の言語を学んでしばしば附近の古城の話をした。その物語を聴きかん

と欲する者、食を与えてこれを請う時んば、一室を鎖してその内に入り、じゆんじゆん 諄々として人のごとくに談じた。しこうして人を害することなし、もつと 尤も怪獣なりとある。みかわ 三河のながしの 長篠のおとら狐に至つては、近世その暴虐ことに甚だしく住民はことごとく切齒せつしや扼腕くわんしているのだが、人に憑くときは必ずとびのすじよう 鳶巢城の故事を談じ、なお進んでは山本勘助の智謀、川中島の合戦のごとき、今日の歴史家が或いは小幡勘兵衛の駄法螺だぼらだろうと考えている物語までを、事も細かに叙述するを常とした。単に人を悩ます者がおとらであり、おとらは歳久とししき狐なることを証明するためならば、それほど力を入れずともよいのであった。おそらくはこれも昔はその話を聴くために、狐を招いてきてもらつた名残であつて、同

時にまた諸国の狸和尚、ないしは常陸坊・八百比丘尼の徒が、或いは自分もまた多くの聴衆と同じく、憑いた生霊、憑いた神と同化してしまつて、そうじ莊子の夢の吾われか蝴蝶こちょうかを、差別しえない境遇にあつた結果ではないかを考えしめる。

近ごろでも新聞に毎々出てくるごとく、医者ひねの少しく首を捻ひねるような病人は、家族や親類がすぐに狐憑きにしてしまふ風が、地方によつてはまだ盛んであるが、なんぼ愚夫愚婦でも理由もなしに、そんな重大なる断定をするはずがない。たいていの場合には今までも似たような先例があるから、もしか例のではないかと、以心伝心に内々一同が警戒していると、果せるかな今日は昨日よ

りも、一層病人の挙動が疑わしくなり、まず食物の好みのあずきめ小豆飯・油揚あぶらあげから、次には手つき眼つきや横着なそぶりとなり、此方でも「こんちきしよう」などというまでにげっこう激昂するころは、本人もまた堂々と何山のいなり稲荷だと、名を名乗るほどに進んでくるので、要するに双方のあいも相持ちで、もしこれを精神病の一つとするならば、患者は決して病人一人ではないのだ。狸の旅僧のごときも多勢で寄つてたかつて、化けたと自ら信ぜずにはおられぬように逆にただの坊主を誘導したものかも知れぬ。

佐渡では新羅しんらぎ王書と署名した奇異なる草体の書が、多くの家に蔵せられ、私もそのいくつかをみた。古い物ではあるが、もちろん新羅という国が滅びてのち、すでに四五百年以上もしてからの

作に相異なる。天文年間に漂着したともいい、或いはもつと後のことともいつている。とにかくつて他処からきた實在の異人であつた。のちには土地の語を話し、土地の人になつてしまつた。書ばかり書いている変な人だつたというが、現にその子孫という家もあつて、とにかくに詐欺師さぎしではなかつた。自分でも新羅王だと思つており、それをまた周囲の人が少しも疑わなかつたために、このようなありうべからざる歴史が成り立つたものである。

神隠しの少年の後日譚、彼らの宗教的行動が、近世の神道説に若干の影響を与えたのは怪しむに足らぬ。上古以来の民間の信仰においては、神隠しはまた一つの肝要なる靈界との交通方法であつて、我々の無窮に対する考えかたは、終始この手続を通して進

化してきたものであった。書物からの学問がようやく盛んなるにつれて、この方面は不当に馬鹿にせられた。そうして何が故に今なお我々の村の生活に、こんな風習が遺っていたのかを、説明することすらもできなくなろうとしている。それが自分のこの書物を書いて見たくなつた理由である。

一三三 神隠しに奇異なる約束ありしこと

神隠しからのちに戻ってきたという者の話は、さらに悲しむべき他の半分の、不可測なる運命と終末とを考える材料として、な

お忍耐して多くこれを蒐集しゅうしゅうする必要がある。社会心理学という学問は、日本ではまだ翻訳ばかりで、国民のための研究者はいつになつたら出てくるものか、今はまだすこしの心こころあ当てもない。それを待つ間の退屈を紛らすために、かねて集めてあつた二三の实例を葉しおりとして、自分はほんの少しばかり、なお奥の方へ入りこんで見ようと思う。最初に注意せずにおられぬことは、我々の平凡生活にとって神隠しほど異常なるかつ予期しにくい出来事は他にないにもかかわらず、単に存外ひんぱんに頻繁ひんぱんでありまたどれこれこれもよく似ているのみでなく、別になお人が設けたのでない法則のごときものが、一貫して存するらしいことである。例えば信州などでは、山の天狗に連れて行かれた者は、跡はきものに履物はきものが正しく揃そろ

えてあつて、一見して普通の狼藉ろうぜき、または自身で身を投げたりした者と、判別することができるといつている。そんなことは信じえないと評してもよいが、問題は何故に人がそのようなことを言い始めるに至つたかにある。

或いはまた二日とか三日とか、一定の期間搜さがしてみて見えぬ場合に、始めてこれを神隠しと推断し、それからまた特別の方法を講ずる地方もある。七日を過ぎてなお発見しえぬ場合にもはや還らぬ者としてその方法を中止する風もある。或いはまた山の頂上に登つて高声に兎の名を呼び、これに答うる者あるときは、その兎いずれかに生存すと信じて、辛かろうじて自ら慰める者がある。八王子の近くにも呼ばわり山という山があつて、時々迷子まいごの親な

どが登って呼び叫ぶ声を聴くという話もあった。町内の附合つきあいは組合の義理と称して、各戸総出そうでをもつて行列を作り、一定の路筋みちすじを廻歴した慣習のごときも、これを個々の事変に際する協力といわんよりは、すこぶる葬礼祭礼などの方式に近く、しかも捜査の目的に向かつては、必ずしも適切なる手段とも思われなかつた。この仕来りしきたには恐らくは忘却せられた今一つ根本の意味があつたのである。それを考え出さぬ限りは、神隠しの特に日本に多かつた理由も解わからぬのである。

全体にこの実例はおいおいと少なくなつて、今では話ばかりがなお鮮明に残っている。神隠しという語を用いぬ地方もすであ

るが、狐に騙だまされて連れて行かれるといひまたは天狗にさらわれるといつても、これを搜索する方法はほぼ同じであつた。単に迷子と名づけた場合でも、やはり鉦かね太鼓たいこの叩たたき方は、コンコンチキチコンチキチの囃はやし子で、芝居で「釣つりぎ狐つね」などというものの外には出でなかつた。しかもそれ以外になお叩く物があつて、各府県の風習は互いによく似ていたのである。例をもつて説明するならば、北大和やまとの低地部では狐にだまされて姿を隠した者を搜索するには、多人数で鉦と太鼓を叩きながら、太郎かやせ子かやせ、または次郎太郎かやせと合唱した。この太郎次郎は子供の实名とは関係なく、いつもこういつて喚よんだものらしい。そうして一行中の最近親の者、例えば父とか兄とかは、一番後に下さがつてついで

行き、いっしょうます一升榼を手に持って、その底を叩きながらあるくことに定きまつており、そうすると子供は必ずまずその者の目につくといつていた（『なら』一八号）。紀州田辺地方でも、鉦太鼓を叩くとともに、櫛くしの齒をもつて榼の尻を搔かいて、変な音を立てる風があつた（雑賀君報）。播磨はりまの印いんなん南郡では迷子を捜すのに、村中たいまつ松明をともし金かなだら盃らいなどを叩き、オラバオオラバオと呼ばわつてあるくが、別に一人だけわざと一町ばかり引き下つて榼を持って木片などで叩いて行く。そうすると狐は隠している子供を、榼を持つ男のそばへほうり出すといつていた。同国東部の美囊みの郡などでは、迷子は狐でなく狗寶くひんさんに隠されたというが、やはり捜しにあるく者の中一人が、その子供の常に使つていた茶碗ちやわんを

手に持つて、それを木片をもつて叩いてあるいた。越中魚津でも三十年余の前までは、迷子を探すのに太鼓と一升榼とを叩いてあるいた。榼の底を叩くと天狗さんの耳が破れそうになるので、捕えている子供を樹の上から、放して下すものだと信じていたそうである（以上『土の鈴』九および十六）。

右のごとき類例を見て行くと、誰でも考えずにおられぬことは、今も多くの農家で茶碗を叩き、また飯櫃めしびつや榼の類を叩くことを忌む風習が、ずいぶん広い区域にわたって行われていることである。何故にこれを忌むかという説明は一樣でない。叩くと貧乏する、貧乏神がくるといふもののほかに、この音を聴いて狐がくる、オサキ狐が集まってくるという地方も関東には多い。多分はずつ

と大昔から、食器を叩くことは食物を与えんとする信号であつて、転じてはこの類の小さな神を招き降おろす方式となつていたものであろう。従つて一方ではやたらにその真似まねをすることを戒め、他の一方ではまたこの方法をもつて兎を隠す神を喚よんだものと思ふ。

俵藤太たわらとうだが持つてきた竜宮の宝物に、取れども尽きぬ米の俵があつて、のちに子孫の者がその俵の尻を叩くと白い小蛇こへびが飛びだして米が尽きたと称するのも、もし別系統でなければ同じ慣習の變化だとみてよろしい。いずれにしても迷子の鉦太鼓が、その子に聴かせる目的でなかつたことだけは、かやせ戻せという唱となえ言ごとからでも、推定することが難くないのである。

加賀の能美郡^{のみ}なども、天狗の人を隠した話の多かつたことは、近年刊行した『能美郡誌』^{のみぐんし}を見るとよくわかる。同じ郡の遊泉寺村では、今から二十年ほど前に伊右衛門という老人が神隠しに遭つた。村中が手分けをして探しまわつた結果、隣部落と地境^{じぎかい}の小山の中腹、土地で神様松という傘^{かさ}の形をした松の樹の下に、青い顔をして坐^{すわ}つていゝのを見つけたという。しかるに村の人たちがこの老人を探しあるいた時には、鯖食^{さば}つた伊右衛門やいと、口々に唱えたという話だが、これはいつでもそういう習わしで、神様ことに天狗は最も鯖が嫌いだから、こういえば必ず隠した者を出すものと信じていたのである（立山徳治君談）。琉球で物迷^{ものまよ}いと名づけて物に隠された人を探すのにも、部落中の青年は手分

けをして、森や洞窟などの中を棒を持ち銅鑼どらを叩き、どこそこの誰々やい、赤豆飯あかまめまいを食えよと大きな声で呼びまわるといふ。よく似た話だがこれも神霊がこれを悪むにくのか否かは分らぬ。内地の小豆飯はむしろこの類の神の好むところと考えられている。鯖という魚の信仰上の地位は、詳つまひらかに調べてみる必要があるのだが、今までは誰も手をつけていなかった。

不思議な事情からいなくなってしまう者は、決して少年小児ばかりではなかった。数が少なかつたろうが成長した男女もまた隠され、そうして戻ってくる者も甚だわずかであった。ただし壮年の男などはよくよくの場合でないと、人はこれを駆落ちしまたは出

ゆっぽん

奔と認めて、神隠しとはいわなかった。神隠しの特徴としては永遠にいなくなる以前、必ず一度だけは親族か知音の者にちらりとその姿を見せるのが法則であるように、ほとんどいずれの地方でも信じられている。盆とか祭の宵とかの人込みの中で、ふと行きがちがって言葉などを掛けて別れ、おや今の男はこのごろいなといったって家で騒いでいたはずだがと心づき、すぐに取って返して跡を追うて見たが、もうどこへ行つても影も見えなかった、という類の例ならば方々に伝えられている。これらは察するところ、樹下にきちんと脱ぎそろえた履物などと一様に、いかに若い者がきまぐ気紛れな家出をする世の中になつても、なおその中には正しく神に召された者がありうることを我々の親たちが信じていようとし

た、努力の痕跡こんせきとも解しえられぬことはない。

『西播怪談実記』という本に、揖保郡新宮村いぼ しんぐうの民七兵衛、

山に薪採りに行きまきて還らず、親兄弟歎き悲みしが、二年を経たる

或る夜、村のうしろの山にきて七兵衛が戻ったぞと大声に呼ばわ

る。人々悦よろこび近所一同山へ走り行くに、麓ふもとに行きつくころまでは

その声がしたが、登ってみると早何処はやどこにもいなかた。天狗の下

男にでもなつたものかと、村の内では話し合っていたが、その後

この村から出て久しく江戸にいた者が東海道を帰ってくる途みちで、

興津の宿とかで七兵衛に出逢つた。これも互いに言葉を掛けて別

れたが家に帰つて聞くとこの話であつた。それからはついに風の

たよりもなかつたということである。すなわちたつた一度でも村

の山へきて呼ばわらぬと、人はやはり駆落ちと解する習いであつた故に、自然にこのような特徴が出てきたのである。

『九桂草堂随筆』卷八には、また次のような話がある。ひろせきよくそう

瀬旭荘先生の実験である。「我郷（豊後日田郡）に伏木と

いう山村あり。民家の子五六歳にて、夜啼きて止まず。戸外に追

出す。其傍そのかたわらに山あり。声稍やや遠く山に登るやうに聞えければ

驚きて尋ねしに終ついに行方知れず。後のち十余年にして、我同郷の人も

一と云ふ者、日向の梓あざさこえ越と云ふ峯を過ぐるに、麓ふもとより怪しき

長七八尺ばかり、満身に毛生じたる物上のほり来る。大いに怖れ走ら

んとすれども、体痺しびれて動かず。其物近づきて人語を為し、汝なんじい

づくの者なりやと問ふ。答へて日田といふ。其物、然らば我郷な

り。汝伏木の児失せたることを聞きたりやと謂ふ。其事は聞けりと答ふ。其物、我即ち其児なり。其時我今仕ふる所の者より収められて使役し、今は我も数山の事を領せりと謂ひて、懐より椽ふところ実みにて製したる餅もちよう様の物を出し、我父母存命ならば、是これを届けてたまはれと謂ふ。何れの地に行きたまふかと問ふに、此これよりしいばやま椎葉山に向ふなりと言ひて別れ、それより路みち無き断崖に登るを見るに、その捷はやきこと鳥の如しといふ。話は余少年の時小一より聞けり。是れ即ち野人なるべし。」

一四 ことに若き女のしばしば隠され

しつと

女の神隠しにはことに不思議が多かった。これは岩手県の盛岡でかつて按摩あんまから聴いた話であるが今からもう三十年も前の出来事であった。この市に住んで醤油の行商をしていた男、留守の家には女房が一人で、或る日の火ともしごろに表おもての戸をあけてこの女が外に出て立っている。ああ悪い時刻に出ているなど、近所の人たちは思ったそうだが、果してその晩からいなくなつた。亭主は気がいのようになつて商売も打棄うちすてて置いてそちこちと捜しまわつた。もしやと思つて岩手山の中腹の網あみはり張温泉に出かけてその辺を尋ねていると、とうとう一度だけ姿を見せたそうである。やはり時刻はもう暮近くに、なにげなしに外を見たところが、宿

からわずか隔たった山の根笹ねざさの中に、腰より上を出して立っていた。すぐに飛びだして近づき捕えようとしたが、見えていながらだんだんに遠くなり、笹原づたいに峯の方へ影を没してしまつたという。

またこれも同じ山の麓しずくの雫しずく石いしという村にはこんな話もあつた。相応な農家で娘を嫁に遣やる日、飾り馬の上に花嫁を乗せて置いて、ほんのすこしの時間手間取てまどつていたら、もう馬ばかりで娘はいなかつた。方々探しぬいていかにしても見当らぬとなつてからまた数箇月ものちの冬の晩に、近くつじの在所あきなの商やい屋やに、五人の者が寄合つて夜話よばなしをしている最中、からりとくぐり戸を開けて酒を買いにきた女が、よく見るとあの娘であつた。村の人

たちは甚だしく動顛どうてんしたときは、まず口を切る勇気を失うもので、ぐずぐずとしていているうちに酒を量らせて勘定をすまし、さつさと出て行ってしまった。それというので寸刻も間を置かず、すぐに跡から飛びだして左右をみたが、もうどこにも姿は見えなかった。多分は軒の上に誰かがいて、女が外へ出るや否や、ただちに空の方へ引張り上げたものだろうと、解釈せられていたということである。

単なる偶然からこの地方の話を、自分はまだいくつとなく聴いて記憶している。それが特に他の府県に比べて、例が多いということを意味せぬのはもちろんである。同県上閉伊郡の鱒ますざわ沢とい

う村で、これも近世の事らしいからもつと詳しく知っている人があるうが、或る農家の娘物に隠されて永く求むれども見えず、今は死んだ者とあきらめっていると、ふと或る日田の掛かけいね稲の陰に、この女のきて立っているのをみた人があつた。その時はしかしもうよほど気が荒くなつていて、普通の少女のようではなかつた。そうしてまたたちまち走り去つて、ついに再び還つてこなかつたといつてゐる。『遠野物語』の中にも書いてある話は、同郡松崎村の寒戸さむとというところの民家で、若い娘が梨なしの樹の下に草履を脱いで置いたまま、行方知れずになつたことがあつた。三十何年を過ぎて或る時親類知音の者が其処に集まつてゐるところへ、きわめて老いさらばうてその女が戻つてきた。どうして帰つてきたの

かと尋ねると、あまりみんなに逢いたかつたから一寸ちよつときた。それではまた行くといつて、たちまちいずれへか走り去つてしまつた。その日はひどい風の吹く日であつたということで、遠野一郷の人々は、今でも風の騒がしい秋の日になると、きようは寒戸の婆ばばの還つてきそうな日だといつたとある。

これと全然似た言い伝えは、また三戸さんのへ郡の櫛くし引村びきにもあつた。以前は大風の吹く日には、きようは伝三郎どうの娘がくるべと、人がことわざのようにしていつていたそうだから、たとえば史実であつてももう年数が経過し、昔話の部類に入ろうとしているのである。風かぜ吹ふきといふことが一つの様式を備えているうえに、家に一族の集まっていたというのは、祭か法事の場合であつたら

うが、それへ来^{きあわ}合せたとあるからには、すでに幾分の霊の力を認めていたのである。釜石地方の名家板沢氏などでは、これに近い旧伝があつて毎年日を定め、昔行き隠れた女性が、何ぴとの眼にも触れることなしに、還つてくるように信じていた。^{たらい}盥に水を入れて表の口に出し、新しい草履を揃えて置くと、いつのまにかその草履も板^{いたべり}縁も、濡れているなどと噂せられた。この家のは娘でなくて、近く迎えた嫁女であつた。精密な記憶が家に伝わっており、いつのころよりか不滅院量外保寿大姉という^{かいみょう}戒名をつけて祀^{まつ}つていた。家門を中心とした前代の信仰生活を、細かに比較研究したうえでなければ断定も下されぬが、恐らくはこれが神隠しに対する、一つ昔の我々の態度であつて、かりにただ一人の

愛^{まなむすめ} 娘^めなどを失うた淋しさは忍びがたくとも、同時にこれによつて家の貴さ^{とうと}、血の清さを証明しえたのみならず、さらにまた眷^{けん}属^{んぞく}郷^{きやう}党^{とう}の信仰を、統一することができたものではないかと思ふ。

伊豆では今の田方^{たがた}郡田中村大字宗光寺の百姓惣兵衛^{そうべえ}が娘はつ十七歳、今から二百十余年前の宝永ごろに、突然家出をして行方不明であった。はつの母親が没して三十三回忌の日、還つてきて家の前に立っていた。近所の者が見つけて声をかけると、答えもせずして走りだしましたいずれかへ往つてしまった。その後も天城山に薪^{まき}を樵^{きり}り、又は宮木を曳^ひきなどに入つた者がおりおりこの女を

見かけることがあつた。いつも十七八の顔形で、身には木の葉などを綴りつづ合わせた珍しい衣服を纏まとうていた。言葉をかけると答えもなく、ただちに遁にげ去るを常としたと『槃遊はんゆう余録』の第三編、寛政四年の紀行のうちに見えている。甲州では逸見筋へんみ浅尾村の孫左衛門を始めとし、金御岳かねのみたけに入つて仙人となつたという者少なからず、東河内領の三沢村にも、薬を常磐山に採つて還かえらなかつた医者がある。今も時としてその姿を幽谷の間に見る者があつて、土人は一様にこれを山男と名づけているが、その出身の村なり家なりでは、永ながくその前後の事情を語り伝えて、むしろ因縁むなの空しからざることを感じていたようでもあつた。

一五 生きているかと思う場合多かり

しごと

少なくとも血を分けた親兄弟の情としては、これが本人ただ一人の心の迷まよいから出たものと解してしまふことが昔はできなかつた。一人ではとうてい深い山の奥などへ、入って行くはずのない童子や女房たちが、現に入つて行き、また多くは戻つて来ぬのだから、誰か誘うた者があつたことを、想像するに至つたのも自然である。実際また山の生活に関する記録の不完全、多くの平野人の法外な無識を反省してみても、かつてそういう奪略者が絶対になかつたとは断言することをえない。問題はただかくのごとき想像の中で、

果してどこまでは一応根拠のある推測であり、またどの点からさきが単に畏怖いふに基づいたる迷信、ないしは誤解であつたらうかということである。

しかも自分たちの見るところをもつてすれば、右の問題の分ぶん堺線いせんととも、時代の移るにつれて始終一定していたわけでもないようである。例えば天狗さまがさらつて行くといふことは、ことに児童少年については近世に入つてから、甚だ頻ひん繁ばんに風説せられるようになったけれども、中世以前には東大寺の良弁ろうべん僧正のように、驚わしに取られたといふ話の方が遙かに多く、その中にもまた稀まれには命を助かつて慈悲の手に育てられ、ついには親の家へ戻つてきた者さえあるように、『今昔物語』などには語り伝えて

いる。それから引続いてまた世上一般に、鬼が人間の子女を盗んで行くものと、思っていた時代もあつたのである。

鎌倉期の初頭あたりを一つの堺さかいとして、その鬼がまた天狗にその地位を委譲したのは、東国武士の実力増加、都鄙盛衰とひの事情を考え合わせても、そこでなんらかの時勢の変化を暗示するものがあるように思う。その天狗の属性とてもゆくゆく著しく変遷して、もとより今をもって古いにしえを推すことはできぬが、鬼の方にもやはり地方的に、または時代に相応した特色ともいうべきものがあつたらしいのである。例えば在原業平ありわらのなりひらの悠遊ゆうゆうしているところには、鬼おに一口ひとくちに喰くいてんけりといったが、大江山の酒顛童子しゅてんどうじに至つては、都に出でて多くの美女を捕え来り酌しやくをさせて酒を飲むよう

な習癖があつたものごとく、想像せしめた場合もないではなかつた。天狗ばかりは僧形であつただけに、感心に女には手を掛けないようだと話がきまると人は別にまた山賊さんぞくの頭領とうりやうという類きやうの兇漢きやうかんを描き出して、とにかくにこの頻々ひんぴんたる人間失蹤しつそうの不思議を、説明せずにはおられないようであつた。しかも實際は小説・御伽草子おとぎぞうし・絵巻物えまきもの以上の的確とつきとに真相を突留めることは、求めたからとてできることではなかつた。

別離を悲しむ人々の情からいえば、いかなる場合にもまだどこかの谷陰たにかげに、生きて時節を待つているものと、想像してみずにはいられなかつたでもあろうが、単にそのような慾目よくめからでなくとも、現実に久しい歳月を過ぎてのち、ひよつこりと還つてきた

先例もあれば、またたしかに出逢であつたという人の話を、聞きだした場合も多かつたのである。単に深山に女の姿を見たというだけの噂ならば、その他にもまだいろいろと語り伝えられていた。たとえそれがわが里でいなくなつた者とは何の関係もなく全然見ず知らずの別の土地の事件であつても、とにかくに人居を遠く離れた寂せき寞ぼくたる別世界にも、なお何か人間の生きて行く道があるらしいという推測は、どのくらい神隠しの子の親たちの心を、慰めていたかわからぬので、それがまた転じてはこの不思議の永く行われ、気の狂うた者の自然に山に向う原因ともなつたのは、是非もない次第であつた。

かつては天狗に関する古来の文献を、集めて比較しようとした人がおりありあつたがこれは失望せねばならぬ労作であつた。資料を古くひろ弘く求めてみればみるほど輪廓りんかくは次第に茫漠ぼうぼくとなるのは、最初から名称以外にたくさんの一致がなかつた結果である。例えば天狗とは一体どんなものかと聞いてみると、今日誰しも答えるのは鼻のむやみに高いことであるが、これとても狩野古かのうこほう方眼げんが始めて夢想したという説もあつて、中古には緋ひの衣ころもに羽は団扇うちわなどを持った鼻高はなたかさ様は想像することができなかつたのである。そのうえに何々坊はいかの輩下はいかという天狗だけは、口くちばしが嘴くちばしになり鼻は穴だけがその左右についている。同じ一類で一方は人のごとく、他方は翼があつて鳥に手足を加えたもののごとくなることは、ほ

とんとありえざる話であるが、人は単に変形自在をもつてこれを説明して、しからば本来の面目めんもく如何いかんという点を、考えずに済ましていたのである。それなら実際の行動の上に、何か古今を一貫した特色でもあるかというところ、中世の天狗はふらりときて人に憑つくこと野狐のごとく、或いは左道の家に祭られて人を害するは、近世の犬神オサキのごとくであつたが、今は絶えてその類の非難を伝えない。或いは智弁学問ある法師の増上ぞうじょう慢まんが、しばしば生きながら天狗道に身を落さしめたという話もある。平田先生などは特にこの点ばかり、仏者の言を承認しようとしているが、これさえ近世の天狗はもう忘れたもののごとく、むしろしばしば人間の慢心を懲こらし戒めたという実例さえあつて、自慢を天狗とい

う昔からの諺ことわざも、もはや根拠のないものになろうとしている。それというのが時代により地方によつて、名は同じでも物が知らぬまに變つていたからである。書物はこういう場合にはたいていはむしろ混乱の種であつた。学者ばかりがひとりで土地の人々の知らぬことを、考えていた例は多かつた。なるほど天狗という名だけは最初仏者などから教わつたらうが奇きつ怪かいはずつと以前から引續いてあつたわけで、学者に言わせるとそんなはずはないという不思議が、どしどしと現れる。日本で物を買うような理窟りくつには行かなかつたのである。天狗をグヒンというに至つた原因もまだ不明だが、地方によつてはこれを山の神といい、または大人おおひと・山人ともいって、山男と同一視するところもある。そうして必ずし

も兜巾とぎんすずかけ篠懸やまぶしすがたの山伏姿やまぶしすがたでなく特に護法と称して名ある山寺な
 どに従属するものでも、その仏教に対する信心は寺てらぎむらい侍・寺百
 姓以上ではなかつた。いわんや自由な森林の中にいるという者に
 至つては、僧徒らしい気分などは微塵みじんもなく、ただ非凡なる怪力
 と強烈なる感情、極端に清浄を愛して叨みだりに俗衆の近づくを憎み、
 ことに隱形自在にして恩おんしゆう讎みだともに常人の意表に出でた故に、
 畏おそれ崇あがめられていたので、この点はむしろ日本固有の山野の神に
 近かつた。名称のどこまでも借り物であつて、我々の精神生活の
 これに左右せられた部分の存外ぞんがいに小さかつたことは、これからだ
 けでも推論してよいのである。山中にサトリという怪物がいる話
 はよく方々の田舎で聴くことである。人の腹で思うことをすぐ覺さと

つて、遁にげようと思つてゐるななどといひあてるので、怖おそろしくて
どうにもこうにもならぬ。それが桶屋おけやとか杉の皮を剥さく者とかと
対談している際に、不意に手がすべつて杉の皮なり竹の輪の端が
強く相手を打つと、人間という者は思わぬことをするから油断が
ならぬといつて、逃げ去つたというのが昔話である。それを四国
などでは山爺の話として伝え、木葉の衣を着て出てきたともいえ
ば、中部日本では天狗様が遣やつてきて、桶屋の竹に高い鼻を弾はじか
れたなどと語つてゐる。その土地次第でこういつても通用したの
である。オニなども今では角つのあつて虎とらの皮をたふさぎとし、必ず
地獄に住んで亡もうじや者をさいなむ者のごとく、解するのが普通にな
つたらしいが、その古来の表現は誠に千変万化でまた若干はこれ

に充てたる漢語の鬼の字によつて、世上の解説を混乱せしめてい
る。しかも諸国の山中に保存せられた彼らの遺跡、ないしは多く
の伝説によつて考えると、少なくとも或る時代には、近世天狗と
名づけた魔物の所業の大部分を、管轄していたこともあるのであ
る。いずれにしても我々の畏怖には現実の基礎があつた。単に輸
入の名称によつて、空に想像し始めたものではなかつたのである。

不在者の生死ということとは非常に大きな問題であつた。どうせ
いないのは同じだと、言つてすませるわけには行かなかつた。生
者と死者とでは、これに対する血縁の人々の仕向けしむが、正反対に
異ならねばならなかつたからである。生きてゐる者の救済も必要

ではあるがこれは徐ろおもむに時節を待っていることもできる。これに反して死者は魂が自由になって、もう家の近くに戻ってきているかも知れぬ。処理せられぬ亡魂ほど危険なものはない。或いは淋しさのあまりに親族故旧を誘うこともあり、または人知れぬ腹立ちのために、あばれまわることもしばしばあった。その予防の手段は仏教以前から、いろいろ綿密わづらに講究せられていたのである。しこうしてその手段は通例甚だ煩わしい。かつ誤まって生者のためにこれを行うときは、その害もまた小さくなかった。故に単なる愛惜の情からでなくとも、一日も早くなんらかの兆候を求めて隠れてもなお生存していることを確かめておく必要があったのである。アンデルセンが「月の物語」の初章に、深夜に谷川に降くだ

つて燈ともを水しみづに流し、思う男の安否やすやすを卜ぼくせんとしたインドの少女が
「活いきている」と悦よろこんで叫こゑんだ光景あかりが叙のべてある。普通は生死を
軽く考える東洋人が、この際ばかり特に執着せつの切なる情を表わす
理由は、全く死に伴うた嚴重じゆうじゆうの方式があつたため、旅の別れの
哀あはれな歌にも、かつはこの心こころ元もとなさがまじつていたのである。
夢ゆめというものの疎おろそかにせられなかつた原因もここにある。互いに
見よう見えようという約束が、言わず語らずに結ばれていたので
ある。それが頼みにしにくくなつてのち、書かき置おきという風習が次
第に行われた。神隠しだけはこういう一切の予定を裏切つて、突
如として茫ぼう漠ぼくの中に入つてしまふのだが、しかも前後の事情と
代々の経験とによつて、一応はやや幸福の方の推測を下すことが、

存外にむつかしくなかつたらしいのである。

一六 深山の婚姻のこと

昔話の中にもおりおり同じ例を伝えているために、かえつて信じうる人が少なからうかと思うがこれはすでに十七八年も以前に筆記しておいた陸中南部の出来事であつてこの小さな研究と深い因縁がある故に、今一度じつと考えて見ようと思うのである。或る村の農家の娘、栗を拾いに山に入つたまま還つて来ず、親はもう死んだ者とあきらめて、枕まくらを形かたしろ代かえに葬送をすませてしまつて、また二三年も過ぎてからの事であつた。村の獵人かりうどの某という者

が、五葉山ごようざんの中腹の大きな岩の陰において、この女ゆきあに行逢つて互いに喫驚びつくりしたという話である。

あの日に山で怖ろしい人にさらわれ、今はこんなところにきて一緒に住んでいる。遁にげて還ろうにも少しも隙すきがない。そういううちにもここへくるかも知れぬ。どんなことをするか分らぬというので碌ろくに話も聞かずに早々に立退たちいてしまったということである。その男というのは全体どんな人かと獵人が尋ねると、自分の眼には世の常の人間のように見えるが、人はどう思うやらわからぬ。ただ眼の色が恐ろしくて、せいがずんと高い。時々は同じような人が四五人も寄り集まって、何事か話をしてまたいずれへか出て行く。食べ物なども外から持つて還るのをみると、町へも買

物に行くのかも知れぬ。また子どもはもうなんべんか産んだけれども、似ていないから俺おれの児ではないといつて、殺すのか棄すてるのか、みないずれへか持って行つてしまつたと、その女が語つた
そうである。

山が同じく五葉山であるから、一つの話ではないかとも思うが或いはまた次のように話す者もあつた。女は獵人に向かつて、お前とこうして話しているところを、もしか見られると大変だから、早く還つてくれといったが、出逢であつてみた以上は連れて還らねばすまぬと、強しいて手を取つて山を下り、ようやく人里ひとさとに近くなつたと思うところに、いきなり後から怖ろしい背の高い男が飛んできて、女を奪い返して山の中へ走り込んだともいつている。維新

前後の出来事であつたらしく、まだその娘の男親だけ、生存しているといつて、家の名まで語つたそうである（佐々木君報）。これだけこみい込入つたかつ筋の通つた事件は、一人の獵人の作為に出たと思われぬはもちろん、よもや突然の幻覺ではなからうと思うが、それを確認させるだけの証拠も、残念ながらも存在せぬのである。ただ少なくとも陸中五葉山の麓ふもとの村里には、今でもこれを聴いて寸毫すんごうも疑い能あたわざる人々が、住んでいることだけは事実である。そうして彼らがほぼ前の話を忘れようとするころになると、また新たに少し似たような話が、どこからともなく伝わってくることに、これまではほとんときまっていたのである。

右の珍しい实例の中でことに自分たちが大切な点と考えるのは、

不思議なる深山の婿の談話の一部分が女房にも意味がわかっていたということ、その奇怪な家庭における男の嫉妬しつとが、極端に強烈なものであつて、わが子をさえ信じえなかつたほどの不安を与えていたこととである。すなわち彼らはもし真の人間であつたとしたらあまりにも我々と遠く、もしまた神か魔物かだつたというならば、あまりにも人間に近かつたのであるが、しかも山の谷に住んだ日本の農民たちが、これを聴いてありうべからずとするところができなかつたとすれば、それは必ずしも漠然ぼくぜんたる空夢ではなかつたろう。誤つたにもせよなんらかの實驗、なんらかの推理のあらかじめ素地そじをなしたものが、必ずあつたはずと思う。現代人の物を信ぜざる権利は、決してこれによつて根強い全民衆の迷信

を、無視しうるまでの力あるものではないのである。

かつて三河の宝飯郡ほいの某村で、狸たぬきが一人の若者に憑ついたことがあつた。狐などよりは口軽く、むやみにいろいろのことをしゃべるのが、この獣の特性とせられているが、この時も問わず語りにおれはこの村の誰という女を、山へ連れて往つて女房にしているといつた。でたらめかとは思つたが、実際ちようどその女がいなくなつて、しきりに捜している際であつた故に、根ほり葉ほりして隠しておくという場処を問いただし、もしやというので山の中を捜して見ると果して岩穴の奥とかにその娘がいたということである。還つてきてから本人が、どういふ風に顛てんまつ末を語つたか。

この話をしてくれた人も聞いてはおらず、また強いて詳しくその点を究めるまでもないか知らぬが、風説にもせよ世を避けて山に入つて行く若い女を一種の婚姻のごとく解する習わしは弘く行なわれていたので、それが不条理であればあるだけに、底に隠れた最初の原因が、ことに学問として尋ねて見る価値を生ずるのである。猿の婿むこいり入の昔話は、前にすでに大要を叙のべておいたが、これにも欺き終おせて無事に還つてきたという童話式のものほかに、とうとう娘を取られたという因縁話も伝わっている。竜蛇の婚姻に至つては末遂すえとげて再び還らなかつたという例がことに多い。黒髪長くまみ清らかなる者は何びともこれを愛好する。齡盛よわびかりにして忽然こつぜんと身を隠したとすれば、人に非あらずんば何か他の物が、

これを求めたと推断するが自然である。特に山男の場合に限つて、^{もく}目するに現実の遭遇をもつてする理由はないのかも知れぬ。ましてや世界の諸民族に共通なる、いわゆるビートス・エンド・ビウテイーの物語の、これが根原の動機をなすかのごとく、説かんとすることは速断に失するであろう。また今日までの資料では、強いてその見解を立てるだけの勇氣は、自分たちにもまだないので、ただ注意してもよいことは日本という国には、近世に入つてからもこの類の話が特に数多く、またしばしば新たなる实例をもつて、古伝を保障しようとしていたことである。普通の場合には俗に「みいられた」とも称し、女が何かの機会に選定を受けたことになつており、伊豆の三宅島^{みやけじま}などには山に住む馬の神がみい

ったという話もあつて、過度に素朴なる口碑は諸国に多く、そう
 でなければ不思議な因縁がその女の生まれた時から附纏つきまとい、ま
 たは新たなる親の約束などがあつて、自然にその運命に向わねば
 ならなかつたように、語り伝えているに反して、別に我々が聴き
 えたる近年の例は、全く偶然の不幸から掠奪せられて山に入つて
 いる。そうしていかにも人間らしい強い執着をもつて、愛せられ
 かつ守られていたというのである。それを単なる昔話の列おしなに押
 並らべて、空想豊かなる好事家こうずかが、勝手な尾緒おひれを附添つきそえたかのご
 とく解することは、少なくとも私が集めてみたいいくつかのぼうしよ旁
 証うが、断じてこれを許さないのである。

一七 鬼の子の里にも産まれしこと

母は往々にして不当に疑われた。似ておらぬからわが子でないという単純に失した推断は必ずしも独りひと五葉山中の山人のみの専売でもなかつたのである。至つて平和なる里中にも親に似ぬ子は鬼子という俚諺りげんは、今もつて行われていて、時々はまたこれを裏う書らするがような事件が、発生したとさえ伝えられるのである。

「日本はおろかなる風俗ありて、齒はの生えたる子を生みて、鬼の子と謂いひて殺しぬ」と、『徒然つれづれなぐさみぐさ慰草』の卷三には記してある。江戸時代初め頃の人の著述である。なおそれよりも遙かに古く、『東山往来』という書物の消息文の中にも、家の女中が齒の

生えた児を生んだ。これ鬼なり山野に埋むるにしかずと近隣の者が勧めるが、いかがしたものだろうかという相談に答えて、坊主にするのが一番よろしかろうといっている。すなわち以前は相応に頻々と、処々にこのような異様の出来事があつたかと思われるのである。

けだし人はとうてい凡庸を愛せずにはおられなかつた者であるうか。前代の英雄や偉人の生い立ちに關しては、いかなる奇瑞でも承認しておりながら、事一たび各自の家の生活に交渉するとき、寸毫も異常を容赦することができなかつた。近世に入つてからも、稀には齒が生えて産れるほどの異相の子を儲けると、たいていは動顛して即座にこれを殺し、これによつて酒顛童子

・茨木童子いばらきどうじの如き悪業の根を絶つた代りには、一方にはまた道

場法師や武蔵坊弁慶の如き、絶倫の勇武強力を發揮する機会をも与えなかつた。これ恐らくは天下太平の世の一弱点であつたらう。

しかも胎内変化の生理学には、今日なお説き明かしえない神秘の法則でもあるのか。このような奇怪な現象にも、やはり時代と地方とによつて、一種の流行のごときものがあつた。詳しく言うならば、鬼を怖れた社会には鬼が多く出てあばれ、天狗を警戒しているると天狗が子供を奪うのと同様に、牙きばありまた角つある赤ん坊の最も数多く生まれたのは、いわゆる魔物の威力を十二分に承認して、農村家庭の平和と幸福までが、時あつて彼らによつて左右せられるかのごとく、氣遣きづかつていた人々の部落の中であつた。

鬼子の最も怖ろしい例としては、明応七年の昔、京の東山の獅子しが谷たにという村の話が、『奇異雑談集』の中に詳しく報ぜられている。『玄同放言』三卷下には全文を引用しているが、記事にはあやふやな部分がちつともなく、少なくとも至つて精確なる噂ききがきの聞書である。その大要のみを挙げると、この家の女房三度まで異物を分ぶん娩べんし四番目に産んだのがこの鬼子であった。生まれ落ちたとき大きき三歳子のごとく、やがてそこらを走りある故に、父追いかけて取りすくめ膝ひざの下に押しつけてみれば、色赤きこと朱しゆのごとく、両眼の他に額ひたいになお一つの目あり、口広く耳に及び、上に齒二つ下に齒二つ生えていた。父嫡ちやく子をよびて

横槌よこづちを持ってこいというど、鬼子これを聞いて父が手に咬かみつくのを、その槌をもつて頻しきりに打つて殺してしまった。人集まりてこれを見ること限りなしとある。その死骸しがいは西のおおじしんによどう大路真如堂の南、山際の崖がけの下に深く埋めた。ところがその翌日田舎の者が三人、梯子はしごをかたげてこの下を通り、崖の土の少しうごもてるを見て、土竜鼠むぐらもちがいるといつて柵おうちのさきで突いて見ると、ひよつくりとその鬼子が出た。三人大いに驚いてこれは聞き及んだ獅子が谷の鬼子だ。ただ早く殺すがよいと、柵ふるを揮うて頻に打ち、ついにこれを叩き殺した。それを惨酷ざんこくな話だが、繩をつけて京の町まで曳ひいてくると途中多くの石に当たつたけれども、皮膚強くして少しも破れずとまで書いてある。この事常楽時のせいあんけんりんこ栖安軒琳

公^{こう} 幼少^{こう} 喝^{かつ} 食^{しき}の時、崖の下にて打ち殺すをまのあたり見たりといえりとあつて、事件の当時から約九十年後の記述である。

何故に親が大急ぎで、牙の生えた赤子を殺^{さつ} 戮^{りく}せねばならなかつたかは、じつは必ずしも明瞭ではない。家の外聞とか恥とかいうのも条理に合わなかつた。殺してこれを清める望みはなかつたのみならず、匿^{かく}し終おせた場合さえ少なかつた。しからば活^いかして置いて何が悪いかと尋ねてみると、これまた格別のことはなかつたのである。兇^{きよう} 暴^{ぼう} 無類の評ある大江山の酒顛童子、その子分か義兄弟のごとく考えられた茨木童子なども、単に今まで見^みず知らずの他人に対して残忍であつたというのみで、翻^{ひる}つてそ^{がえ}の家

庭生活を検すれば、思いのほかなるものがあつた。『越後名寄』えちごなよせ

卷三十三その他の所伝によれば、酒顛童子はこの国西蒲原郡砂いさご

子塚づか、または西川桜林村の出身と称しておのおのその旧宅の址あと

があつた。附近の和納わのうという村にも後に引越してきたといつて今

なお榎の老木ある童子屋敷、下名さげなを童子田どうじたと呼ぶ水田もあつた。

童子幼名を外道丸と名づけられ美童であつた。父の名は否瀬善次

兵衛俊兼、戸隠山くずりゆうごんげん九頭竜権現の申し児であつて、母の胎内に十

六箇月いたというだけが、親に迷惑をかけたといえばかけたので

ある。和納の楞嚴寺りようごんじで文字を習い、国上くがみの寺に上つて侍童とな

るまでは不良少年でも何でもなかつた。茨木童子の故郷も摂津に

ある方が正しいのかも知れぬが、これまた越後にも一箇処あつて、

今の古志郡こし荷頃村にころ大字軽井沢、茨木善次右衛門はその生家と称し、連綿として若干の記憶を伝えていた。例えば家の背後に童子が栖すんだという岩屋、それは崩れてその跡に清き泉湧わき、流の末には十坪ばかりの空地あつて、童子出生の地と称して永く耕作をさせなかつた。悪人に対する記念ではなかつたのである。

撰州川かわ辺郡東富松の部落においては、すでに茨木童子の家筋いえすじ

は絶えたかわりに、更に一段と心を動かすべき物語が残っていた。『撰陽群談』せつやうぐんだん卷十に曰う。童子生まれながらにして牙生い髪長く、眼に光あつて強盛なること成人に超えし故に、一族畏怖いふしてこれを茨木の辺に棄すてたところ、丹波千丈せんじようがだけ岳の強盜酒顛童子拾い還りて養育して賊徒となす云々。しかも両親がのちに病

に罹^{かか}つて同じ枕に寝ているのを、術をもつて遙かにこれを知り、心配をして見舞に還つてきたというのは、やはり松崎の寒戸^{さむと}の婆などの例であろう。ただいまは京都に留まつて、東寺の辺に安住している。人に怖ろしい姿を見せぬように、急いで還ろうと飛んで往つたという田圃路^{たんぼみち}に、安東寺の字名^{あぎな}などが残つており、その時親^{よろこ}が悦んで団子^{だんご}を食わせた記念として、毎年同じ日に村では団子祭をするといっている。

戦いがなくなり国中が統一してしまふまでは、こういう義理固い無茶者は、求めても養つて置く必要が時としてはあつた。いわば百姓の家に生まれたのが損だったのである。肥後の川上^{かわかみげんさ}彦齋^いの伝を見てもそう思うが、江戸幕府の初頭に刑せられたあぶ

れ者、大鳥一兵衛などについてはことにその感が深い。ほんのも
 う四十年か五十年早く生まれていたら、彼は大名になつたかも知
 れぬのである。一兵衛自身の身の上話というのは、『慶長見
もんしゅう聞集』巻六に出ている。「武州大鳥といふ在所に利生りしゅうあらた
 かなる十王まします。母にて候そうろふ者子無きことを悲み、此十王堂
 に一七日籠こもり、満あかつきずる暁に靈夢の告つげあり、懐胎して十八月にして
 それがし誕生せしに、骨柄こつがらたくましく面の色赤く、向ふ齒あつ
 て髪はかぶろなり。立つて三足歩みたり。皆人是これを見て悪鬼の生
 れけるかと驚き、既に害せんとせし処に、母之これを見て謂ひけるや
 うは、なう暫く待ちたまへ思ふ仔細しさいあり、是は十王への申し児な
 れば、其そのしるし有りて面の色赤し云々と申されければ、我を助け

置き幼名を十王丸と謂へり」とある。祈る仏も多くあつた中に、特に閻魔えんまに児を申したというのは、別に近代の母親の相続せざる、一種戦国時代相應の理想があつたためかと思う。そうではないまでも大王が事を好み、余計な迷惑を信徒に与えんとしたのでないことだけは、一般にこれを認めていたように見えるが、しかもそれは京都とその附近で、盛んに牙ある赤子を撲ほく殺さつした時代よりも、またずつと後年の田舎の事であつた。

内田邦彦君くにひこの『南総之俚俗なんそうのりぞく』の中に、東上総ひがしかずさの本納辺ほんのうの慣習として、鬼子が生まれると歳神様としがみさまへ上げた棒たで叩くとある。これとよく似たことで今日弘く行われているのは赤ん坊があまり早く例えば一年以内にあるき始めると、大きな餅もちを搗ついてこ

れを脊負わせ、それでもなおあるくと突き倒したりする親がある。鬼子というのは多分齒が生えて産れる子のことであろうが単に殺すことを許されぬ故にこんな方法をのちに代用したものとみても、なお歳神の棒ということには、考え出さねばならぬ深い意味がある。或いは本来はこのうえもない立派な児であるけれども凡人の家にとつては善^よ過^すぎるために、その統御を神に委ねるの意味ではなかつたか。いずれにもせよ後世の民家で、怖れて殺したほどの異常なる特徴は、同時にまた上古の英傑勇士名僧等の奇瑞として、尊敬して永く語り伝えたものと一致し、さらに常理をもつて判断しても、それがことごとく昔の個人生活の長処ばかりであつたことを考えると、野蛮な風習だから大昔からあつたらうと、手輕に

推斷することもできぬようである。人間の畸形きけいにも不具と出来過
 ぎとが確かにある。大男も片輪かたわのうちかぞに算えるのは、いわゆる鎖
 国時代の平民の哀れな遠慮であろう。蝦夷のシヤグシヤインやツ
 キノイ、南の小島では赤蜂あかぶさほん本瓦ほんがわらや与那国の鬼虎おにとらのごとき、
 容貌魁偉かいいなる者は多くは終りを全うしなかつた。それを案じて家
 にこのような者の生まれるを忌んだのはおそらくは新国家主義の
 犠牲であつた。部曲が対立して争闘してやまなかつた時代には、
 いわゆる鬼の子はすなわち神の子で、それ故にこそ今も諸国の古
 塚あぼを発くと、往々にして無名の八掬脛やつかはぎや長髓彦ながすねひこの骨が現れ、
 もしくは現れたと語り伝えて尊信しているのである。

沖繩の『遺老説伝いろうせつでん』には次のような話がある。「昔宮古島川か

満むらの邑むらに、天仁屋大司あめにやおおつかさといふ天の神女、邑むらの東隅なる宮森に來り寓ぐうし、遂ついに目利真按司めりまあんじに嫁して三女一男を生む。夫死して妻のみ孤兒を養ふに、第三女真嘉那志さかなし十三歳、忽たちまち懐胎して十三月にして一男を坐下ざかす。頭には双角そうかくを生じ眼は環たまきを懸かくるが如く、手足は鷹たかの足に似たり。容貌ようぼう人の形に非あらず。故に之を名づけて目利真角嘉和良と謂ふ。年十四歳の時、祖母天仁屋及び母真嘉那志に相あい随したがひて、俱ともに白雲に乗りて天に升のぼる。後年しばしば屡しばしば目利真山に出現して、靈驗を示す。邑むら人尊信して神岳と為なす」と。

ツカサは巫女を意味しまた多くは神の名であつた。カワラは沖繩の按司あんじと同じく、また頭目とうもくのことである。先島の神人には角を名につくものが他にもある。すなわち神の子であり、のちまた神

に隠されたる公けの記録が、かの島だけにはこれほど儼然げんぜんとして伝わっているのである。殺すということは少なくとも、古代一般の風習ではなかつた。

一八 学問はいまだこの不思議を解釈

しえざること

嘘かとは思うが何郡何村の何某方と固有名詞が完全に伝わっている。今から三十年ほど以前に、愛媛県北部の或る山村で、若い嫁が難産をしたことがあつた。その時腹の中から声を発する者があつて、おれは鬼の子だが殺さぬなら出て遣やる。もし殺すならば

出て遣らぬがどうだと言う。活かして置くのは家の名折れとは思
つたが、いつまでも産れないでは困る故に、皆で騙だまして決して殺
さぬという約束をした。そうして待構ござえていて莫産で押えて殺し
てしまった。角の長さが二寸ばかり、秘密にしていたのを遠縁の
親類の女が知つて、ついにこの話の話し手にしやべつたのが私に
も聴えた。ただしどうしてまたそのような怖ろしい物を孕はらんだか
は、今に至るまで不明であるが、この近傍には鬼子の例少なから
ず、或る村の一家のごときは鬼の子の生まれる少し以前に、山中
に入つて山姥やまうばのオツクネという物を拾い、それから物持ものもちにな
つたかわりに、またこういう出来事があつたという。オツクネと
は方言で麻糸の球のこと、山姥の作つたのは人間の引いたのとは

違つて、使つても使つてもなくならぬ。すなわちいわゆる尽きぬ宝であつた。

また大隅海上の屋久島やくのしまは、九州第一の高峯を擁して、山の力の今なお最も強烈な土地であるが、島の婦人は往々にして鬼の子を生むことありと、『三さん国名勝ごくめい図会しやうずえ』には記している。「山中に入りたる時しき頻りに睡眠を催し、異人を夢みることあれば必ずはら娠む。産は常の如くにしてたゞ終りて後のち神気快からずと雖いえども死ぬやうなことは決して無い。生れた児は必ず齒を生じ且つ善よく走る。仍よつて鬼子とは謂いふ也」とある。かくのごとき場合には、柳の枝をその児の口にくわえさせて、これを樹の枝ひっかけに引懸ひっかけて置くと、一夜を過ぐれば必ず失せてなくなるといつていた。普通の赤ん坊なら

ば無論活きているはずはないのだが、島の人々は或いは父方に引き取つて、養育しているものごとく考えていたものらしい。前後の状況は甚だしく相違するが、とにかくにこれも一種の神隠しではあつた。

日向南部の米良山めらやまの中にも、入つて働いている女の不時ねむに睡くなるというところがあつた。そういう際にはよく妊娠することがあつて、これを蛇の所業のごとく信ずる者もあつたという。現に近年も某氏の夫人、春の頃に蕨わらびを採りに往つてその事があつたので、もしや蛇の子ではないかと思つて、産をしてしまうまで一通りならぬ心痛をしたそうである。古い書物に巨人の跡を踏み、或いは玄鳥の卵を呑んで感じて身ごもることありと記したのも、多

分はこういう事情を意味したものであろう。氣高い若人が夜深く訪ねてきたという類の話にも、最初にたにがわ溪川の流に物を洗いに降りて、美しい丹塗にぬりの箭やが川上からうか泛んできたのを、拾うて還つて床かたわらの側に立てて置いたという例があるのを見ると、また異常なる感動をもつて、母となる予告のごとく解していた、昔の人の心持が察せられる。ただ村民の信仰がおいおいに荒すさんできてこういう奇瑞の示された場合にも、怖ふ畏いの情ばかり独ひとり盛んで、とかくに生まれる子を粗末にした。大和の三輪みわの神話と豊後の尾形氏の古伝とは、或いはその系統を一にするかとの説あるにもかかわらず、後者においては神は誠に遠慮勝ちで、岩がんくつ窟の底に潜んで永く再び出でなかつた。その他の地方の多くの類例に至つては、鏝かね

の針に傷きずけられて命終るといい、普通には穴の口に近よつて人が
 立聴よもぎきするとも知らず蓬しょうぶと菖蒲しょうぶの葉の秘密を漏した話などにな
 つており、うばたけ 嫗岳だいだわらわの大太童のごとく子孫が大いに栄えたとい
 う場合は、今ではこれを見出すことがやや難くなつているのである。
 『作陽志さくようし』には美みまさか作かとまだ苦田郡越こしはた畑の大平山に牛鬼と名づくる
 怪あり。寛永中に村民の娘年二十ばかりなる者、恍こうこつ惚つとして一
 夜男子に逢う。自ら鍔山の役人と称していた。のちに孕はらんで産む
 ところの子、両牙長く生おい尾角ともに備わり、儼げんとして牛鬼のご
 とくであつたので父母怒つてこれを殺し、鍔くしの串に刺して路傍に
 暴さらした。これ村野の人後患えんを厭するの法なり云々とあつて、昔は
 さしも大切に事つかえた地方の神が、次第に軽ぜられのちついに絶縁

して、いつとなく妖怪變化ようかいへんげの類に混じた経路を語っている。そうしていずれの場合にも、鍔つばという金属が常に強大な破壊力であった。屋久島などでもことに鍛冶かじの家が尊敬せられ、不思議な懐胎には必ず鍔つば滓かなくそを貰もらつてきて、柳の葉とともに合せ煎せんじて飲むことになつていたそうである。

山に入って山姥のオツクネなるものを拾つた故に、物持にもなつたかわり鬼子も生まれたという話には更に一段と豊富なる暗示を含んでいるらしい。山姥はなるほど多くの神童の母であり、同時にまた珍しい福分ふくわけの主ぬしでもあつたことは、次々にもなお述べると、諸国の昔からの話の種であつたが、特に常人の女性に

角ある児を産ましめるために、彼女が干渉すべき必要はなかつたはずである。察するところ本来この不可思議の財宝は、むしろ不可思議な童子に伴うて神授せらるべきものであつたのを、人が忘却してこれを顧みぬようになってから、山中の母ばかりが管理をすることとなつたのであろう。この想像を幾分か有力にするのは、ウブメ（産女）と称する道の傍かたわらの怪物の話である。支那で姑獲こかくと呼ぶ一種の鳥類をこれに当てて、産で死んだ婦人の怨魂えんこんが化成するところだの、小児に害を与えるのを本業にしているのと、古い人たちは断定してしまつたようだが、それでは説明のできない著しい特徴には、少なくとも氣に入つた人間だけには大きな幸福を授けようとしていた点である。すなわちウブメ鳥と名づくる一

種の怪かいきん禽きんの話^を別にして考えると、ウブメは必ず深夜に道の畔あぜに出現し赤子あかごを抱いてくれといつて通行人を呼び留める。喫驚びつくりして逃げてくるようでは話にならぬが、幸いに勇士等が承諾してこれを抱き取ると、だんだんと重くなつてしまひには腕が抜けそうになる。その昔話はこれから先が二つの様式に分かれ、よく見ると石地蔵であつた石であつたといふのと、抱き手が名僧でありウブメは幽霊であつて、念仏または題目の力で苦艱くかんを濟すくつてやつたといふのとあるが、いずれにしても満足に依託いたくを果した場合に、非常に礼を言つて十分な報謝をしたことになっている。仏道の縁起に利用せられない方では、ウブメの礼物は黄金の袋であり、または取れども尽きぬ宝であつた。時としてその代りに五十人百

人力の力量を授けられたという例も多かったことが、佐々木君の『東奥異聞』とうおういぶんなどには見えている。『今昔物語』以来の多くの实例では、ウブメに限らず道の神は女性で喜怒恩怨が一般に気紛きまぐれであった。或る者はこれに逢うて命を危くし、或る者はその因縁から幸運を捉とらえたことになっている。後世の宗教観から見るときは甚だ不安であるためにだんだんと畏怖の情を加えたのだが、神に選択があり人の運に前定があつたと信じた時代には、これもまた禱いのるに足りた貴き霊であつたに相違ない。つまりは児を授けられるというのは優れた児を得るを意味し、申し児というのは子のない親ばかりの願いではなかつたのである。そうして山姥のごとき境遇に入つてでも、なお金太郎のごとき子を欲しがつた社会

が、かつて古い時代には確かにあつたことを、今はすでに人が忘れているのである。

一九 山の神を女性とする例多きこと

人の女房を山の神という理由としては、いろはの中ではヤマの上かみがオクだからなどと馬鹿げた説明はすでに多い。或いは里神さとかぐ樂らの山の神の舞に、杓子しゃくしを手に持つて出て舞うからというなどは、もつともらしいがやや循環論法じゆんかんろんぽうの嫌きらいがある。何の故に山の神たる者がかくのごとく、人間の家刀いえとじ自の必ず持つべきものを、手草たぐさにとつて舞うことにはなつたのか。それがまず決すべ

き問題だといわねばならぬ。杓子はなるほど山中の産物であつて、最も敬^{けい}虔^{けん}に山神に奉仕する者が、これを製して平野に持ち下る習いではあつたが、ただそのみでは神自らこれを重んじ、また多くの社においてこれを信徒に頒与するまでの理由にはならぬ。岐阜県の或る地方では以前は山の神の産^{うぶ}衣^{ぎぬ}と称して長さの六七尺もある一つ身^{ひとみ}の着物を献上する風があつたというが、今はいかがであろうか。これに対しては子育て^{まもり}の守として、巨大なる山杓子を授けた社もあつたという。越前湯尾峠^{ゆのお}の孫杓子を始めとし、今でも杓子には小児安全の祈^き禱^{とう}を含むものが多い。山と女性または山と産育というがごとき、一見して縁の遠そうな信仰が、かつてその間に介在しなかつたならば、とうてい我々の家内の者に、

そのようないかめしい綽名あだなを付与するの機会は生じなかつたはずである。

山の神は通例諸国の山林において、清き木清き石について、臨時まつにこれを祀り、禰宜ねぎ・神主かみぬしの沙汰さたはない場合が多いが、これを無格社以上の社殿の中に齋いっくとすれば、すなわち神の名を大おおまつみのみこと山祇命まつみのみこと、もしくは木花開耶姫尊このはなさくやひめのみことといい、稀まれにはその御姉の岩長姫命とも称となえて、何とかして「神代卷」に合致させようとするのが、近世神道の習わしである。しかもこれは単に山神が或る地では男神であり、また他の地方では姫神であつたことを語る以外に、いささかも信仰の元の形を、跡づけた名称ではないのである。公認せられない山神の久しい物語には、今はおおよそ忘

れたからよいようなものの、なかなかに尊き大山祇の御名を累す
 べきものが多かつた。木樵きこり・草苻くさかり・狩人かりうどの群が、解しかつ信
 じていた空想は粗野であつた。それを片端かたはしから説き立てること
 は心苦しいが、わずかに山の神に産衣を奉納したという点だけを
 考えてみても、自分たちはこれを岩長姫の御姉妹に托することの、
 由よしなき物もの好みこのであつたことを感ずるのである。十八九年前に自
 分は日向の市房山に近い椎葉しいばの大河内という部落に一泊して、宿
 主の家に伝えた秘伝の「狩かり之の巻まき」なるものを見せてもらつたこ
 とがある。その一節の山神祭文りよなお直なおしの法りよなおというのは、大よそ
 次のごとき素朴なる神話であつた。不明の文字があるから、むし
 ろ全文を書留めて置く方がよいと思う。

一、そもく山の御神、数を申せば千二百神、ほんちやくしによらい本地薬師如来に

ておはします。かんぜおんぼさつ観世音菩薩の御弟子あしゆらおう阿修羅王、きんならおう緊那羅王、あま摩※

まこうらおう羅王と申すあま仏は、日本の將軍に七代なりたまふ。天の浮橋うきはし

の上にて、山の神千二百生れたまふ也。此山このの御神の母御名を一

ちがみ きみ神の君と申す。此神産をして、三日までうぶ腹あたたを温めず。此浮

橋の上に立ちたまふ時、大摩の獵師毎日山に入り狩をして通る時

に、山の神の母一神の君ゆきあに行逢ゆきあひたまふとき、われ産をして今日

三日になるまでうぶ腹を温めず、なんじ汝が持ちしなんじわり子を少し得さす

べしと仰せける。大摩申しけるは、事やうくもつたい勿体なき御事おんこと

也。此割子わりこと申すは、七日のあひだ行を成し、十歳未満の女子に

せさせ、てんから犬にもくれじとて天じやうに上げ、ひみちこみ

ちの袖そでの振ふり合あいにも、不浄の日をきらひ申す。全くもつ以て参らすま
 じとて過ぎにけり。其あとにて小摩の獵師に又行逢ひ、汝高をい
 ふもの也。我こそ山神の母なり、産をして今日三日になるまで、
 産うぶ腹はらを温めず。山の割子を得さすべしと乞こひたまふ。時に小摩
 申しけるは、さてさて人間の凡夫ほんぶにては、産をしては早くうぶ腹
 をあたゝめ申すこと也。ましてや三日まで物をきこしめさずおは
 す事のいとをしや。今日山に入らず、明日山に入らずとも、幸ひ
 持ちし割子を、一神の君に参らせん。かしきのうごく、白しろきとぎ桑ぎの
 物をきこしめせとてさゝげ奉る。其時一神の君大に悦び、いかに
 小摩、汝がりう早く聞き（開？）かせん。是より丑寅うしとらの方にあた
 つて、とふ坂山といへるあり。七つの谷の落おち合あいいに、りう三つを

得さすべし。なほゆくすえずえ 猶行末々たがふまじと誓ひて過ぎたまふ。急々き如き
ゆうきゆうによりつりよう 律令。敬白。けいはく

右の話が天つ神の新にいなめ嘗めの物忌ものいみの日に、富士と筑波と二処の

神を訪れて、一方は宿を拒み他方はこれを許したという物語、巨こ
たんしやうらい 旦将来・蘇民将来そみんの二人の兄弟が、款待かんだいの厚薄によつて武む

塔とう天神に賞罰せられた話、世降くだつては弘法大師が来つて水を求め

た時、悪い姥うばはこれを否いなんで罰せられ、善き姥は遠く汲んでその

労を報いられたという口碑などと同じ系統の古い形であることは、
たれひと 誰人もこれを認め得る。かりに山の神の母に托した物語が日向

ばかりの発明であつたとしてもその意味は深いと思つた。しかる
 につい近ごろになつて、佐々木君の『東奥異聞』には遠く離れた

陸中の上閉伊郡と、羽後の北秋田郡のマタギの村とに、同じ話が口伝くでんとなつて残つていたことを報告している。羽後の方では八人組十人組という二組のマタギ、一方は忌いみを怖おそれてすげなく断つたに反して、他の一方では小屋の頭かしらがただの女性でないと見て快く泊め、小屋で産をさせて介抱をした。陸中の山村では獵人の名を万治ばんじ警司ばんじといい、警司がひとり血けがの穢いとれを厭いとわず親切に世話をすると、十二人の子を生んだと伝えている。いずれも山神がその好意をめでて、のちのち山の幸を保障したことは同じであつた。

獵師は船ふな方かたなどとは違い、各自独立した故郷があつて、互いに交通し混同する機会は決して多くない。それが奥州と九州の南端と、いつのころからかは知らぬがこれだけ類似した物語を伝え

ているのは必ず隠れた原因がなければならぬ。その原因を尋ね求めることは、今からではもうむづかしいであろうか否か。自分の知る限りにおいては、同じ古伝の破片かと思うものが、中部日本では上古以来の北国街道、近江から越前へ越える荒乳山あらくちにもあつた。『義経記』巻七に義経の一行が、この峠を越えなずんで路の傍に休んだ時、アラチという山の名の由来を、弁慶が説明したことになつてゐる。今の人が聴けば興さの覚めるような話だが、加賀の白しらやま山の山の神女ここのりゆうぐうの宮、志賀の辛からさき崎明神と御かたらいあつて、懐妊すでにその月に近く、同じくはわが国に還つて産をなされんとして、明神に扶たすけられてこの嶺を越えたもう折に、にわかに御おんもよお催しあつて、山中において神子誕生な

された。荒血をこぼしたもうによつて荒血山とはいうとある。

『義経記』全篇の筋とは直接の交渉なき挿話そうわだから、作者の新案とは考えられぬ。多分はこの書が成長をした足利時代中期に、まだ若干の物知りの間に、記憶せられていた口碑かと思う。しかもかりうど獵人の神を援助した話は、ここではこれと結びついていた痕こんせ跡きがない。二国に分れ住む陰陽の神が、境の山の嶺に行き逢いたもうということは、大和と伊勢との間でも、信濃と越後の境でも、今なお土地の民はこれを語り伝えている。それと各地の道さえの祖たわ屺の驚くべく粗野なる由来記とは、もちろんいずれが本もと、何れが末とはきめにくいが、脈絡は確かにあつたので、従つて深山の誕生というがごとき荒唐なる言い伝えも、成立ちうる余地は十

分にあつた。ただ記録以前にあつては話し手の空想がわずかずつ働いて、始終輪廓りんかくが固定しなかつたというのみである。

例えば浄瑠璃じようるりの「十二段草子そうし」は、ほとんど『義経記』と同

じころに今の形が整うたものかと思うのに同じ話がもう別様べつように

語り伝えられ、志賀の辛崎からさき明神を志賀寺の上人すなわち八十三

歳で貴女に恋慕したという珍しい老僧の後日譚ごじつだんにしてしまった。

その時京極の御息所みやすどころは年十七、上人三たびその御手をとつてわ

が胸に押し当てたので、すなわち懐胎なされたというのは、同じ

近江国手孕村の古伝の混淆こんこうであるが、やはりまた荒乳の山中に

して産の紐ひもを解きたもうといい、取上げたる若子わかごは面は六つ御手

は十二ある異相の産児にして、ただちに都率天とそつてんに昇り住したま

い、のちに越前敦賀つるがに降つてけいたい菩薩ぼさつと顕あらわれ、北陸道を守護したもうなどと、大變なでたらめをいつている。もちろんこの通りの話が一度でも土地に行われていたわけではなく、単に愛発あらちの関が上古以来、北国往還しやうの衝しょうにあつたために、他の辺土に比べてはこの口碑が一層弘く、かつ一層不精確ふふに流布るふしたことを、推定せしめるに過ぎぬのである。山姥が坂田さかたのきんとき公時の母であり、これを山中に養育したという話が、特に相州足柄あしがらの山に属するところになつたのも、また全然同じ事情からであろうと思う。江戸時代中期の読み本として、『前太平記ぜんたいへいき』という書物が世に現れるまでは、山姥の本場は必ずしも、明るい東海とうかいのほとりの山でなかつた。信州木曾きんときやまの金時山などでは、現に金時母子すの棲すんだとい

う巖窟がんくつ、金時が産湯うぶゆをつかったという池の跡のほか、麓の村

々の石の上にはこの怪力童子の足跡なるものがいくらかもあつて

(『小谷口碑集』)、むしろ山姥が自由自在に山やまめぐまた山を山巡

りするといふ、古い評判とも一致するのであるが、これを頼光四天王の一人に托するに至つて、足柄ばかりが有名になつたのみならず、前後ただ一度の奇瑞のごとく解せられて、かえつて俗説の遠い由来を、尋ねる途みちが絶えようとするのである。

がうんにつけんろく

『臥雲日件録』などを読んでみると、山姥が子を生むという話

は少なくとも室町時代の、京都にもすでに行なわれていた。しかもおかしい事には一腹に三人の四人も、怖ろしい子を生むというのである。従つてそれが山神の産養いという類の獵人等が言い伝

えと、元は果して一つであるか否かも、容易に決断することはできぬのだが、山姥の信仰が今ほど雑駁ざつぱくになつた上はいたしかたのないことである。近世の山姥は一方には極端に怖ろしく、鬼女とも名づくべき暴威を振りながら、他の一方ではおりおり里に現れて祭を受けまた幸福を授け、数々の平和な思い出をその土地に留とどめている。多くの山村では雪少なく冬の異常に暖かな場合に、ことしは山姥が産をするそうぞといつていた。阿波の半田の中島の山姥石は、山姥が子供をつれて時々はこの岩の上に来て、焚た火きびをしてあたらせるのを見たと称してこの名がある。遠州奥山郷の久良幾山くらきには、子生こうみたわ嶮と名づくる岩石の地が明光寺の後の峯にあつて、天徳年間に山姥ここに住し三児を長養したと伝説せら

れる。りゅうざほう竜頭峯の山の主ぬし竜筑房、神之沢の山の主白髮童子、山住奥の院の常光房は、すなわちともにその山姥の子であつて、今も各地の神に祀られるのみか、しばしば深山の雪の上に足痕あしあとを留め、永く住民の畏敬つなを繋いでいた。『遠江国風土記伝』にはとおとうみのくにふどきでんとおとうみのくにふどきでん平賀・矢部二家の先祖、勅を奉じて討伐にきたと誌しるしてはあるが、のちに和談成つて彼らの後裔こうえいもまた同じ神に仕えたことは、秋葉山住やまずみの近世の歴史から、これを窺うかがうことができるのである。

山住は地形が明白に我々に語るごとく、本来秋葉の奥の院であつた。しかるにいつのころよりか二処の信仰は分立して、三尺坊大権現だいこんげんの管轄は、ついに広大なる奥山には及ばなかつたのである。海道一帯の平地の民が、山住様に帰伏する心持は、なんと本

社の神職たちが説明しようとも、全く山の御犬おいぬを迎えてきて、魔ま障しょう盗賊とうぞくを退ける目的の外に出なかつた。今こそ狼おおかみは山の神の使令として、神威を宣布する機関に過ぎぬだろうか、もし人類の宗教にも世に伴う進化がありとすれば、かつては狼をただちに神と信じて、畏敬祈願した時代があつて、その痕跡は数々の民間行事、ないしは覚おぼつか束つかない口碑の中などに、たどればこれを尋ね出すことができるわけである。山に繁殖する獣は数多いのに、ひとり狼の一族だけに対しては、産見舞さんみまいという慣習が近頃まであつた。遠江・三河には限つたことではないが、諸国の山村には御犬岩などと名づけて、御犬が子を育てる一定の場処があつた。いよいよ産があつたという風説が伝わると、里ではいろいろの食物を

重箱に詰めて、わざわざ持参したという話は珍しくない。ただし
果して狼の産婦が実際もらつて食べたか否かは確かでない。津久
井の内郷うちごうなどでは赤飯の重箱を穴の口に置いてくると、兎うさぎや雉き
子の類を返礼に入れて返したなどともうそろそろ昔話に化し去ら
んとしているが、秩父ちちぶの三峯山みつみねさんでは今もつて嚴重の作法があつ
て、これを御産立おこだての神事というそうである。『三峯山誌』の記す
るところによれば、御眷属ごけんぞく子を産まんとする時は、必ず凄然せいぜん
たる声を放つて鳴く。心直すくなる者のみこれを聴くことを得べし。
これを聴く者社務所に報じ来れば、神職は潔斎けつさい衣冠いかんして、御炊おた
上げきあと称して小豆飯あずきめし三升を炊き酒一升を添え、その者を案内と
して山に入り求むるに、必ず十坪ばかりの地の一本の枯草もなく

掃き清めたかと思ふ場所がある。その地に注連しめを繞めぐらし飯酒を供えて、祈祷して還るといふので、これまた産の様子を見たのではないが、この神事のあつた年に限つて、必ず新たに一万人の信徒が増加するとさえ信じていた。

しかもこの話が単に山神信仰の一様式に過ぎなかつたことは、いわゆる御産立の神事が年を隔てて稀に行われていたのを見ても察せられる。狼は色欲の至つて薄い獣だといふ説もあり或いはこの獣の交るを見た者は、災があるといふ説があつたのも、つまりは山中天然の現象の観察が、かくのごとき信仰を誘うたものではなく、かねて山神の子を産むといふ信仰があつたために、かかる偶然の出来事に対しても、なお神秘の感を抱かざるをえなかつた

ことを意味するかと思う。狼が化けて老女となりもしくは老女が狼の姿をかりて、旅人を劫おびやかしたという話は西洋にも広く分布しているらしいが、日本での特色の一つは、これもまた分娩ということとの関係であつた。ことに阿波・土佐・伊予あたりの山村においては、身持の女房がにわか産を催し、夫が水おつとを汲みに谷に降っている間に、狼の群に襲われたという話を伝え、または山小屋に産婦を残して里に出た間に、咬かみ殺されたという類の物語があつて、或いはこの獣が荒血の香を好むというがごとき、怪しい博物学の資料にもなっているようだが実事としてはあまりに似通うた例のみ多く、しかもその故跡には大木や巖いわおがあつて、しばしば崇たりを説き亡霊を伝えているのを見ると、これも本来同一系統

の信仰が、次第に形態を変じて奇談小説に近づこうとしているものなることを、推測することができるのである。

ただし実際この問題はむつかしくて、もうこれ以上に深入するだけの力もないが、とにかくに自分が考えて見ようとしたのは、何故に多くの山の神が女性であったかということであつた。山中誕生の奇怪なる昔語りが、かくいろいろの形をもつて弘くかつ久しく行われているのは、或いはこの疑問の解決のために、大切な鍵かぎではなかつたかということである。日向の椎葉山しいばやまの「獵かりう人伝書どでんしょ」に、山神の御母の名を一神の君と記しまたは安芸と石見を境する亀尾山の峠において、御子を生みたもうと伝うる神が、市杵島姫命いちきしまひめのみことであつたというのも、自分にとっては一

の暗示である。イチは現代に至るまで、神に仕える女性を意味している。語の起こりはイツキメ（斎女）であつたらうが、また一の巫女みこなどとも書いて最も主神に近接する者の意味に解し、母と子とともにあるときは、その子の名を小市こいちともまた市太郎とも伝えていた。代を重ねて神を代表する任務を掌つかさどつているうちに、次第にわが始祖をも神と仰いで、時々主神と混同する場合さえあつたのは、言わば日本の固有宗教の一つの癖であつた。故に公の制度としては斎女の風は夙つとに衰えたけれども、なお民間にあつては清くかつ慧かしこしい少女が、或いは神に召されて優れたる御子を産み奉るべしという伝統的の空想を、全然脱却することをえなかつたのかと思う。信仰圏外の批判をもつてすれば、これを精神疾患

の遺伝ともいうことができるが、平和古風の山村生活にあつてはまったく由緒ある宗教現象の一つであつた。ことにまた深山の深い緑、白々とした雲霧の奥には、しばしばその印象と記憶を新たにするだけの、天然の力が永くのちのちまで潜んでいたのである。

二〇 深山に小児を見るということ

日向の獵人の山神祭文にも、山の神千二百生まれたもうということがあるが、山を越えて肥後の球磨郡くまに入ると、近山太郎、中山太郎、奥山太郎おのおの三千三百三十三体と唱えて、一万に一つ足らぬ山の神の数を説くのである。算かぞえた数字でないことはも

とよりの話だが、この点はすこぶる足柄山の金太郎などと、思想
 変化の方向を異にしているように思われる。いわゆる大^{おおやまつみの}山^{のみ}祇
^{みこと}命の附会が企てられた以前、山神の信仰には既に若干の混乱が
 あつた。木樵^{きこり}・獵^{かりうど}人がおのおのその道によつて拝んだほかに、
 野を耕す村人等は、春は山の神里に下つて田の神となり、秋過ぎ
 て再び山に還りたもうと信じて、農作の前後に二度の祭を営むよ
 うになつた。伊賀地方の鉤^{かぎひき}曳の神事を始めとし、神を誘い下す
 珍しい慣習は多いのであるが、九州一帯ではこれに対して山ワロ
 ・河ワロの俗伝が行われている。中国以東の川童が淵池ごとに孤
 居するに反して、九州でミスシンまたはガアラツパと称する者は、
 常に群をなして住んでいた。そうして冬に近づく時それがことごと

とく水の畔を去つて、山に還つて山童やまわろとなると考えられ、夏はまた低地に降りくると、山の神田の神の出入と同じであつた。紀州熊野の山中においてカシヤンボと称する霊物も、ほぼこれに類する習性を認められている。寂寥せきりょうたる樹林の底に働く人々が、わが心と描き出す幻の影にも、やはり父祖以来の約束があり、土地に根をさした歴史があつて、万人おのずから相似たる遭遇をする故に、かりに境を出るとたちまち笑われるほどのほかない実験でもなお信仰を支持するの力があつた。ましていわんやその間には今も一貫して、日本共通の古くからの法則が、まだいくらかも残つていたのである。

『西遊記』さいゆうきその他の書物に九州の山童として記述してあるのは、

他の府県でいう山男のことであつて、その挙動なり外がい貌ぼうなりは、とうてい川童の冬の間ばかり化してなる者とは思われぬのであるが、別にこれ以外に谷の奥に潜んで小さな怪物のいるという言い伝えはあつたので、山童はもと恐らくはこの方に属した名であつた。壹岐の島では一人の旅人が、夜通しがやがやと宿の前を海に下つて行く足音を聴いた。夜明けて訊たずねるとそれは山童の山から出てくる晩であつた。或いはまた山の麓の池川の堤つつみに、子供のかと思ふ小さな足あし痕あとの、無数に残つてゐるのをみて、川童が山へ入つたという地方もある。秋の末近く寒い雨の降る夜などに、細い声を立てて渡り鳥の群が空を行くのを、あれがガアラツパだと耳そをば峙だてて聴く者もあつた。阿蘇あその那羅延坊ならえんぼうなどという山やま伏ふしは、

山家に住みながら川童予防の護符を発行した。すなわち夏日本辺に遊ぶ者の彼らの害を懼るるごとく、山に入つてはまた山童を忌み憚はばかつていた結果かと思われるが、近世に入つてからその実例がようやく減少した。大体にこの小さき神は、人間の中の小さい者も同じように、気軽な悪いたずら戯が多くて驚かすより以上の害は企てえなかつた。注意をすればこれを防ぐことができたために、のち次第に人がその威力を無視するに至つたのである。『觀かん惠けい交こう話わ』

という二百年ほど前の書物には、豊後の国かと思う或る山奥に、せこ子こと称する怪物がいる話を載せている。形は三尺から四尺、顔の真ま中なかに眼がただ一つであるほか、全く人間の通りで、身には毛もなくまた何も着ず、二三十ずつ連れだつてあるく。人これ

に逢えども害を作さず、大工の持つ墨壺すみつぼを事の外ほかほしがれでも、遣れば悪しとて与えずと杣そまたちは語る。言葉は聞えず、声はひゅうひゅうと高く響く由なりといっている。

眼が一つということは突然に聞けば仰天するが、土佐でも越後でも、また朝鮮でも、或いは遠く離れてヨーロッパの多くの国の田舎でも、こんな境遇の非類の物には、おりおり附いて廻る噂である。どうしてそういう風に見えたかは、残念ながらまだ明白わかに判らぬというまででまずは怪物の証拠とでもいうべきものであった。大和・吉野の山中においては、また木の子と名づくるおよそ三四歳の小児ほどの者がいた。身には木の葉を着ているとある。これは『扶桑怪談実記』の誌すところであって、その姿あり

ともなしとも定まらずなどと至つて漠然たる話ながら、山働きの者おりおり油断をすると木の子に弁当を盗まれることがあるので、木の子見ゆるや否や棒をもつてこれを追い散らすを常とすともあれば、少なくとも多数の者が知っていたのである。このほかにも秋田の早口沢はやくちざわの奥に鬼童おにどうという者の住むことは、『黒甜瑣語』こくてんさご三編の四に見え、土佐の大忍郷おほさゝいの山中に、笑い男どしゆうえんがくしという十四五歳の少年が出て笑うことが、『土州淵岳志』に書留めてある。それが誇張でありもしくは誤解なることは、細かに読んで見ずとも断定してよいのであるが、こういう偶然の一致がある以上は、誤解にもなお尋ねべき原因があるわけである。

その上にまた時としては、誤解とも誇張とも考えられぬ場合も

ある。これは南^{みな}方^{かた}熊^{くま}楠^{なくす}氏の文通によつて知つたのだが、前年東部熊野の何とか峠を越えようとした旅人、不意に路傍の笹原の中から、がさがさと幼児が一人這^はい出してきたのを見てびつくりして急いで山を走り降つた。それから幾日かを経て同じ山道を戻つてくると、今度はその子供が首を斬^きられて同じあたりに死んでいたのを見たという。頭も尻尾もなく話はただこれだけだが、その簡単さがむしろこの噂の人の作つた物語でないことを感ぜしめる。南方氏の書状はこれにつけ加えて、インドは地方によつて狼の穴から生きた人間の赤児を拾つてきた事件が今でも新聞その他におりおり報ぜられる。この国は狼の害甚だ多く、小児の食われる実例が毎年なかなかの數に達し、狼に食われた子供の首^{くび}飾^{かざり}

・腕飾の落ちたのを、山をあるいては拾い集める職業さえある。最近のロミユルスはすなわちこの連中によつて発見せられるので、狼が飽満して偶然に食い残した子供が、無邪気に食を求めて狼の乳を吸い、自然に猛獣の愛情を喚起して狼の仔とともに育てられるのだ。或る孤兒院へ連れてきた童子などは、四^よつ這^ばいをして生肉のほかは食わず、うなる以外に言語を知らず、挙動が全然狼の通りであつたと報告せられていと示された。ただしこの種の出来事は必ず昔からであろうが、これに基づいて狼を靈物とした信仰はまだ聞かぬに反して、日本の狼は山の神であつても子供を取つたという話ばかり多く伝わり、助け育てたという事例はないようである。故に性急にこの方面から山の赤子の説明を引出そうと

してはならぬのである。

こと

二二 山姥を妖怪なりとも考えがたき

山姥・山姫は里に住む人々が、もと若干の尊敬をもつて付与したる美称であつて、或いはそう呼ばれてもよい不思議なる女性がかつて諸処の深山にいたことだけは、ほぼ疑いを容れざる日本の現実であつた。ただしこれに関する近世の記録と口承とは、甚だしく不精確であつた故に最も細心の注意をもつて、その誤解誇張を弁別する必要があるのはもちろんである。自分が前に列記した

いくつかの見聞談のごとく、女が中年から親の家を去つて、彼らの仲間に加わつたという例のほかにも、別に最初から山で生まれたかと思われる山女も往々にして人の目に触れた。これも熊野の山中において、白い姿をした女が野猪やちよの群を追いかけて、出てくることがあると、『乗穂録』へいすいろくという本に見えている。土佐では槇まきのやま山郷の字筒越つづごしで、与茂次郎という獵師夜明よあけに一頭の大鹿の通るのを打留うちとめたが、たちまちそのあとから背丈一丈せたけ じょうにも余るかと思う老女の、髪赤く両眼鏡のごとくなる者が、その鹿を追うてきたのを見て動顛どうてんしたと、寺石氏の『土佐風俗と伝説』には誌してある。

猪を追う女の白い姿というは、或いは裸形のことを意味するの

ではなかつたか。薩摩の深山でも往々にして婦人の姿をした者が、嶺を過ぐるを見ることがある。必ず髪を振り乱して泣きながら走つて行くと、この国の人上原白羽という者が、『きんせい今齊諧かい』の著者に語っている。それがもし実験者の言に基づくものならば、泣きながらとは多分奇声を発していたことをいうのだらう。『遠野物語』に書留められた山中深夜の女なども、待てちやアと大きな声で叫んだといっている。他の地方にも似たる例は多く、たいていは背丈がむやみに高かつたことを説いているが、怖しくて遁にげて来た者の観察だから、寸法などは大ざっぱなものであろうと思う。それよりも土地を異にし場合を異にして、おおよそ形容の共通なるもの、例えば声とか髪の毛の長く垂れていたとかいう点の

同じかつたのは注意に値する。山で大きな女の屍しがい体を見たという話は、これもいくつかの類例が保存せられてあるが、なかんずく有名なのは夙はやく橘南谿の『西遊記』に載せられた日向南部における出来事である。

「日向国飢肥領おびの山中にて、近き年菟道弓うじゆみにて怪しきものを取りたり。惣そうしん身女の形にして色ことの外ほか白く黒髪長くして赤裸なり。人に似て人に非あらず。獵人も之を見て大いに驚き怪み人に尋ねけるに、山の神なりと謂いふにぞ。後の祟たりも恐ろしく取棄とりすてもせず、其そのまゝにして捨置きぬ。見る人も無くて腐りしが、後の祟りも無かりしとぞ。又人のいひけるは、是は山女と謂ふものにて、深山にはまゝあるものと云いへり」云々。この菟道弓のウジというのは、

野獣が踏みあけた山中の通路である。同じ処を往来する習性があるのを知って、かかればひとりでに発するようにウジ弓を仕掛けておくのである。それにきて斃たおれたというのはいくら神でなくとも驚くべき不注意であつて、珍しい事件であつたに相違ないが、都に住む橘氏ならばとにかく、土地の獵人が始めて名を知つたというのは、やや信じにくい話である。ことにこの方面は今でも山人の出現が他に比べては著しく頻ひんぱん繁であり、現にこの記事以後にも、いろいろの珍聞が伝えられているのである。八田はつた知紀翁の『霧島山幽界真語』の終りに、次のような一話が載せてある。

「おとゞし（文政十二年）の秋、日向の高岡郷（東諸たかおか郡ひがしもろかた）

にもものしける時、 靱木村なる郷土、 靱木新右衛門と云へる人の物
 がたりに、 高鍋^{たかなべ}領の小菅岳^{こすげがたけ}といふ山に、 高岡郷より獵に行通
 ふ者のありけるが、 一日罨^{わな}を張り置けるに、 怪しき物なんかゝり
 たりける。 さるは大^{おお}方^{かた}は人の形にて、 髪いと長く、 手足みな毛
 おひみちたり。 さてそれが謂ひけるは、 私はもと人の娘なり。 今
 は数百年の昔、 世の乱れたりし時、 家を遁^{のが}れ出てこの山に兄弟共
 に隠れたりけるが、 それよりふつに人間の道を絶ちて、 朝夕の食
 ひ物とては、 鳥獸木の実やうのものにて有り経しかば、 おのづか
 ら斯^こう形も怪しくは成りにけり。 今日しも妹の在る処に通はんと
 て、 夜中に立ちて物しけるに、 思はんやかゝる目に遭はんとは。
 いかでく我命をば助けよかすと涙おとして詫^わびけれど（その言

語今の世の詞ことばならで、定さだかには聴取りかねしとぞ、いといぶかしくや思ひけん、其そのま儘里へ馳はせ還りて、友あまたかたらひ来て其女を殺してけり。さて其男は幾いくほど程も無く病わづらみ煩ふことありて死にけりとか。こは近頃の事なりとて、男の名も聞きしかど忘れにけり。」

小山勝かつきよ清君の外祖母の話であつた。明治の初年、肥後球磨郡の四浦村よつらと深田村との境、高山の官山の林の中に、獵師の掛けて置いた猪しし罫わなに罹かかつて、是も一人の若い女が死んでいた。丸裸であつたそうだ。これを附近の地に埋めたが、のちに祟りがあつたという話である。我々の注意するのは、以上三つの話が少しずつ時を異にし、またわずかばかり場処をちがえていずれも霧島きりしまい

市房ふせ連山の中の、出来事であつたという点である。ただし猪罫の構造を詳しく知らねばならぬが、かかった女が身の上を語つたという小菅岳の一条には、甚だしく信じにくいものがある。姉と妹とが別れ別れに住んでいて、時あつて相訪あいつとうということは話の様式の一つであり、乱を避けて山に入ったというのも、この地方の人望ある昔談むかしがたりにほかならぬ。言葉が古風で聴取りにくかつたという説明とともに、必ず仲継者の潤飾が加わっているかと思う。それよりも大切な点はわずかな歲月、わずかな距離を隔てて似たような三つの事件が起りしかもそれぞれ状況を異にして、真似た痕跡のないことである。自分は必ず今にまた新しい報告の、更に附加せらるべきことを予期している。

他の地方の類例はまた熊野の方に一つある。長八尺たけばかりな女の屍骸しかいを、山中において見た者がある。髪は長くして足に至り、口は耳のあたりまで裂け、目も普通よりは大きなりと記している。それから『越後野志えちごやし』卷十八には、山男の屍骸の例が一つある。天明の頃、この国頸城郡くびき姫ひめ川かわの流れに、山男が山奥から流れてきた。裸形にして腰に藤蔓ふじづるを纏まとう。身のたけ二丈余とある。ただし人恐れてあえて近づかず。ついに海上に漂い去るといつて、寸尺は測って見たのではなかった。しかも二丈余というのはかねてこの地方で言うことと見えて、同じ書物の他の条にもそう書いてある。

ただし山男の身長の遙かに尋常を超えていたことは、他の多くの地方でも言うことで或いは事実ではないかと思う。このついでにほんの二つか三つ実例を挙げてみるならば、『有斐齋割記』ゆうひさいさつぎにつしま対馬某という物産学者、薬草を採りにひえいざん比叡山の奥に入つて、たまたま谷を隔てて下の方に、一人の小児の岩から飛び降りてはまた攀よじ登つて遊んでいるのを見た。村の子供がきて遊ぶものと思つていたが、後日そこを通つてみるに、岩は高さすうじん数仞の大岩であつた。それから推して見ると小児と思つたのは、身の丈たけ一丈もあつたわけで、始めて怪物ということに気がついた。いしぐろただ石黒忠篤あつ君がかつて誰からか聴いて話されたのは、幕末の名士川かわじ路左衛門尉さえもん、或る年公命を帯びて木曾に入り、山小屋にとま

つていと、月明らかなる夜更にその小屋の外にきて高声に喚ぶ者がある。刀を執つて戸を開いて見るに、そこには早影はやも見えず、小屋の前の山をきわめて丈の高い男の下つて行く後姿が、遠く月の光で見えたそうだ。山男であろうとその折從者に向かつていわれたが、他日ついに再びこれを口にせず、先生の日記にも伝にも、その事を記したものはなかつたという。山中笑翁やまなかえみが前年駿州田たしろがわ代川の奥へ行かれた時、奥仙俣おくせんまたの杉山忠蔵という人が、その父から聴いたといつて語つた話の中に、若い時から猟がすきで、毎度鹿を追うて山奥に入ったが、真に怖ろしくまた不思議だと思つた事は、生涯に二度しかない。その一度は山中の草原が丸太でも曳ひいて通つたように、一筋倒れ伏ひとすじしているのを怪しんで見て

いるうちに、前の山の樹木がまた一筋に左右に分かれて、次第に頂上に押し登って行ったこと、今一度は人の足跡が土の上にあつて、その大きさが非常なものであつた。かねてこんな場合の万一の用意に、持っている鉄の弾丸を銃にこめて、なお奥深く入つて行くと、ちょうど暮^{くれ}方^{がた}のことであつたが、不意に行く手の大岩に足を踏みかけて、山の蔭^{かげ}へ入つて行く大男の後姿を見た。その身の丈が見上げても目の届かぬほどに高かつた。あまり怖ろしいので鉄砲を打ち放す勇氣もなく還つてきたと語つたそうである。昨今は既に製紙や枕木のために散々に伐^きり荒されたから事情も一変したが、以前はこの辺から大井の川上にかけては、山人に取つての日高の沙^さ留^るともいうべく、最も豊富なる我々の資料を蔵して

いた。安倍郡大川村大字日向ひなたの奥の藤代山などでも、かつて西にしこ

河内うちの某という獵師が、大きな人の形で毛を被かぶつた物を、鉄砲

で打ち留めたことがあつた。『駿河国新風土記』するがのくにしんふどき卷二十には、

なんでも寛政初年の事であつたらしく記している。打ち留めたものの余りの怖ろしさに、そのままにして家に帰り、それが病もとの元になつて獵師は死んだ。その遺言ゆいごんに一年も過ぎたなら、こうこうした処だから往つて見よとあつたので、その通りに時経てのち出かけて捜して見ると、偉大なる脛すねの骨などが落ち散り、傍にはまた四五尺あるかと思う白い毛が、おびただしくあつたと伝えられる。そのように長いならば髪の毛だろうと思うが、何分多くは何段かの又聞きであつたため、満身に毛を被るといふ記事がいつ

も精確でなく、ことにこの地方では猿ざるの劫経ごうけいたものとか、狒ひ々ひとかいう話が今でも盛んに行われて、一層人の風説を混乱せしめる。新聞などを注意していると、四五年に一度ぐらいはそういう噂うわさが必ず起こり、その実打じつち取ったのはやや大形の猿であり、ただその話と寸法とのみか以前の山男の方に近くなっている。つまりはうそであり誇張ながらも、由つて来たるところだけはあるのである。なお最後に今一つ、どうしても猿ではなかった具体的例を出して置く。これは『駿河志料』巻十三、『駿河国巡村記』志し太だ郡

巻四に共に録し、前の二つの話よりは少しく西の方の山の、やはり百余年前の出来事であった。

「大井川の奥なる深山には山やま丈じょうといふ怪獣あり。島田の里人

に市助といふ者、材木を業として此山に入ること度々なり。或時
谷たにはた 畠の里を未明に立ち、智者山ちしやまの險岨けんそを越え、八草やくさの里に至
る途中、夜既に明けんとするの頃ころ深林を過ぐるに、前路に数十歩
を隔て、大木の根元に、たけ一丈余の怪物よりかゝるさまにて、
立ちて左右を顧みるを見たり。案内の者ひそ潜かに告げて言ふ。かし
こに立つは深山に住む所の山丈と云ふもの也。彼に行逢へば命は
測り難し。前へ近づくべからず又声を揚あぐべからず、此林の茂み
に影を匿かくせと謂ふ。市助は怖れおびえて、もとの路に馳せ返らん
と言へど、案内の者制し止め、暫時の間に去るべければ日の昇る
を待てと言ふまゝに、せんすべ無く只ただ声を吞みてかたへに隠る。
其間にかの怪物、樹下を去りて峯の方へ疾走す。潜かに之を窺うかがふ

に、形は人の如く髪は黒く、身は毛に蔽はれたれど面は人のやうにて、眼きらめき長き唇くちびるそりかへり、髪かみの毛は一丈余にてかもじを垂れるが如し。市助は之を見て身の毛立ち足の踏みどを知らず。されど峯の方へ走り行くを見て始めて安堵あんどの思おもひを為なし、案内と共にかの処ところに來りて其跡あとを閱けんするに、怪獸かいぶつの糞ふん樹下にうづたかく、その多きこと一箕いっきばかりあり、あたりの木は一丈ほど上にて皮を剥むきさぐりたる痕あり。導者曰ふ。これ怪物があま皮を食ひたる也。怪物は又篠しのたけ竹たけを好みて食ふといへり。糞の中には一寸ばかりに噛かみ砕ける篠竹あり。獸の毛もまじりたりしとかや、按あんずるに是は狒々と稱するものにて、山丈とは異なるなるべし」(以上)

。この話はいかにも聴いた通りの精確な筆記のようだが、やはり

よく見ると、文人の想像が少しはまじっていること、あたかも嘯み砕いた篠竹のごとくである。例えば長き唇そ反り返るとあるのは、支那の書物に古くからあることで、じつはどんな風に長いのか、日本人には考えもつかぬ。とうてい夜の引明けなどに眼につくような特徴ではなかつたのである。山丈のジョウは高砂の尉と姥などのジョウで、今の俗語のダンナなどに当るだろう。すなわち山人の男子のやや年輩の者を、幾分尊んで用いた称呼にして、正しく山姥と対立すべき中世語であつた。

二二 山女多くは人を懐かしがること

全体に深山の女たちは、妙に人に近づこうとする傾向があるように見える。或いは婦人に普通なる心弱さ、ないしは好奇心からではないかと、思うくらいに馴なれなれ々なれなれしかつたこともあるが、それにしては彼らの姿形の、大きくまた気疎けうとかつたのが笑止である。

山で働く者の小屋の入口は、大たいてい抵いは垂たれむしろ蓆を下げたばかりであるが、山女夜深く来たつてその蓆をかかげ内を覗のぞいたという話は、諸国においてしばしばこれを聞くのである。そういう場合にも髪は長くして乱れ、眼の光がきらきらとしているために喰いにもでも来たかの如く、人々が怖れ騒いだのである。或いはまた日が暮れて後のち、突然として山小屋に入り来たり、罌いろり炉裏りの向うに坐つて、一言も物を言わず、久しく火にあたつていたという話も多

い。豪胆な木挽こびきなどが退屈のあまりに、これに戯れたなどという噂のあるのは自然である。羽後の山奥ではこんな女をわざわざ招き寄せるために、ニシコリという木を炉に燃す者さえあると『黒こ甜瑣語』くくてんざごなどには記しているが、それは果してどういう作用をするものか、その木の性質と共になお尋ねて見たいと思つてゐる。

今から三十年あまり以前、肥後の東南隅の湯ゆのまえ前村の奥、日向の米良めらとの境の仁原山に、アンチモニイの鉞山があつた。その事務所に住んでいた原田瑞穂という人が夜分少し離れた下の小屋に往つて、人足たちと一緒に夜話をしてゐると、時々ぱらぱらとその小屋の屋根に小石を打ちつける音がする。少し気味が悪くなつてもう還ろうと思ひ、その小屋を出てうしろの小路をわず

かくると、だしぬけに背の高い女が三人横の方から出て、その一人が自分の手を強く捉えた。三人ながらほとんど裸体であった。何か頻りに物を言うけれども怖ろしいので何を言うか解らなかつた。その内に大声に人を喚んだ声を聞いて、小屋から多勢の者がどやどやと出てきたので、女は手を離して足あし早はやに嶺の方へ上つてしまった。これも小山勝清君の話で、経験をした原田氏は、そのころまだ若かった同君の叔父である。

自分はこの鉾山のあつた仁原山が、前に挙げた獣のわなに山女の死んでいた三つの場処の、ほぼまん中である故に、ことにこの話に注意をする。もし山人にも土地によつて、気風に相異があるものとすれば、南九州の山中に住む者などは、とりわけ人情が惇じ

ゆんぼく
樸ゆんぼくでかつ無智であつたように思われるからである。

この類の実例はゆくゆくなお追加しうる見込みがある。前にいう仁原山は市房山と白髪岳との中間にある山だが、その白髪岳の山小屋でも近年山の事業のためにしばらく入っていた某氏が、夜になると山女がきて足を持って引張るので、なにぶんにも怖ろしくて我慢ができぬといつて還つてきたこともあつた。球磨郡四浦よつら村の吉という木挽が、かつて五箇庄ごかのしょうの山で働いていた時に、小屋へ黙つて入つてきた髪の毛の長い女などは、にこにことしてしきりに自分の乳房をいじっていた。驚いて飛びだして鋏てつぽう砲などを持つて、多勢で還つてきてみるともうその辺にはいなくなつたそ

うである。単に遠くから姿を見たというだけの話なら、まだこの附近にも近頃の例がいくつかある。東北地方では会津の磐梯山ばんだいさんの入山などにも、山女らしい話がおりにおりに伝えられる。『竜章りゅうしょう ようとうこくござつき

東国雑記』の第六集に、「文化の初め頃、山麓某村の農民二人、川せんきゆう 芎せんきゆうといふ薬草を採りに、此山西北の谿たにに入つて還ることなり難く、流ながれに傍そうた大木の虚洞うつろに夜を過すとて、穴の外に火を焚たいて置くと、たけ六尺ほどで髪の長さは踵かかとを隠すばかりなる女が沢蟹さわがにを捕へて此火に炙あぶつて食ひ、又兩人を見て笑つた」と記している。「これ俗に山ワロと謂ひ野猿やえんの年経としたるもの也。奥羽の深山にはまゝ居る由にて、よく人の心中を知れども人に害を為すことなし」などとあつて、土地でも詳しいことは知らぬので

ある。また『老嫗茶話』ろうおうちやわには猪苗代いなわしろ白木城の百姓庄右衛門、

同じく磐梯山の奥に入つて、山姥のかもじと称するものを見つけ
たことを載せている。「長さ七八尺にして白きこと雪の如く、松

の大木の梢にかゝつて居た」とあつて其末に、「世に謂ふ山姥は
南蛮国なんばんこくの獣なり。其形老女の如し。腰に皮ありて前後に垂れ下

りたふさぎの如し。たま／＼人を捕へては我住む岩窟がんくつに連れゆ

き、強ひて夫婦のかたらひを求む。我心に従はざるときは其人を

殺せり。力強くして丈夫に敵す。好みて人の小児を盗む。盗まれ

し人之を知り、多勢集まり居て山姥が我子を盗みしことを大音に

罵り恥しむるときは、窃ひそかに小児を連れ来り、其家の傍に捨て置

き帰るといへり」などといつてゐる。實際の遭遇がようやくまれ稀に

なつて雑説はいよいよ附け加わるので、これなども支那の書物の知識が、もう半分ばかりもまじっているようである。

或いは単に人間の炉の火を恋しがつて出てくるものとも想像しうる場合がある。冬の日に旅をした人ならこの心持は解るが、たとえ見ず知らずの人が焚火たきびをする処でも、妙に近づいて見たくなくなるものである。夜分に人の家の火が笑語の声とともに、戸の隙間すきまから洩れるのを見ると、嫉ねたましくさえなるものだ。無邪気な山の人々もこの光に引きつけられてくるのかも知らぬ。『乗穂録』へいすいろくにはまた熊野の山中で炭焼く者の小屋へ、七尺余りの大山伏おおやまぶしの遣つてくることを録している。ただし「魚鳥の肉を火に投ずると

きは、その臭氣を厭いとうて去る」というのは、少しく前の沢蟹の話とは一致せぬが、火に対する趣味などにも地方的に異同があるのだらう。前に引用した『雪窓夜話せつそうやわ』の上巻には、また次のような一件も記してある。すなわち因州での話である。

「西村某と云ふ鷹たか匠しようあり。鷓たかを捕らんとて知頭郡蘆沢山あしさわやまの奥に入り、小屋を掛けて一人住みけり。夜寒の頃なれば、庭に火を焚たきてあたり居けるに、何者とも知れず、其たけ六尺あまりにて、老いたる人の如くなる者来りて、默然とかの火によりて、鼻をあぶりてつくばひたり。頭の髪赤くちゞみて、面貌めんぼう人に非ず猿にも非ず、手足は人の如くにして、全身に毛を生じたり。西村は天性剛なる男なれば、更に驚くこと無く、汝なんじは何処に住む者ぞ

と問ひけれども、敢て答へず。暫くありて立歸る。西村も其後に沿ひて出でけれども、夜甚だ暗くして、其行方を知らずなりぬ。其後又來りて、小屋の内を覗くことありしに、西村、又來たか、こよい今宵は火は無きぞと言ひければ、其まゝ歸りけると也。里人に其事を語りければ、山父と云ふもの也。人に害を為す者に非ず。之を犯すことあれば、山荒るゝと謂ひけると也。」

スキーで近頃有名になつた信越の境の山にも、半分ほど共通の話があつて、『北越雜記』ほくえつざつき卷十九に出ている。断つて置くがこれら二つの書物は共に写本であつて流布も少なく、一方の筆者は他の一方の著述の存在をすらも知らなかつたのである。それを自分たちが始めて引き比べて見る処に、学問上の価値が存するので

ある。「妙高山・焼山・黒姫山くろひめやま皆高嶺にて、信州の飯綱いづな・戸とがく隱し、越中の立山まで、万山重なりて其境幽凄ゆうせいなり。高田の藩中数十軒の薪まきは、皆この山中より伐出す。凡およそ奉行ぶぎようより木挽こびき・そまやから杣の輩に至るまで、相誓ひて山小屋に居る間、如何いかなる怪事ありても人に語ること無し。一年升山某、役に当りて数日山小屋に在ありしが、夜は人々打寄りて絶えず炉に火を焚きてあたる。然るに山男と云ふもの、折ふし来ては火にあたり一時ばかりにして去る。其形人に異なること無く、赤髪裸身灰黒色にして、長たけは六尺あまり、腰に草木の葉を纏まとふ。更に物言ふこと無けれども、声を出すに牛のいばふ如く聞ゆ。人の言語はよく聞分くる也。相馴あいなれて知人の如し。一夕升山氏之に向ひて、汝木葉を着るは恥ることを知

るなり。火にあたるは寒さを畏るゝなり。然らば何ぞ獣の皮を取りて身に纏はざるやと言ひしに、つく／＼と之を聞きて去れり。翌夜は忽ち羚羊二疋を両の手に下げて来り、升山の前に置く。其意を解し、短刀もて皮を剥ぎて与ふれば、山男は頻りに口を開き打笑ひ、悦びて帰りぬ。すでにして又来たるを見れば、さきの皮一枚は、藤を以て繋ぎ合せて背に負ひ、他の一枚は腰に巻き付けたり。されど生皮を其のまゝ着たる故、乾くにつれて縮みより硬ばりたり。皆々打笑ひ、熊の皮を取り、十文字にさす竹入れ、小屋の軒に下げて見せ、且つ山刀一挺を与へて帰らしむ。其後数日来ずと謂へり（以上）。これなどは秘密を誓約した人々の抜け荷だから、若干の懸値があつても吟味をすることが困難で

ある。

あること
二三 山男にも人に近づかんとする者

山人も南九州の山に住む者が、特に無害でありまた人なつこかつたように思われる。山中をさまようて危害の身に及ぶに心づかず、しばしば里の人の仮小屋かりごやを訪問して、それほどまでに怖れ嫌われていることを知らなかったという例は、主として霧島連峯中の山人の特質であつた。なお同じ方面の出来事として、水野葉舟君からまた次のような話も教えられた。

ひゆうがみなみなか

日向南那珂 郡の人身上千蔵君曰く、同君の祖父某、四十年ばかり以前に、山に入つて不思議な老人に行逢うたことがある。白髪にして腰から上は裸、腰には帆布ほぬののような物を巻きつけていた。ここにこと笑いなながら此方を向いて歩んでくる様子が、いかにも普通の人間とは思われぬ故に、かねて用心のために背に負う手しゅり裏剣用の小さい刀の柄つかに手を掛け、近く来ると打つぞと大きな声でどなったが、老翁は一向に無頓着むとんちやくで、なお笑いながら傍へ寄つてくるので、だんだん怖ろしくなつて引返して遁にげてきた。ところがそれから一月ばかり過ぎてまた同じ山で、村の若者が再び同じ老人に逢つた。一羽の雉子きじを見つけて鉄砲の狙ねらいを定め、まさに打ち放そうとするときに、不意に横よこあい合から近よつてこの

男の右腕を柔かに叩く者があつた。振向いて見ればその白髪の人で、やはりにこにここと笑つて立っている。白髪の端には木はしの葉などがついていたという。これを見ると怖ろしさのあまり気が遠くなり、鉄砲を揚あげたままで立ちすくんでいたのを、しばらくしてから村の人に見つけられ、正気になつてのちにこの話をしたそうだ。眼の迷いとかまぼろしとか、言つてしまふことのできない話で、しかも作り話としては何の曲もなく、かつ二度の実見が一致していた。何かは知らずとにかくにそんな人が、この辺の山には正しくいたのである。

山人が我々を目送したという話もおりおり聞く。そうして甚だ

気味の悪いことに、これを解説するのが普通であつた。気味の悪くないこともあるまいが、彼らは元来が眞の有閑階級だから、じつははつきりとした趣意もなく、ただ眺めていた場合もあつたかも知れぬ。ただし少年や女には、これを怖れる理由は十分にあつた。前年前田雄三君から聴いた話は、越前丹生郡三方村大字杉谷にうみかたの、勝木袖五郎という近ごろまで達者でいた老人、今から五十余年前に十二三歳で、秋の末に枯木を取りに村の山へ往つた。友だちの中に意地の悪い者があつて、うそをついて皆は他の林へ往つてしまい、自分一人だけ村の白山神社の片脇の、堂ヶ谷といふところ木を拾つているとき、ふと見れば目の前のカナギ（くぬぎ）の樹にもたれて、大男の毛ずねがぬくと見えた。見上げると目の

届かぬほどに背が高い。怖ろしいからすぐに引返して、それからほど近い自分の家に戻り、背戸口に立つて再び振り返って見ると、その大男はなおもとの場所に立ち、すご凄^い眼をしてじつと此方を見ていたので、その時になつて正氣を失つてしまったそうである。この堂ヶ谷は宮からも人家からも、至つて近い低い山であつた。こんなところまで格別の用もないのに、まれ稀^{には}山人が出向いてきて人を見ていたのである。神隠しの風説などの起りやすかつたゆえんである。

それから少なくとも我々に対して、常に敵意は持つてはいなかつたという証拠もある。おたうちみちとし小田内通敏 氏の示された次の一文は、

何かの抄録らしいが元もとの書物は同氏も知らぬという。津軽での話

である。

「中村・沢目・蘆あしのや谷村と云ふは、岩木山の 《たまたま》 あたりの谷蔭に人語の聴えしまゝ、其声を知るべに谷を下りて打見やりたるに、身の長たけ七八尺ばかりの大男二人、岩根の苔こけを摘み取る様子なり。背と腰には木葉を綴つづりたるものを纏まとひたり。横の方を振向ふりむきたる面構つらがまへは、色黒く眼円く鼻ひしげ蓬頭ほうとうにして鬚延ひげびたり。其状じようぼう 貌しゆうかいの醜しゆうかい 怪かいなるに九助大いに怖れを為し、是かねや兼かねて赤倉に住むと聞きしオホヒトならんと思ひ急ぎ遁げんとせしが、過ちて石に蹶つまずき転び落ちて、却かえりて大人の傍に倒れたり。仰天たし 慄しゆうりつ 慄りつ して口は物言ふこと能あたはず、脚あしは立つこと能あたはず、唯ただ手を合せて拜むばかり也。かの者等は何事か語り合ひしが、や

がて九助を小脇こわきにかゝへ、嶮岨けんそ巖窟がんくつの嫌ひなく平地の如くに馳
 せ下り、一里余りも来たりと思ふ頃、其まゝ地上に引下して、忽たちま
 ち形を隠し姿を見失ひぬ。九助は次第に心地元に復し、始めて幻
 夢の覚さめたる如く、首を挙げて四辺を見廻みめぐらすに、時は既に申さるの
 下りとおぼしく、太陽巒らんさい際さいに臨み返へんしやう照しょう長く横たはれり。其
 時同じ業の者、手にく薪を負ひて樵路しょうろを下り来るに逢ひ、顛
 末を語り介抱せられて家に帰り着きたりしが、心中鬱うつくつ屈し顔色
 憔悴しょうすいして食事も進まず、妻子等色々と保養を加へ、五十余日
 して漸く回復したりと也。」

二四 骨折り仕事に山男を傭いしこと

ただし山中においては、人は必ずしも山人を畏れてはいなかった。時としてはその援助を期待する者さえあつたのである。例の橘氏の『西遊記』にもよく似た記事があるが、別に『周遊奇談』^{しゅうゆうきだん}という書物に、山男を頼んで木材を山の口へ運ばせたという話を載せている。どのくらいまでの誇張があるかは確かめがたいが、まるまる根のない噂とは考えられぬのである。

豊前中津領^{なかつ}などの山奥では、材木の運搬を山男に委託することが多かつた。もつとも彼ら往來の場処には限^{かぎり}があるらしく、里までは決して出てこない。いかなる險阻も牛のごとくのそりのそりと歩み、川が深ければ首まで水に入つても、水底を平地のようにあるいてくる。たけは六尺以上の者もあつて、力が至つて強い。

男は色が青黒く、たいていは肥えている。全身裸であつて下帯したおびすらもないが、毛が深いので男女のしるしは見えぬ。ただし女は時に姿を見せるのみで出て働こうとはしない。そうして何か木の葉木の皮よりの物を綴つて着ている。齒は真ま白しろだが口の香が甚だ臭いとまでいつている。労賃は握にぎり飯めしだとある。材木一本に一個二本に二個。持つて見て二本一度に担かつげると思えば、一緒にして脇わきへ寄せる。約に背いて例えば二本に握り飯一つしか与えなかつたりすると、非常に怒つて永くその怨うらみを忘れない。愚直なる者だと述べている。

『西遊記』にいうところの薩摩方面の山わろなども、やはり握り飯もちを貰もらつて欣然きんぜんとして運送の労に服したが、もし仕事の前に少

しでも与えようと、これを食べってから逃げてしまう。また人の先に立って歩むことを非常に嫌う。つまりは米の飯が欲しいばかりに出て働くらしいので、時としては、山奥の寺などに入ってきて、食物を盗み食うことがある。ただし塩気しおけのある物を好まぬといっている。以上二種の記録は少しずつの異同があり、材料の出処の別々なることを示している。これ恐らくは信用すべき一致であろうと思う。

同じ『周遊奇談』の卷三には、また秋田県下の山男の話を記して、九州の例と比較がしてある。ただし著者自分で見たという点が安心ならぬ故に、特に原文のまま抄出して置く。

「出羽国仙北より、みずなしぎんざんあに水無銀山阿仁と云ふ処へ越ゆる近道、常ひだち陸内ないと云ふ山にて、路を踏み迷ひ炭焼小屋に泊りし夜、山男を見たり。形は豊前のに同じけれども力量は知れず。木も炭も石も何にでも負ひもせず。唯折おりおり々其小屋へ食事などの時分を考へ来るとなり。飯なども握りて遣つかはせば悦びて持ち退く。人の見る処にては食せず。如何いかにも力は有りさう也。物は言はず。たゞのさく立廻りあるくばかり也。もつと尤も悪きことはせず。至つて正直なる由よしなり。此処ここにては山女は見ず。又其沙汰さたも無し」。

山男はまた酒がすきで酒のために働くという話が、『桃山人とうざんじん夜話やわ』の卷三に出ている。「遠州秋葉の山奥などには、山男と

云ふものありて折節おりふし出づることあり。柚そま・山賤やまがつの為に重荷を
 負ひ、助けて里近くまで来りては山中に戻る。家も無く従類けんぞ眷
 属くとても無く、常に住む処更に知る者無し。賃錢を与ふれども
 取らず、只酒ただを好みて与ふれば悦びつゝ飲めり。物ごし更に分ら
 ざれば、唾おしを教ふる如くするに、その覚り得ること至つて早し、
 始も知らず終も知らず、丈の高さ六尺より低きは無し。山氣の化
 して人の形と成りたるなりと謂ふ説あり。昔同国の白倉しろくら村に、
 又蔵と云ふ者あり。家に病人ありて、医者よを喚びに行くとして、谷
 に踏みはづして落ち入りけるが樹の根にて足を痛め歩むこと能は
 ず、谷の底に居たりしを、山男何処よりも無く出で来りて又蔵
 を負ひ、屏風びょうぶを立てたるが如き処を安やす々やすと登りて、医師の門か

どぐち

口まで来りて搔き消すが如くに失せたり。又蔵は嬉しさの余りに之に謝せんとて竹筒ささせに酒を入れてかの谷に至るに、山男二人まで出でて其酒を飲み、大いに悦びて去りしとぞ。此このこと事古老の言ひ伝へて、今に彼地にては知る人多し」（以上）。又蔵が医者の家を訪れることを知つて、その門口まで送つてくれたという点だけが、特に信用しにくいように思うけれども、酒を礼にしたら悦んだということはありそうな話であつた。

二五 米の飯をむやみに欲しがること

山人が飯を欲しがるという話ならば、他の諸国においてもしば

しば耳にするとところである。土屋小介君の前年知らせて下さった話は、東三河の豊川上流の山で、明治の初めごろに官林を払い下げて林の中に小屋を掛けて伐木していた人が、ある日外の仕事を終つて小屋に戻つてみると、背の高い髭ひげの長い一人の男が、内に入つて自分の飯を食っている。自分の顔を見ても一言の言葉も交えず、したたか食つてからついと出て往つてしまった。それから後も時折りはきて食つた。物は言わず、またその他には何の害もしなかつたという。盗んだというよりも人の物だから食うべからずと考えていなかつた様子であつた。

次に鈴木牧之ぼくしの『北越雪譜ほくえつせつぷ』にある話は、南魚沼郡うおぬまの池谷村の娘ただ一人で家に機はたを織つていると、猿のごとくにして顔赤

からず頭の毛の長く垂れた大男が、のそりと遣つて来て家の内を覗いた。春の初めのまだ寒いころで、腰に物を巻きつけて機にかかつていたために、怖ろしいけれども急に遁げることができず、まごまごとするうちに怪物は勝手元へまわり、竈の傍に往つて、しきりに飯櫃めしびつを指さして欲しそうな顔をした。かねて聞いていたこともあるので、早速に飯を握つて二つ三つ与えると、嬉しい顔をしてそれを持って去つた。それから後も一人にいる時はおりきた。山中でもこれに出逢つたという人がそのころは時々あつたが、一人でも同行者があると決して来なかつたそうである。

また同国中魚沼郡十日町とおかまちの竹助という人夫は、堀之内へ越える山中七里の峠で、夏の或る日の午後はこの物に行逢うたことが

ある。白しろちぢみ縮の荷物を路ばたに卸おろして、石に腰かけて弁当をつかっている、やはり遣つてきたのが髪かみの長い眼まなこの光る大男で、その髪かみの毛けはなかば白しろかつたという。石いしの上に置いた焼飯やきいりをしきりに指ささすので、一つ投なげてくれると悦よろこんで食たつた。そうして頼たのみはせぬのにその荷物にものを背負せおつて、池谷村いけやの見えるあたりまで、送おくつてきてくれたという話である。

そこで改めて考かんえて見るべきは、山やま丈じょう・山やま姥うばが山路やまぢに現あらわれて、木樵きこり・山やま賤がつの負搬ふばんの労らうを助たすけたとか、時ときとしては里さとにも出でてきて、少すこしずつの用もちをしてくれたという古ふるくからの言い伝つたえである。これには本来ほんらいは報酬ほうじゆの予想よそがあり恐おそらくはそれが山人しやうざんちよもんきしゆうたちの経験けいけんであつた。『想しやう山ざん著ちよ聞もん奇き集しゆう』などに詳くわしく説せつい

た美濃・信濃の山々の狗竇餅ぐひんもち、或いは御幣餅ごへいもち・五兵衛餅とも称する串くしに刺した焼飯のごときも、今では山の神を祭る一方式のように考えているが、始めてこの食物を供えた人の心持は、やはりまたもつと現実的な、山男との妥協方法であつたかも知れぬ。中仙道は美濃の鵜沼うぬま駅から北へ三里、武儀郡志津野むぎのしづのという町で、村続きの林を伐つたときに、これは山というほどのところでもなく、ことに老木などの覆おおい繁しげつたものもない小松林の平山だから狗竇餅にも及ぶまいと思つて、何の祭まつりもせずまに寄合つて伐り始めると、誰も彼もの斧の頭がいつのまにかなくなり、道具もことごとく紛失していた。これはいけないとその日は仕事を中止し、改めて狗竇餅をして山の神に御詫ごんげびをしたら失せた道具がぼつぼつ

と出てきた。また同じ国苗木領なえぎの二つ森山では、文政七八年のころ木を伐出す必要があつて、十月七日に山入して御幣餅ごしらを拵こしらえたのはよいが、山の神に上げるのを忘れて、自分たちでみな食つてしまつた。そうすると早速山さつそくが荒れ出して、その夜は例の天てんぐ狗倒だおしといつて、大木を伐倒す音が盛んにした。この時も心づいて再び餅を拵えて詫びたので、ようやく無事に済んだといつてゐる。この地方では狗賓餅きんべいをするには、定きまつた慣習があつた。まず村中に沙汰さたをして老若男女山中に集まり、飯を普通よりはこわく炊かしぎ、それを握つて串に刺し、よく焼いてから味噌をつける。その初穂はつほを五六本、木の葉に載せて清い処ところに供えて置き、それから一同が心のままに食うのである。甚はなはだうまい物だがこの餅をこ

しらえると、天狗が集まってくると称して村内の家では一切焼かぬようにしていた。故に一名を山小屋餅、江戸近くの山^{やまかた}方では、古風のままに^{しとぎもち} 粢餅と呼んでいた。今日我々が宗教行為というものの中には、まだ動機の分明せぬ例が多い。ことに山奥で天狗の悪戯などと怖れた災厄には、こういう人間味の豊かな解除手段もあつたことを考えると、存外単純な理由がかえつて忘却せられ、実験のようやく稀になるにつれて、無用の雑説が解説を重苦しくした場合を、推測せざるをえないのである。

少なくとも焼飯の香氣には、引寄せられる者が山にはいた。食物を供えて悦ぶ者のあることを、里人の方でもよく知っていた。そうして双方が正直で信を守ることが、昔は別段の努力でもなん

でもなかった。従つてまず与えると働かずに遁げてしまふというのを、あたかも当世の喰遁げ同様に非難しようとしたならば誤つている。以前は山人はなんの邪魔もしなければ御幣餅をもらうことができ、またそれをくれぬ時にはあばれてもよかつた。特に出てなんらかの援助を試みたのは、いわば好意でありまた米の味に心酔した者の、やや積極的な行動でもあつた。もし私たちの推測を許すならば、それは或いは山人の帰化運動の進一歩であつたのかも知れぬ。次の章に述べようとする飛驒のオオヒトの場合のごとく、人は単に偶然に世話になつた場合にも、謝礼に握り飯を贈れば相手の喜ぶことを知り、相手はまた狸兎の類を捕つてきて、これを答礼にして適當なりと考へたのも、やがては異種諸民族間

の貿易の起原と同じかつた。こうしてだんだんに高地の住民が、次第に大日本の貫籍かんじやくに編入せられて行つたことは、自他のために大なる幸福であつた。

越後南魚沼の山男が、猿に似て顔赤からずと伝えられるのは、一言の註脚を必要とする。これは単に猿ほどには赤くなかつたというまでであつたらしく、普通はこれと反対に顔の色が赤かつたという例が少なくない。顔ばかりか肌膚全体が赤かつたという噂さえ残つている。近世の蝦夷地えぞちに、いわゆるフレッシュム（赤人）の警を伝えた時、多くの東北人にはそれが意外とも響かなかつたのは、古来の悪路王あくろおうや大竹丸おおたけまるの同類に、赤頭太郎などと称して赤い大人おおひとが、たくさんにきたという話を信じていたからであ

る。それがひとり奥羽に限られなかつた証拠は、例えば弘仁七年の六月に弘法大師が、始めて高野の靈地を発見した時にも、嚮きよう導どうをしたという山中の異人は、面赤くして長八尺ばかり、青き色の小袖こそでを着たりと、『今昔物語』には記している。眼の迷いとしても現代になるまで、大人は普通は赤い者のように、世間では考えていた。もつとも豊前中津領の山ワロのように、男は色青黒しという異例も伝えるが、此方には比較すべき傍証が多くない。また赤頭というのは髪の色で、それが特に目についた場合もあるが、顔の色の赤いというのもそれ以上に多かつたのである。或いは平地人との遭遇の際に、興奮して赤くなつたのかということとも一考せねばならぬが、事實は肌膚の色に別段の光があつて、

身長の異常とともに、それが一つの畏怖いふたねの種たねらしかった。地下の枯骨ばかりから古代人を想定しようとする人々に、ぜひとも知らせておきたい山人の特質である。

二六 山男が町に出で来たりしこと

これを要するに山にこういう人たちのいるということは、我々の祖先にとっては問題でもまた意外でもなかった。ただ豊前・薩摩の材木業者以上に、意識して彼らと規則立った交通をする折が乏しかったために、例えば禁止時代の切支丹きりしたんばてれん伴天連ばんてんれんに対することく、甚だ精確ならざる風評と誇張とが、ついて廻ったのを遺憾と

するばかりである。いわゆるヤマワロ（山童）の非常に力強かつたこと、これは全く事実であつたろうと認める。そうして怒ると何をするかわからぬというのも、また根拠ある推測であつた。なおまた彼らが驚くべく足が達者だといったのも、通例平地の人々と接することを好まぬ以上は、急いで林木の茂みの中に、避け隠れたとすれば不思議はない。野獣を捕つて食物としておれば、そのためには女でも足が速くなければならない。不思議はむしろ何かという場合に、かえつて我々に近づこうとする態度の、明瞭に現れていたことである。しかもしばしば不幸なる誤解があつて、人がその真意を酌^くむことをえない場合がいかにも多かつた。

『東武談叢』^{とうぶだんそう}その他の聞書^{ききがき}に見えているのは、慶長十四年の

四月四日、駿府城内の御殿の庭に、弊衣へいいを着し乱髪にして青あおがえ

蛙るを食う男、何方いずかたよりともなく現れ来る。住所を問うに答な

く、ただ手をもつて天を指ぎしたのは、天からきたとでもいうことかと謂つた。家康は左右の者がこれを殺さんとするのを制止し、城外に放たしめたるに、たちまちその行方を知らずとある。この怪人は四肢ししに指がなかつたともあるが、天を指さしたというからは甚だ信じがたい事であつた。それからまた三十年余り、寛永十九年の春であつた。土佐では豊とよなが永郷の山奥から、山みこと称する者を高知の城内へつれてきた。年六十ばかりに見える肉づきの逞たくましい大男で一言も物いわず、食を与うれば何でも食つた。二三日の間留めておいてのちに元の山地へ放ち返したと、当時のいく

つかの記録に載せてある。いずれも多くの人がともに見たのだから、まぼろしとは認めがたい話である。ことに「山みこ」という語が、すでにあの時代の土佐にあつたとすれば、必ずしも稀有けうの例ではなかつた。ミコはどう考えても神に仕える人のことで、天狗と同じく彼らを山神の使者、もしくはは代表者のごとく見る考えが、吉野川上流の村にはあつたことを想像せしめる。

この前後は土着開発に急なる平和時代で、その結果は山と平地との間に、人知らぬ攪こうらん乱があつたかと思われ、山人出現の事例がたくさんに報ぜられている。尾州名古屋はんじょうというような繁昌はんじょうの土地にも、なおいずこからか異人が遣つてきて捕えられたといっている。太い綱で縛つておいたにもかかわらず、夜の間逃げ

てしまい、しかもなんらの報復をもしては行かなかつた。仙人などと違つて存外に智慮もなく、里近くをうろうろしていたのをみると、やはり食物か配偶者か、何か切せつに求むるものがあつたためで、半なかばはその無意識の衝動から、浮世の風に当ることにはなつたのである。ことにその或る者が日向や越後の例のごとく、白髪であつたと聴くに至つては、悠々ゆうゆうたるかも人生の苦、彼らはたこれを免れえなかつたのである。

名古屋で異人を捕えたという話は、『視聴実記』しちようじつき卷六に出ている。年代は知れぬが江戸の初期であろう。本文のままを次に抄録する。

「飯沼林右衛門は広井に住す。夜話の帰りに僕しもべの云ふには、南の路より御帰りなさるべし。それは道遠し。何故にさは云ふかと叱しつすれば、御おもひかえ迎むかに来るとき、東光寺の壁の下に、小坊主の一人立ちて在るを見しが、一目見て甚だ戦せんりつ慄おそせし故に、かく申す也と答ふ。林右衛門笑ひながら、さあらばいよく／＼行きて見るべしとて行くに、果して十二三ばかりの小僧あり。物を尋ぬれども答へず。之を捉とらへ引立てんとするに、甚だ力強し。されど林右衛門も強力なれば、漸ようやくに之を引立て、程ほど近ければ我家に連れ帰り、打うち擲ようちやくをすれども曾かつて物を言はず、且つ杖つえの下痛める体も無く、何とも仕方無ければ、夜明けて再び糾きゆうめい明あすべしとて、厩うまやに強く縛り附け置きしに、朝になりて見れば、何処へ行きけん其影も

見えざりき。或は云ふ打擲の間に只ただ一声、あいつと云ひし故、其頃世間にては之を『あいつ小僧』と謂ひたりとなん。」

山男が市に通うということは、前の五葉山の獵人の話にもあつたが、これまた諸処に風説するところである。津村正恭の『譚たんか海』卷十一に、

「相州箱根に山男と云ふものあり。裸体にて木葉樹皮を衣とし、深山の中に住みて魚を捕ることを業とす。市の立つ日を知りて、之を里に持来りて米に換ふる也。人馴なれて怪しむこと無し。交易の外多言せず。用事終れば去る。其跡を追あとひて行く方を知らんとせし人ありけれども、絶壁の路も無き処を、鳥の飛ぶ如くに去る故、終ついに住所を知ること能はずと謂へり。小田原の城主よりも、

人に害を作なす者に非ざれば、必ず鉄砲などにて打つことなかれと制せらるゝ故に、敢て驚かさずと云ふ。」

こうあるけれどももちろん噂話で、必ずしも小田原の御城下まで、この連中がうろうろしていたことを意味するのではあるまい。第一に川魚はこの海辺では交易にもならず、木の葉を着ていたら、なんぼでも人馴れて怪まずとは行くまい。ただこの人中にも一人や二人はいるかも知れぬという程度に、輿論よろんが彼らを尋常視していたことは窺うかがわれる。岩手県海岸の大槌おおつちの町などでも、市の日なまに言葉の訛りの近在の者でない男が、毎度出てきて米を買って行った。背は高く眼は円くして黒く光っていた。町の人が山男だろうといったそうである。しかしこれから奥地の山々には、今でも

ずいぶんと遠国から、炭竈すみがまに入つて永く稼かせいでいる者が多い。言語風采の普通でないばかりに、一括してこれを山人に算入するのは人類学でない。ただ市という者の本来の成立なりたちが、名を知らぬ人々と物を言う点において、農民に取つては珍しい刺戟しげきであつた故に、例えばエビスというがごとき神をさえ祭り、ここに信仰の新しい様式を成長せしめたのである。信州南安曇あずみでは新田しんでんの市、北安曇では千国ちくにの市などに、暮の市日いちびに限つて山姥が買物に出るといふ話があつた。山姥が出ると人が散り市が終りになるともいつたが、一方には山姥が支払に用いた錢には、特別の福分があるようにも信じられた。ようやく利欲というものを実習した市人が、いかに注意深くただの在所ばばさまの婆様たちを物色していたか

は、想像してみても面白い。その為でもあろうか今も昔話の一つに、山姥が三合ほどの徳利とっくりを携えて、五升の酒を買いにきたというのがある。笑った物は罰せられ、素直すなおにいう通りに量つて遣ると、果して際限もなく入ったといい、またはこれにあやかつて金持になつたともいう。つまりは俵藤太たわらとうだの取れども尽きぬ宝などど、系統を同じくした歴史的空想である。

筑前甘木あまぎの町の乙子市おとこ、すなわち十二月最終の市日にも、山姥が出るという話が古くからあつた。正徳四年に成る『山姥帷子やまうばかたびら記らっき』という文に、天正のころ下見村の富人だいなごん大納言なる者の下僕もめんわた木綿綿を袋に入れてこの日の市に売りに出で、途中に仮睡して市の間に合わなかつた。眼が覚めてみると袋の綿はすでになく、

そのかわりに一枚の帷子が入っていた。地氈じあらかくして青黄黒白の段だ染んぞめであつた。これも山姥の物と認められて、宝物として二百年を伝えたという話を書留めてゐる。

それからこのついででないともう他にいう折はないが、絵かきたちだけの今でも遊んでいる空想境に、天狗の酒買い狸の酒買いなどという出来事がある。白鳥の徳利や樽たるに通い帳かよを添ちようえて、下げて飛んでいる場面は後世風だが、由つてくるところは甚だ久しいようである。自分は別に今日の酒樽の原型として、瓢ひさいしの盛んに用いられた時代を推測し、許由以来の支那の隠君子等しんまが駒こまを出したり自分を吸込ませたり終始この単純なる器具を伴はん侶りよとしてい

するには、何か民俗上の理由があるらしいことを、考えて見ようとして
 しているのであるが、それは広大なる未解の課題だとしても、少
 なくとも山の人の生活に、この類の僅かな用具が非常なる便益で
 あり、従つて身を離さずに大切にしているのをみて、我々の祖先
 まだがこれを重んじ、何か神怪の力でも具そなうるかのごとく、惚ほれ
 こみ欲しがり、貰えば宝物にしようとしたことだけは、説かずに
 はおられぬような感じがする。『落穂余談』おちほよだんという書の卷二に、
 「駿河の山に大なる男あり。折おり々は見る者もあり。鹿猿しかざるなどを
 食する由なり。久世くぜ太郎右衛門殿物語くぜたろうえもんどのものがたりに、前方此男出でけるに、
 腰に何やらん附けて居る故、或あるもの者近く寄りてそれを取り、還り
 て見れば高麗こうらいの茶碗ちやわんなり。今に其子の方に持おりて居ける由。

丙寅^{へいゐん}八月、宇右衛門殿物語り。甚兵衛殿も聞及ぶの由、同坐^{どうざ}にて語る」とある。これなどは山姥から、褒美^{ほうび}にもらつたというのと反して、手もなく山男から掠^{りやく}奪^{だつ}したのであるが、最初どうしてこのような品を、彼らが拾い取りまたこれを大事にしていたかを考えると、小説家でない我々にも、いろいろな珍しい光景が空想せられる。例えば盜賊が始末に困つて、山中に隠して置いたとか、大百姓の家が退転して、荒屋敷^{あれやしき}になつているところへ、のそのそと来かかつた山男が、光るから手に取上げて嗅^かいだり嘗^なめたりしていたとしたら、彼らの排外的なる社会にまでも、浸^しみ入らずにはおかなかつた異種文明の勢力の大きさの、想像に絶したものであることが考えられる。

かつて旧知の鈴木鼓村君から、またこんな話を聴いたこともある。鈴木君は磐城亙理郡わたり小鼓村こつづみの旧家の出で、それで号を鼓村こそんといっているが、今から百二十年ほど前の鈴木君の家へ、おりおりもらいにくる老人があつた。人と物をいわず、物を遣ると口の中で唱となえ言ごとをするが、何をいうのか少しも聴取れない。飯は両手に受けて副そえ物ものもなしに、髯ひげだらけの顔をよごして食う。酒は大好きで、常に一斗二三升も入るかと思う。大瓢おおひょうたん箆へらを携え来り、それに入れて遣るとすぐに持つて帰る。衣類は着けているが、地じ合あいいも縞目しまめも見えぬほど汚れていた。生なまの貝かいをもらつて、石の上で砕いて食つたといつて、人は戯れにこれをアサリせん仙にん人と呼んでいた。何処に住む者とも知れず、七日も十日も連日くるかと思え

ば、二月も三月も絶えてこぬこともあった。帰る際にその跡をつけた者があつたが、山に入ると急に足早になり、たちまちにその影を見失つた。小鼓こつづみは阿武隈あぶくまの川口であつて、山は低いけれども峯は遠く連つている。このアサリ仙人は或る日の朝、鈴木氏の玄関の柱にその大瓢箪をくくりつけて置いて、それつきり永久に遣つてこなくなつた。この話には誤伝がないともいえぬが、瓢箪だけは最近に至るまで、この家の宝物の一つであつた。口は黄金ですこぶる名瓢であつたという。

仙人を見縊みくびるのは本意でないが、これくらいの仙人ならば、まだ山男にも勤まると思う。ただ鈴木氏の永年の恩誼おんぎは厚かつたにしても、最後に人知れずその瓢をくくりつけて去つたという一

点だけが、彼らのとうてい企てえまいと思うロマンチックであった。この地方の山人が里に親しみ、山で木小屋の労働者を驚かすに止らず、往々村人の家を訪ねて酒食を求め、村人もまたこれを尊敬していたことは、次のオオヒトの条下に確からしい一例を掲げる。そうするとこれもまた同化帰順の一段階であつて、瓢箪のごときもじつはあまりに大きいので、何か手ごろの容器とただそつと取り替えて往つたのかとも考えられる。

二七 山人の通路のこと

今日のいわゆるアルプス連れんなどは、どういう風になっているか知

らぬが、獵師・木挽らのごとくたびたび山奥に野宿せねばならぬ人々は、久しい経験から地形に由つて、不思議の多かりそうな場処を知つて力めてこれを避けていた。おりおりこれは聴く話であるが、深山の谷で奥の行止まりになつているところは無事であるが、嶺みねが開けて背面の方へ通じている沢は、夜中に必ず怪事がある。素人しろうとは魔所などといえ、往来不可能の谷底のように考えるけれども、事實はかえつて正反対であるという。或いはまた山の高みの草茅くさかやの茂みの中に、幽かすかに路らしいものの痕跡こんせきを見ることがあると、老功な山稼やまかせぎ人は避けて小屋を掛けなかつた。即ち山男・山女の通路の衝しょうなることを知るからである。国道・県道という類の立派な往還でも、それより他に越える路のないとこ

ろでは、夜更けて別種の旅人の、どやどやと過行く足音を聴いた。峠の一つ屋などに住む者は、往々にしてそんな話をする。もちろん或る場合には耳の迷いということもありうるが、山人とても他に妨げさえなくば、向うの見通される広路を行く方を、便利としたに相異なるのである。

百五十年ほど前に三州豊橋の町で、深夜に素裸すっぱだかではだしの大男が、東海道を東に向つて走るのを見た者がある。非常な速はやあ歩しで朝日の揚あがるころには、もう浜名湖の向うまで往つていた。水中に飛込んで魚を捕え、生のまままで食っているのを見て始めて怪物なることを知つたと、『中古著聞集ちゅうこちよもんじゆう』という豊橋人の著書には書いてある。彼らに出逢つたという多くの記事には、偶

然であつた場合に限つて、彼らの顔にもやはり驚駭きようがいの色を認めたといつている。畏怖も嫌忌も恐らくは我々以上であつて、従つて必要のない時にはたいてい繁しげみ隠れなどから注意深く平地人の行動を、窺つていたのであらうと想像する。

すがえますみ菅江真澄の『遊覧記』三十二巻の下、北秋田郡の黒滝の山中で

路に迷つた条に、「やゝ山頂とおぼしき処に、横たはる路のかたばかり見えたるに、こは路ありあな嬉しと言へば、案内の者笑ひて、いづこの嶺にも山鬼さんきの路とて、嶺の通路はありけるもの也。

此道を行かば又何処とも無く踏迷ひなんとて、尚峯なおに登る云々」とあつた。故伊能嘉矩氏の言には、陸中遠野地方でも山の頂の草

原の間に、路らしいものの痕迹こんせきあるところは、山男の往来に当
 つていると称して、露宿の人がこれを避けるのが普通だったとの
 話である。阪本天山翁、宝暦六年の『木曾駒ヶ岳後一覽記』
 に、前まえだけ岳の五六分目、はい松の中に一夜を明す。ここに止宿の
 ことは村役人・人足までも不承知にて、かれこれと申すにつきそ
 の趣旨を尋ねて見ると、すべてかよ山の山尾根先おねさきは天狗の通路で
 あつて、樵夫きこりの輩やから一切夜分やぶんは居らぬことにしていると述べた。し
 からば村方むらかたの者どもは、山の平に廻つて止宿せよと申聞け、自
 分だけ其場に止宿したと記している。紀州熊野でも山中に小屋を
 掛ける人たち、谷の奥が行抜けになつて向う側へ越えうる場所は
 これを避け、奥の切立つて行詰まりになつた地形を選定するのを

常とした。その理由は行抜けのできる谷たにあい合は、通り物の路みちに當つてゐるからだ、南方熊楠氏に告げた者があるそうだ。

そうかと思うと一方には、人が開いた新道を、どしどし彼らが利用している場合もあるらしい。秋田から仙北郡の刈かり和野わのへ越える何とか峠には、頂上に一軒家の茶店があつた。秋田の丹生氏がかつてこの家に休んだ時、わたしらももう何処かへ引越したいと、茶屋の主がいうので、どういうわけかと訊ねてみると、じつは夜分になると、毎度のように山男が家の前を通る。太平山たいへいざんから目々木めめきの方へ越えて行くらしく、大きな声で話をしてどやどやと通ることがある。この峠は疑なく山鬼の路らしいから、永くはおられませぬと答えたそうである。遠野でも町から北へ一里ばかり入

つて、柏崎の松山の下を曲がる辺に、路が丁字に会してその辻に大きな山神石塔を立ててある。近い年或る人が通行していると、山から下りてくる足音がするのを、何の気なしに出逢うて見たところ、赤い背の高い眼の怖ろしい、真裸の山の神であった。はつと思ふなり飛退とびのいてしまつて、自身はそこに氣絶して倒れた。石塔はすなわちその記念の爲であつた。『遠野物語』にもその話は筆録しておいたがかなり鋭敏な鼻と耳との感覺を持ち、また巧みに人を避けるらしい山人にも、なお人間らしき不注意と不意打とはあつたのである。第一昼間人間の作つておく路などを、降りてきたのは氣樂過ぎていた。

山鬼さんきという話は安芸の巖いづくしま島などでは、久しく天狗護法の別

名のごとく考えられている。或いは三鬼とも書いてその数が三人と解する者もあつたらしい。御山みせんの神聖を守護して不浄の凡俗の

これに近づくを戒め、しばしば奇異を示して不信者の所業を前もつつしって慎ましめようとしていた。最も普通の不思議は廻廊の板縁いたべり

の上に、偉大なる足跡を印して衆人に見せることである。或いは雪の朝に思いがけぬ社の屋おくの上などにこれを見ることもあつた。

その次は他の地方で天狗笑いまたは天狗倒しともいうもので、山中茂林の中に異常の物音を発し、或いはまた意味不明なる人の声ががすることもあつた。これを聴いて恐れおののかぬ者のなかつたは尤もである。秋田方面の山鬼ももとは山中の異人のはんしょう汎称で

あつたらしいのが、のちには大平山上に常住する者のみをそいうことになり、ついには三吉大権現だいこんげんとも書いて、儼然げんぜんとして今はすでに神である。しかも佐竹家が率先して夙つとにこれを崇敬すうけいした動機は、すぐれて神通力という中にも、特に早道早飛脚はやみちはやびきやくで、しばしば江戸と領地との間に吉凶を報じた奇瑞きずいからであつた。従つて沿道の各地でも今なお三吉様が道中姿で、その辺を通つてゐることがあるように考え、ことにその点を畏敬いけいしたのであつた。神を拝む者はぜひともその神の御名みなを知らなければならぬというのは、ずいぶん古くからの多くの民族の習性であつた。天狗がいよいよ超世間のものと決定してから、太郎坊・三尺坊等の名が始めて現れたことは、従来人の注意せざるところであつた。どうい

う原因でそんな名前が始まったかを考えてみたら、また多くの新たな答が出てくることであろう。

二八 三尺ばかりの大草履のこと

また山男の草履ぞうりを見たという話がある。夏冬を打通して碌ろくないしょう裳しようも引掛けていなかた者に、履物はきものの沙汰さたもちとおかしいとは思しうが、妙まうにその噂うわさが東部日本の方には拡がっている。信州木曾きそ邊はことにこれを説く者が多い。出羽の荘内の山中でもそまびと人ひとがこれを拾つつてきて、小屋の入口の柱つるに吊して置くと、夜のうちに持もつて還かえつたか、見えなくなつたなどといっている。上州の妙み

ようぎ はるな
 義・榛名でも獵師・木樵の徒、山中でこの物を見るときは畏れ
 てこれを避けたと、『越人関弓録』という書には説いてあ
 る。

その草履の大きさは三四尺、これを山丈の鞋わらしと称すとある。

『四隣譚叢』などによれば、信州は千隈川ちくまがわの水源川上村附近

の山地においても、山姥の杳くつの話を信じている。藤蔓ふじづるを曲げ樹

の皮をもつて織つてあるなどと、なかなか手のこんだもののように
 言い伝えているのである。大きいと言えばすぐに長さ三尺の四
 尺のと書かなければ承知せぬが、かりにこれに相応するような大
 足の持主があるにしても、そんな物を履はいて山の中があるけたも
 のでない。我々風情ふぜいの草履ですらも、野山を盛んに飛廻っていた

時代には、アシナカ（足半）と称するものを用い、または単に繩なわで足の一部分を縛しばつて、たいていは足一杯の草履は履かなかつた。すなわち足趾そくしのつけ根の一番力の入る部分を、保護するだけをもつて満足したのであつた。

ただしこの類の話などは、誇張妄誕こちようもうたんといわんよりも、むしろ幻覚であつたかと思う。見たかと思つたらすぐになくなつていったというようなもので、確かな出来事ではなかつたかと思う。いろいろ製法や材料配合の話はあつても、なおどこかで採集してきて博物館にでも陳列せられぬ限り、自分たちはこれをもつて一種の昔話としておきたいのである。もちろん話にしたところで根原がなければならぬ。作つて偽を説く者はあつても、そうみなが信

ずるはずはないからである。ただ話ならば少しずつ成長して行くことはあるかも知れぬ。陸中にのへ二戸郡の浄法寺村などで、深山に木を伐る者の発見したというのは、例のマダの樹の皮で作った大草履で、その原料のマダの皮が、およそ馬七頭につけて戻るくらい分量であつたと話している。面白いといつて聴くのはよいが、全体に今ではもう話になりすぎている。それというのが風説のみ次第に高く、実際に見た出逢つたという人の例が、だんだん少なくなつて行く結果である。

山丈・山姥の鞋という話は、我々の持っていた沓くつ掛かけの習俗、すなわち浅草仁王門の格子こうしの木にむやみな大わらんじの片足をぶ

らさげた行為などと比較して考えて見るべきものかと思う。現在各地の街道筋に、杳掛という地名のあるところには、通例は道の神の森または老樹があつて、通行の人馬の古杳ふるくつなどが引掛けてある。或いは下から高く投げ上げて占うらいをしたという地方もあり、または支那でいう鮑魚神ほうぎよしん同然にその草鞋きょうほくの喬木きょうぼくの梢にあるを異として、神に祀つた話もある。霊山の麓などでは山の土を遠く持ちだすことを山神にく悪にくみたもうという信仰もあつて、必ず登山の鞋を脱いで行く場処もあるのだが、別に神々に新たなるものを製して献上する例も弘く行われていた。山の神は一本足だと称して、大きな片足だけを供える。かまど竈かまどの神は馬でありもしくは馬に乗つてくるというので、新しい馬の杳かまどを上げていた根原は、おそら

く絵馬えまなども同様に、これを召しておわしませ、これを召して立
 たせたまえと、神昇降の時刻を暗示する趣旨かと思うが、もちろ
 ん信仰はだんだんに変化している。ことに路の傍や辻つじ境かいなど
 に偉大な履物を作つて置いた動機には、明白に魔よけの意味が籠こも
 つていた。いつの世から始まつたことか知らぬが、こんな大きな
 草履を用いる者が、この村にはいるから馬鹿にしてはいけないと
 いうことを、勝手を知らぬ外来者、すなわち鬼や疫病やくび神がみに知
 らしめるために、一種の示威運動としてこうするように、解釈し
 ている者も少なくはないのである。敵に対しては詐術さしゅつも正道と、
 つい近ごろまで我々も信じていた。そうかと思うと海南の小島に
 おいては、潮に漂うて海の外から、そんな大草履が流れてきたと

いって、畏れ慎んでいた話もあった。この方が多分一つ前の俗信で、つまりは己おのれの心に欲せざるところを、人に向かつて逆用しようとしたものであるらしいのだ。

だから第二の仮定説としては、山人の大草履も自分のためには必要でないが、世人を畏いかく嚇する目的でわざわざこれを作り、なるべく見られやすいところにおいたものとも考えられぬことはない。しかしそのような気の利いた才覚は、ついで彼らの挙動から見出したことがないから、今ではまだそれまで買いかぶることができないのである。もつとも深山の奥に僅少の平和を楽む者が、いやかりうど 猟人だの岩魚釣いわなつりだの、材木屋だの鉾山師だの、また用もない

山登りだのと、毎々きて邪魔をすることは鬱陶うっとうしいには相違ない。やめて欲しいと思つてゐることは、此方からでも想像するこ
とができた。そこに単独の約束が起こり法則が生じて、のちよう
やく宗教の形になつて行くことは、いずれの民族でも変りはな
かつた。しかも冷淡なる第三者の目をもつて判ずればそれは単に一方
だけの自問自答であつて、果して此方の讓歩が先方の満足と相当
つたか否かは、確かめたわけではないのである。深山の中でも特
に不思議の多い部分を我々は魔所または靈地と名づけてあえて侵
さなかつた。それが自然に原住土人にとつての一種のレザーヴと
なつたことは、原因ともどちらとでも解せられる。いわゆる入いら
ず山に強しいて入つた者の、主観的なる制裁は多様であつた。最も

惨酷なるものは空へ引きあげて、二つに割さいて投げおろすといつた。或いは何とも知れぬ原因で躓つまずいたり落ちたりして傷きずきまたは死んだ。永遠に隠ひそまれてしまつて親兄弟を歎かしめることもある。およそ尋常ゆうり邑里の生存において予知すべからざる危難は、ことごとく自ら責め深く慎むべき理由としてこれを認めたのが山民の信仰であつた。

それ以外にも予告警戒のごときものはいくらもあつた。天狗の礮つづてと称して人のおらぬ方面からぱらぱらと大小の石の飛んできて、夜は山小屋の屋根や壁を打つことがあつた。こんな場合には山人が我々の来住を好まぬものと解して、早速に引きあげてくるものが多かつた。こればかりは猿さえもするから、或いは山人の真の

意趣に出たものと考えてもよいが、それがいつでも合図に近くして、かつてこれによつて傷いたという者を知らず、石打の奇怪事は都邑の中にも往々にして起こり、別に或る種の隠れた原因があるらしいから、まだなんとも断定はできない。それから足音や笑い声の類は、偶然にこれを聴いた者がおじ恐れたというだけで、もとよりそのような計画のあつたことを、立証することは容易でない。ことに最も有名なる天狗倒しの音響に至つては、果して作者が彼らであつたかということさえ、なお疑わなければならぬのであつた。或いは狸の悪戯などという地方もあるが、本来跡方あとかたもない耳の迷いだから、誰の所業と尋ねてみようもない。深夜人定まつてから前の山などで、大きな岩を突き落す地響がしたり、

またはカキンカキンと斧の音が続いて、やがてワリワリワリワリ
バサアンと、さも大木を伐り倒すきような音がする。夜が明けてか
らその附近を改めて見ると、一枚の草の葉すら乱れてはいなかつ
た、などというのが最も普通の話で、こういう出来事があまり毎
度繰り返されると、山が荒れると称して人が不安を感じ始め、つ
いにはその谷を「よくないところ」の一つに算かぞえて、避けて入ら
ぬようにもなるのである。しかし多勢が一度に聴いても幻覚はや
はり幻覚である。或いは同じ物音とともに聴いたと思つても、甲
の暗示が乙を誘い、また丙の感じを確かにしたのかも知れぬ。東
京あたりの町中でも深夜の太鼓馬鹿たいこばか囃子ばやし、或いは広島などでいう
バタバタの怪、始めて鉄道の通じた土地で、汽笛きかんしゃ汽罐車の響を

狐狸こりが真似するというのが、およそ異常に強烈な印象を与えたものが、時過ぎて再びまぼろしに浮ぶ例は、じつは他にも数限りがないので、たまたま山の生活と交渉のある場合ばかりこれを目に見えぬ山の人の神通に托するがごときは、むしろ我々の想像の力の致すところであつたかも知れぬ。

ただしこれをも我々の実験の中に算えて、見た出逢つたということと同じ程度の、信用を博している物語は多いのである。少なくともその二三の例は、のちの研究者のために残しておく必要があると思う。

『しらかわふどき白河風土記』卷四に、「つりう鶴生（福島県西白河郡西郷村大字）の奥なる高助たかすけと云ふ所の山にては炭竈すみがまに宿する者、時としては

鬼魅きみの怪を聴くことあり。其怪を伐木坊きりきぼう又は小豆磨あずきとぎと謂ふ。

伐木坊は夜半に斧伐ふばつの声ありて顛木てんぼくの響を為す。明くる日其処

を見るに何の痕あとも無し。小豆磨は炭小屋に近づきて、中夜に小豆

を磨する音を為す。其声サク／＼と云ふ。出でて見るに物無し、

よりに名づくといへり。」

『笈埃随筆きゆうあいずいひつ』卷一に、「途中にて石を撃たるゝこと、土民は

天狗の道筋に行きかゝりたるなりと謂ふ。何れの山いずにても山神の

森とて、大木二三本四五本も茂り覆ひたる如くなる所は其道なり

と知ると言へり。佐伯了仙と言ふ人、豊後杵築きづきの産なり今は京に

住めり。此人の云ふ。国に在りし時、雉子きじを打ちに夜込よこみに出でた

り。友二三人と共に鳥銃ちようじゆうを携へて山道にかゝりしに、左右よ

り石を投げたり。既に当りぬべく覚えて大に驚きたる中に、よく心得たる者押おし静しずめ、先づ下に坐ざせしめて言を交へずしてある程に、大石の頭上に飛びちがふばかりにて其響おび夥たしかりしが、暫くして止みければ、立上りて行きける。其友の謂ふやう、此は天てん狗つ礫ぶと云ふものなり。曾かつて中あたるものには非ず。若もし中れば必ず病むなり。又此事に遭へる時は必ず獵無し。今夜は帰るには道遠ければ是非なく行くなりと曰ふ。果して其朝はひ一とつも獲物なくして帰りたりといへり。」

『今きん齊せい諧かい』卷二に、「加賀金沢の土篠原庄兵衛、或時深山に入り、人跡絶たえたる谷川の岸を行きしに、水辺には蘆あしすき間も無く茂りたるが、其あなたに水を隔て、人のあまた対坐して談笑す

る声聞ゆ。篠原之これを怪しみ、自ら行きて見んとすれど水に遮さえぎられて渡ることを得ず。連れたる犬にけしかけたれど亦行かず。因つて其犬の四足を捉とらへ、力を極めて之を蘆原の彼方かなたへ投げたるに、向ふよりも直ちに之を投げ返す。之を見て畏おそれを抱いだき家に帰る。犬には薬など飲ませたれど、終に死したり。」

『北越奇談』ほくえつきだんに、「神田村に鬼新左衛門と云ふ者あり。殺せつしよ生うを好む。村の十余町奥なる山神社の下の溪流に水鳥多し。里

人は相戒めて之を捕りに行くことなかりしを此男一人雪の中を行き、もち繩なわを流して鳥を取ること甚だ多し。一夜又行きしも少しも獲物無きことあり。暁あかつきに及び、何者とも知れず氷りたる雪の上を歩む音あり。新左衛門小屋の中より之を窺うかがふに、長一丈余りの

男髪は垂れて眼を蔽へり。新左衛門のすくみ居たるを、小屋の外より箕みの如き手を出して攫つかみ上げ、遙かに投げ飛ばしたりと思へば氣絶す。翌朝女房より村長に訴へて谷々を捜せしに、谷二つ隔て、北の方に新左の雪中に倒れたるを見付けたり。其後生き返り殺生は止めたれど、三年ばかりにして死したりと云ふ。深山の奇測り難し。」

次も同じく越後の事であるが、これは会津あいづやいち八一氏の話を聴いたのである。妙高山の谷には硫黄いおうの多く産する処があるが、天狗の所有なりとして近頃までも採りに行く者は無かつた。ところが先年中なかくびき頸城郡板倉いたくら村大字横町の何右衛門とかいう者、これに眼を着けて十数名の人夫を引率し、この山に入つて谷間に小屋を掛

け日中は硫黄を採取し夜はこの小屋に集まって寝た。或る夜深更に容易ならぬ物音がして小屋も倒れんばかりに震動したので、何右衛門を始め人夫一同も眼をさまし先ず寒いから火を焚たこうとしていると、戸口の方から顔は赤く白い衣物で背の高い人が入って来た。皆の者は怖しさに片隅かたすみに押しかたまり、蒲団ふとんを被かぶつて様子を伺っていると、かの者ははずかずかと板の間まに上つて来たようであつたがその後の事はわからず。夜の明けるのを待つて見れば、かの何右衛門だけは首を後うしろむ向きに捻ねじ切られてつめたくなつていたと謂う。今でもこの谷に入つて若し硫黄の一片でも拾おうとする者があれば、必ず峰の上から大声で、そこ取んなアとどなる者があると謂い、また首を捻じられるからと少しでも侵す者は無

いそうだ。またこの辺の村に往つて天狗などはこの世に無いものだとしても言おうものなら、必ずこの何右衛門の話を聞かされる。この時の人夫の一人に、近い頃まで生きていたのであつて、その老人から直接にこの話を聴いた者は幾人もあつたのである。

二九 巨人の足跡を崇敬せしこと

山人の丈たけの高いということは、古くからの話であつたと見えて、オオヒトという別名も久しく行われていた。これもオオヒトというからには、ちつとやそつとでは承知ができず、見上げるような高い樹の幹に、皮を剥はいだ痕があつたとか、五六尺もある萱原かやはら

に、腰から下だけが隠れていたとか、または山小屋を跨またいでゆさぶったとか、いろいろな珍しい話を伝えているかと思うと、一方には我々とたいいて同じくらいのも、やや頑がんじょう丈なる体格であつたといひ、六尺より低いのは見たことがないという類の、穩健なる記録もまたいくらかもあつたので、きのこか何かでもない以上は、そのような大小不揃ふぞろいの物があるわけではないから、すなわちこれも又聞またききの場合の掛値かけねであつたことを、想像しえられるのである。

或いは雨後の泥の上や雪中に印した足跡を見て、その偉大なるに驚いたとも伝えられる。なかにはあんまりえらい大股おおまたであるくの、やはり大昔から人が想像している通り、一本足で飛びま

わるのが真まらしいと考まえていた人さまえあつた。それらの観察の精確を欠まいていることは、論のない話であるが、もともと大きい故にこれを山男の足跡だろうといった人があるとすれば、すなわち迷信の原因は別にすでにあつたものと認めなければならぬ。

しかも日本は古くから、足跡崇敬の国であつた。神明ほ仏ざつ菩薩ぼ勇ざつ士高僧の多くが岩石などの上に不朽の跡を遺して、永く追慕を受けている国であつた。いわば山人思想の宗教化ということには、正しく先せん蹤しようがあつたのである。我々平民の祖先は、国土平定というごとき記念すべき大事業を、太古の巨神の功績に帰して、たのみならず、諸国の地方神に随従して神徳を宣伝したという眷けん属ぞくの小神にも、また大人の名を附与してその遺跡と口碑とを保

存し、さらにオオヒトが山にいる異種人の別名なることを知った場合でも、なお単なる畏怖の念以上のものをもって、その強力の跡を拝もうとしていたのである。

東部日本の諸県において、オオヒトといったのは山人のことであった。もちろん大きいからの大人であろうが、その大きさが驚くべく一様でなかった。見た人が次第に少なく、語る人ますます多かりし証拠である。今に至っては実状を確かめることはむづかしいが、区々の異説は及ぶ限りこれを保存しておかねばならぬ。

一 陸奥と出羽との境なる吾妻山の奥に、大人と云ふものあり。
蓋し山氣の生ずる所なり。其長一丈五六尺、木の葉を綴りて身をけだたけ

蔽ふ。物言はず笑はず。時々村の人家に入来る。村人之を敬すること神の如く、其為に酒食を設く。大人は之を食はず、悉く包みて持帰る也。村の子供時として之に戯るゝことあれども、之を怒りて害を作せしことを聞かず。神保甲作の話なり（『今齊諧』巻四）。

二 上野黒竜山不動寺は、山深く嶮岨けんそにして、堂宇どうう其間に在り。魔所と言ひ伝へて怪異甚だ多し。山の主とて山大人と云ふものあり。一年に二三度は寺の者之を見る。其坐ざするとき膝ひざの高さ三尺ばかりあり。偶々《たまたま》足跡を見るに五六尺もありて、一步に十余間を隔つと云へり（『日東本草図彙』）。

三 高田の大工だいく又兵衛と云ふ者、西山本に雇はれありしが、一夜

急用ありて一人山道を還りしに、そばみち 岨路の引廻りたる処にて凶ら
ずも大人に行逢ゆきあひたり。其そのかたち形裸身にして、長は八尺ばかり、
髪肩に垂れ。眼の光星の如く、手に兎うさぎ一つ提さげて静かに歩み来る。
大工驚きて立止れば、かの大人もまた驚けるさまにて立止りしが、
遂に物も言はず、路を横よこぎりて山に登り走りしとぞ（『北越雜記』
卷十九）。

四 飛驒の山中にオホヒトと云ふものあり。長は九尺ばかりもあ
るべし。木の葉を綴りて衣とす。物をも言ふにや之を聞きたる人
無し。或獵師山深く分け入りて獸多き処を尋ねけるが思はず此物
に逢あひたり。走り來ること飛ぶが如し。遁るべきやうなければせ
ん方かた無くせめては斯かくもせば助からんかと、飢うえの用意に持ちたる

団にぎりめし飯とりいを取出で、手に載せて差出せしに、取食ひて此上無く悦
 べる様なり。誠に深山に自ら生れ出でたる者なれば、かの洪こうこう荒
 と云ふ世の例も思ひ出でられてかゝる物食ひたるは始めての事な
 るべしと思はる。暫くありて此者狐貉きつねむぎただ夥しく殺しもて来り与へぬ。
 団飯の恩に報いる也けり。獵師勞無くして獲物多きことを悦び、
 それよりは日毎ひごとに団飯を包み行きて獸に換へ歸りたり。然るを隣
 なる獵師之を怪み、窃ひそかうかがに窺ひ置きて、深夜に彼に先だち行きて待
 つに、思はず例の者に行逢ひたり。鬼とや思ひけん弾たまこめて打ち
 たり。打たれて遁げければ獵師も歸りぬ。前の獵師此事を聞きて、
 あな不便の事やとて、猶なお山深く尋ね入り峰より下を見たるに、此
 者谷底に倒れ伏し居たるを、同じ様なる者の傍に添ひたるは介抱

するなるべし。若し近づきなば他に打たれし仇を、あだ我に怨みやせんと怖しくなりて止やみぬ。斯かくて後には死にたるなるべしと、後に此事を人に語りしを、人の伝へたりし也。深き山にはかゝる者も有りけるよとて、細井知慎ほそいともちか語り（『視聴草』みききぐさ第四集卷六所録「荻生徂徠手記」）。

巨人の足跡を見て感動した例は、決して支那の昔話だけでない。小田内通敏君が聴いてきて教えてくれた話には、秋田市檜山に住む丹生某氏、狩が好きで方々をあるき、或る年仙北郡神宮寺山の麓の村で、人の家に一泊したところ、一つの紙袋に少しの砂を入れたのが、神棚に載せてあった。主人にそのわけを尋ねると、つ

い近いころに、山の下を流れる雄物川の岸で草を茹つていると、不意に大きな物音がして、山から飛降りた者がある。よく見たら山男であつた。怖ろしいから茅かやの蔭に隠れていて、のちにその場所に行つて見れば、川原に甚だ大きな足跡があつた。あまり珍しいこと故、村の人たちを呼んできて見せると、一同は崇敬のあまり、その足跡の砂を取分けて各自の家に持もち還かえり、こうして神棚に上げておくのだと答えたそうである。

雪の上に大きな足跡を見たという話はまだ沢山ある。その二三をあげてみると、

一 遠州奥山郷おくやま白鞍山しらくらやまは、浦川の水源なり。大峰を通り凡おおよそ四里、山中人跡まれ稀なり。神人住めり。俗に山男と云ふ。雪中に其

跡を見て盛大なることを知る。其形を見る者は早く死す（『遠江国風土記伝』）。

二 駿河安倍郡腰越村の山中にて、雪の日足跡を見る。大きさ

三尺許ばかり、其間九尺ほどづゝ三里ばかり、小路に入りて続けり。又

此村の手前に小川あり。此川を一跨ひとまたぎに渡りしと覚えしは、其

川かわむこう 向二三間げんにも足跡ありしと。之を山男と謂ひ、稀には其糞ふん

を見当ることあるに鈴竹すずたけといふ竹葉を食する故糞中に竹葉あり

といふ。右の村々は大井川の川上なり。府中江川町三階屋仁右衛

門話したり（『甲子夜話』かつしやわ）。

三 小虫倉山、虫倉明神、公時きんときの母の霊を祭る。因つて阿姥明

神社とも云ふ。山姥の住めりしといふ大洞二つあり。近年下の古

洞に、山居の僧住せしより、山女之を厭いとひ去ると謂ふ。其以前は雪の中に、大なる足跡を見たり（『信濃奇勝録』卷二）。

四 文政中、高たか岡おか郡大野見郷島おおのの川の山中にて、官より香こう蕈じんを作らせたまふとき雪の中に大なる足跡を見る、其跡左のみにて一二間を隔て、又右足跡ばかりの跡ありこれは一つ足と称し、常にあるものなり。香か美み郡にもあり（『土佐海』続編）。

土佐では山人を一般に山やま爺じいと呼んでいる。一本足でおまけに眼も一つだと信じ、これにあつたという人さえあつた。紀州熊野の深山でも、一たたら、または一本踏た鞆たらなどと伝え、かつて勇士に退治せられた話がある。その他の府県でも、山に一本足の怪物がいるという説は多いが、単に雪の上の足跡から、推測しうべき

ことではもちろんなかつた。すなわち実験以前から、そういう言い伝えがすでにあつたので、誤信ながらもそれにはまた、別途の説明があつたのである。

また雪の上ではなくとも、足跡の不思議は久しい以前から、我々の祖先を驚かしていた。信州戸隠でも大雨ののち、畑などの土に二三尺の足跡のあるのをたびたび見たといい、越後の苗場山なえばやまでも雨後に山上に登れば、長さ尺余の足跡を見ることがあると、

『越後野志』えちごのし卷六に書いている。播州揖保郡黒崎いぼの荒神山に、萩原孫三郎の墓と伝うる古塚があつて、石の祠ほころうが安置してあつた。

嘉永の初年とかに、或る人この辺を拓ひらいて畑としたところが、一夜の中に踏ふみ荒あらして大きな人の足跡があつた。そうしてその家は

全家発狂してしまつたと、『西讃府志』せいざんふし卷五十一に書いている。

『仙梅日記』せんばいにっきには駿州梅ヶ島うめしま・仙ヶ俣せんまたの旅行において、一人の

案内者が山中さんに話した。雪の後に山男の足跡を見ることがある。二尺ほどの大足である。門野かどのというところの向う山には、山男が石に歩みかけた足跡がある。岩が凹へこんで足の形を印している。いかほどの強い力だろうかといったそうである。

こういう人々の心持では、巖石の上に不朽の痕跡こんせきを止めることも、大人ならば不可能でないと思つたのであろうが、親しく實際についてみると、ほとんどその全部が山男たちの関与するところではなかつた。大人足跡という口碑は、すでに奈良朝期の『常陸風土記』たちふどき大櫛岡おおくしおかの条にもある。丘壟おかの上に腰かけて大海おおうむぎの蜃

を採って食ったといい、足跡の長さ四十余歩、広さは二十余歩とある。『播磨風土記』の多可郡の条にも巨人が南海から北海に歩んだと伝えて、その踰ゆる迹あんどどころ 処あまた 数々沼を成すと記してある。そこで問題は我々の前代の信仰に別に大人と名づけた巨大の靈物があつて、誤つてその名を山人に付与したのではないかということになるが、もしそうならばこれとともに足跡に関する畏敬いけいの情までも、移して彼に与えたことになるのである。すなわち羽後の農民などが足跡の砂を大切にしたのはむしろ山人史末期の一徴候で、事蹟が不明になったためにかえつて一層これを神秘化したものでないかとも思われるのである。

現在の大人足跡は中国に最も多く、四国・紀州等はこれに次ぎ、いずれも地名となつて各国数十百を算する。しかし他の地方とても決して絶無ではなく、ことに偉大な足跡は到るところに散在しているが、その或るものは單純にこれを鬼の足跡ともいい、或いはまた大太法師とも唱えている。関東の各地でダイラボツチ、もしくはデエラ坊の話というのもこれで、多くはいわゆる足跡に伴なう伝説である。東京の近郊などにも現にいくつかあるが、全国を通じて大体にこれを二様に區別することができる。その一つは前の駿州仙ヶ俣の場合のごとく、岩石の上に跡を印したもので、不思議は主として石のごとく堅いものを踏み窪めたくぼという点であり、従つて独り山人のみにあらず古来の偉人勇士例えば弁慶・曾

我五郎という類の人々までが作者である故に、その形はさして大きくない。そうしてその石はたいいてい崇拜せられている。これに反して第二の種類にはいくらでも大きなものがあつて、従つて鬼物巨靈にのみ托せられる。東京近くでは、京王電車の代田だいたという停留所の辺には、昔大太法師が架けたという橋があり、それからわずか南東にある足跡は、足形こそしてはいるが、面積は約三町歩、内部は元杉林もとであつたが、今では文化住宅でも建っているかも知れぬ。踵かかとにあたるには地下水の露頭があり、その傍には小さな堂もあつた。それからまた東南方には二ヶ処の足跡あり、駒沢村にあるものは更に偉大であつた。いずれも泉の噴出に起因する窪地で、形状は足跡とも見られぬことはなかつた。上総の鶴つ

枝村^{るえ}で見たものは、小川を隔てて双方の岡の上にあつた。その一つはすでに崩れているが、他の一つは約一畝^{せぶ}歩、四周の樹林地の中にこれだけが土地台帳で別筆となつて、その分を開いて麦か何かが播^まいてあつた。甲州信州辺のデアラボツチャも、たいていは孤立した湿地であつたが、そうでない足跡もあるようである。何にしても附近と地形が違つて、それがほぼ足形をしておれば、大人の跡といつたのである。

大人は富士を脊負うて、いずれへか持つて行こうとしたり、または一夜に大湖を埋めようとして簣^きを以て土を運んだ。その簣の目をこぼれた一塊が、あの塚だこの山だという話はどこにでもある。つまりは古くからの大話の一形式であるが、注意すべきはこ

とごとく水土の工事に關聯し、ところによつては山を蹴開けびらき湖水を流し、耕地を作つてくれたなどと伝え、すこぶる天地剖ほうせき析の神話の面影を忍ばしむるものがある。古い言い伝えには相違ないのである。大きい行止まりは加賀国の大人の足跡、東は越中境栗くりからやまりの打越に一つ、次には河北郡木越きごしの光林寺の址あとという田の中、次には能美郡波佐谷はさだにの山の斜面、すなわちこの国を三足であるいた形である。いずれも指の跡までが分明で、下に岩でもあるものか、田の中ながらそこだけは草も生えない。それから壱岐の島の国分の初丘にあるもの、爪つまさき先北つまさきに向かつて南北に十二間、幅は六間で踵のところは二間、これを大の足跡と呼んでいる。大昔に大という人、九州から対馬へ渡ろうとして、この中間の島に

足を踏立てた。その跡であるという。少し窪んで水が出ている。こんなところは附近に多いと『壱岐名勝図誌』いきめいしやうずしには記している。

大人は九州の南部では、大人弥五郎と称し、また大人隼人はやとなどともいつている。八幡神社の眷属けんぞくのようにもいえば、また昔この大神に治伐せられた兇賊のごとくにも伝えて一定せぬが、一方には山作りや足跡の話もあれば、他の一方には祭の時に、人形に作つて曳ひきあるいつている。そうして隼人はまたこの地方では、征服せられたる先住民の総称である。隼人が上代の被征服者であるために、これを大人隼人などと呼んでいるのならば、我々の伝えんと欲する山の人も、オオヒトという別名をえた理由が別になおあつたかも知れぬ。しかし考えて行くほどかえつてだんだんにむ

つかしくなるらしいから、もうこの辺で一旦いったんは話をやめておこう。

三〇　これは日本文化史の未解決の問題なること

ここで打切ってはもちろんこの研究は不完全なものである。最初自分の企てていたことは、山近くに住む人々の宗教生活には、意外な現実の影響が強かったということ、論証してみるにあつたのだが、残念ながらそれにはまだ資料が十分でない。後代の篤学者はなお多くの隠れたるものを発掘することであろう。しかし

ただ一つほぼ断定してもよいと思うことは、中世以後の天狗思想の進化に著しく山人に関する経験が働いていたことである。単に眼が光る色が赤い、背が高いなどの外形のみではない。仏法方面の人からは天魔の扱いを受けつつも、感情があり好意悪意があつて、或いは我々に近づき或いはまた擯^{ひんせき}斥^しし、機嫌^{きげん}にも時々のもむらがあつて、気に向けば義侠的に世話をしてくれるなど、至つて平凡なる人間味の若干をまじえていることは、それが純然たる空想の所産でないことを思わしめる。

彼らはまた時として我々から、ひどくやつつけられたという話もある。天狗の神通^{じんずう}をもつてして、不覺^{ふかくせんぼん}千万のようではあるが、かの杉の皮で鼻を弾^{はじ}かれて、人間という者は心にもないこと

をするから怖ろしいといった昔話などは、少なくともかつて人間と彼らとの間に、対等の交際があつたという偶然の証拠である。欺くに方法をもつてするならば、天狗必ずしも恐るるに足らずとする考えは、我々の世渡りには大切なる教訓でありまた激励であつた。故に或いは自分だけは筍を喰い、相手には竹を切つて煮て食わせて見たとか、また白い丸石を炉の火で焼いて、餅を食ひにきた山人に食わせたら、大いに苦しんで遁げ去つたとかいうがごとき詐謀をもつてこれを征服した物語が、諸国に数多く伝わっているのです、しかもその古伝の骨子をなす点が、主として火の美感であり、穀物の味であり、いずれも山人と名づくるこの島国の原住民の、ほとんど永遠に奪い去られた幸福であつたことを考える

と、山の人生の古来の不安、すなわち時あつて発現する彼らの憤ふん怒ぬ、ないしは粗暴をきわめた侵しんりやく掠やくと誘惑の畏れなども、幾分か自然に近く解釈しえられるかと思われ、これと相関聯する土地神の信仰に、顕著な特色の認められるのも、畢ひつきよう竟きようはこの民族の歴史が、これを促したということになるのである。

最後になお一つ話が残っている。数多ある村里の住民の中で、特別に山の人と懇意にしていたという者が処々にあつた。その問題だけは述べておかねばならぬ。天狗の方にも名山靈れいさつ刹さつの彼らを仏法の守護者と頼んだもの以外に、尋常民家の人であつて、やはり時としてかの珍客の訪問を受けたという例は相応にあつた。

その中でもことに有名なのは、加賀の松^{まつとう}任^{にん}の餅屋^{もちや}であつたが、たしか越中の高岡にも半分以上似た話があり、その他あの地方には少なくとも世間の噂で、天狗の恩顧を説かるる家は多かつたのである。今ではほとんど広告の用にも立たぬか知らぬが、当初は決してうかうかとした笑話でなかつた。訪問のあるという日は前兆^{しやう}があり、またはあらかじめ定まつていて、一家^{かゝい}戒^{しん}慎^{しん}して室を浄^{きよ}め、^{みだ}叨^{たう}りに人を近づけず、しかも出入坐臥^{ざが}飲食^{おんじ}ともに、音もなく目にも触れなかつたことは、他の多くの尊い神々も同じであつた。災害を予報し、作法方式を示し、時あつて憂^{うれ}や迷^{まい}を抱^{かか}く者が、この主人を介して神教を求めんとしたことも、想像にかたくないのであつた。すなわちただ一步を進むれば、建久八年の橘兼仲の

ごとく、専門の行者となつて一代を風靡ふうびし、もしくは近世の野州古峰原こぶがはらのように一派の信仰の中心となるべき境まできていたので、しかもその大切なる顕冥けんめい両界の連鎖をなしたものが、単に由緒久しき名物の餠餅あんもちであつたことを知るに至つては、心こころひ窃そかに在来の宗教起原論の研究者が、いたずらに天外の五里霧中に辛苦していたことを、感ぜざる者は少なくないであろう。

始めて人間が神を人のごとく想像しえた時代には、食物は今よりも遙かに大なる人生の部分の部分を占めていた。餅ほどうまい物は世の中にはないと考えた凡俗は、これを清く製して献上することによつて、神御満足の御面おんおもざしを、空に描くことをえたらうと思つううえに、更にその推測を確かめるにたるだけの実験が、時あつ

て日常生活の上にも行われたのである。我々の畏敬してやまなかつた山の人も、米を好みことに餅の香を愛したのであつた。特別な交際が餅をもつて始まつたという話は、もちろん話であろうが今に方々に伝わっている。これを下品だとして顧みないような学者は、いつまでも高たかまがはら天原だけを説いているがよい。自分たちは今ある下界の平民の信仰が、いかに発達してこうまで完成したかを考えてみようとするのである。前に話した馬に七駄のマダの皮で、草履を作っていたという陸中浄法寺の村で、或る農夫は山に行つて山男に逢つた。昼弁当の餅を珍しがるから分けてやると、非常に喜んでこれを食べた。お前の家ではもう田を打つたか、いやまだ打たぬというとそんだったら打つてやるから何月何日の晩に、

三本鍬くわと一緒に餅を三升ほど搗ついて田の畔あぜに置けという。約のごとくにして翌日往つて見ると、餅はなくなり田はよく打つてあつたが、大小の田の境もなく一面に打ちのめしてあつた。それからも友だちになつて、山に行くたびに餅をはたられて困つた。その山男がまた彼に向かつて、おれは誠によい人間だが、かかアは悪いやつだから見られないように用心せよとたびたび言つて聴かせたという話もあつて、六七十年前の出来事のように考えられている（『郷土研究』一ノ九、佐々木君、次も同じ）。この地方の昔話の「山はは」は實際怖ろしい。鬼婆・天あまのじやくのした仕事が、ここでは皆山ははの所業になつている。

また閉伊郡へいの六角牛山ろっこうしでは、青笹村の某が山に入つてマダの

樹の皮を剥いでいると、じつと立って見ていた七尺余りの男があった。おれもすけてやるべとさながら麻を剥ぐようにたちまちにしてみようたくさんになった。それから傍の火にあぶっておいた餅を指ざし、くれというから承知をすると、無遠慮にみな食つてしまった。来年の今ごろもまた来るかと聞く故に、後難を恐れても来ないと答えると、そんだったら三升の餅をいついつの晩に、お前の家の庭へ出しておいてくれ、一年中のマダの皮を持って往つてやるからというので、これもその通りにして見ると翌年は約束の日の夜中に、庭でどしんと大荷物をおく音がした。およそ馬に二駄ほどのマダの皮であったという。それから以後は毎年同じ日に、この家の庭上でいわゆる無言貿易は行われたのだが、今の主人の

若年のころから、どうしたものが餅は供えておいても、マダの皮は持つて来ぬようになったといつてゐる。

『津軽旧事談』に

『弘藩明治一統志』

その他を引いて、岩木山

の大人と親善だったと記しているのは、麓の鬼沢村の弥十郎という農夫であつた。これはのちに自分もまた、大人となつて行方を知らずとも伝えられる。彼は最初薪まきを採りに入つて偶然と懇意になり、角力すもうなどを取つて日を暮し、素手すてで帰つてくると必ず一夜の中に、二三日分ほどの薪が家の背戸せどに積んであつた。或いはまた大人が弥十郎を助け、新たにこの土地を開発したのだともいい、また赤倉の谷から水を導いて村の耕地に灌漑かんがいしたのも、同じ大人の力であつたと称して、その驚くべき難土木の跡について、逆さか

さ水の伝説を語っている。村の名の鬼沢と産土うぶすなの社の名の鬼ノ宮とは果して今の口碑の結果であるか、はた原因であるかを決しかねるが後々までも村に怪力の人が輩出したといい、或いはまた大人が鎮守ちんじゆを約諾して、そのかわりには五月の節供せつくに菖蒲しょうぶを葺ふかず、節分に豆をまくなかれと言つたとあつて、永く正直にこの二種の物を用いなかつたのは少なくとも近代の雑説ではなかつた証拠である。大人が弥十郎の妻に姿を見られたのを理由にして、再び来なくなつたというのにも何か仔細しさいがありそうだ。その折記念に遺して去つた蓑笠みのかさは鬼ノ宮に、鍬は藤田という家に伝わつているそうだが、藤田は多分弥十郎の末ですなわち草分けの家であつたらう。南部の方でも三戸さんへの郡の荒沢不動に、山男の使つた

きうす
木臼が伝わっていることを『ぬかのぶごぐんし糠部五郡小史』には録している。これでとちのみ橡実を搗ついて食つていたという話は疑わしくとも、昔かつて彼らと交際のあつたことを信じていたことだけは推察せられる。

津軽の山人は角力を取つたというのみで餅をどうしたという話は残つてないが、秋田の方へ越えてみると、この二つの事件も結びついている。これも小田内通敏氏の談であるが、ごじようのめ五城目近在の木樵でかねて田舎相撲の心得ある某、或る日山で働いて木を負うて立とうとすると不意に山男が出てきて相撲を取ろうと言うて留めた。そこで荷を再び下に卸して力を角かくし一番はまず彼を投げたら強いと褒ほめてくれた。二番目にはわざと勝を譲つて還ろうと

したが、山男は少し待ってくれと言って、更に二三人の仲間を連れてきて取らせたので、いずれも一番は勝ち一番は負けて別れてきた。それが縁になってその後もおりおり出会ううちに、或る時いつ幾日にはその方の家へ遊びに行く。家の者を外へやり、餅を搗いて待っていていよというのでその通りにして一斗ほどの餅を振舞うと、数人の山男が悦んで終日遊んで帰った。それはよかつたが、その後もおりおりやってきて、酒を飲ませるの何のと言うために、ついにはその煩しさに堪えず、これを気に病んで久しく寝ているようなことになった。村の人たちはこれを見て、山男などと附つきあ合あをするのは、いずれ身のためには好よくないことだと話し合っていたそうであるが、もしこの樵夫にせめて松任の餅屋ほどの気き

ばたら

働きがあつたら、神経衰弱などにはならずすみそなものであつた。しかも因縁ばかり永く続いて人に信心のやや薄れた場合に、尋常一様の手段では元奉仕した神と別れることが難かつたといふことは、しばしば巫術ふじゆつの家について言い伝えられた話であつた。餅が化して白い小石になつたといふことと、石を火に焼いて怪物を攻めたといふこととは、ともに古くからある物語には相異なるが、山人の場合には二つの話が合体して、あまり毎晩餅ばかり食いにくるので、のちには閉口して白い丸石を囲炉裏いろりに焼き知らぬ顔をして食わせて見ると、火焰かえんを吹いて飛びだして去つたとか、またはその崇りたで大水が出たのが年代記にあるところの白しらひげみずらひげみず髭水だなどと、いずれも皆一旦の好意とその後の不本意な、絶

縁とを伝説する地方が多いのは、或いは何かこの方面の信仰の次々の変化を暗示するものではないかと思う。

角力によつて山男と近づきになつたというのもまた偶然ではなかつたようである。今日中央部以西の日本において、やたらに人と相撲を取りたがるのは、川童かつばと話がきまつている。土佐ではシバテンといつて芝天狗しばてんぐの略称かとも考えるが、挙動はほとんど川童と同じである。見たところ小児のごとくいかにも非力であるが、勝つと何遍でも今一番というので、うるさくてしかたがない。わざと負けてやるとキキと嬉しそうに鳴いて、また仲間をうんと喚よんでくる。何にしても厄やっかい介な相手で、彼らに挑まれた為よに夜どおし角力を取り、後には氣狂のようになつたという話が九州な

どのには多い。それでいて必ずしも狐狸こりのごとく騙だますつもりではな
 いらしいのである。川童にせよ何にせよ、どうしてまたこんな趣
 意不明なる交渉が始まったというか。それには角力そのものの歴
 史を、今少しく遡さかのぼつて考える必要があるようである。朝廷の相すもう
 撲めしあわせ召合めしあわせは七月を例とし、古い年中行事の一つではあつたが、
 いわゆる唐制の模倣でもなければ、また皇室専属の儀式でもなか
 ったらしい。おそらくは中央文化の或る段階において、民間の風
 習を採用して国技とせられたらしいことは、力士の諸国から貢進
 せられたのを見てもわかる。すなわちいわゆる田舎相撲の方が起
 原においては一つ前である。佐渡では今も村々を代表する選手が
 あり名乗なりのりを世襲し、会津の新宮権現でも、祭の日には村々の名を

帯びた力士が出て、勝った村ではその年は仕合せ好しと信ぜられたこと、歩射馬駆けなども同じであった。すなわち祈願祈禱を専らとし怪力を神授と考え、部落互いに技を競うほかに、常に運勢の強弱とも言うべきものを認めていたのは、背後に大いに頼むところの氏神、里の神の御威光があつたためで、しかも彼らは信心の未熟によつてこれを傷けんことを畏れていたのである。時代がようやく進んで全民族の宗教はいよいよ統一し、小区域の敵愾心などは意味もないものになつたが、それでも古い名残は今だつて少しは認められる。いわんや土地ごとに守り神を別にし、家門にはそれぞれの信仰があつた際である。豊後の日田の鬼太夫の系図が、連綿として数百年に及ぶがごとく力の筋を神の筋に歸し、

これをもつて郷党の信望を繋ぎまたは集注せしめた者が、すなわち神人であつたものかと思われる。山男に名ざされ、また川童に角力を挑いどまれるということは、言いかえればその者が不思議を感じやすく、神秘の前に無我になりやすい性質を具えていたことを意味し、一方には鞍馬くらまの奥僧おくそうしやうたに正谷の貴公子のように、試煉をへてその天分の怪力を發揮しうるのみならず、他の一方には目に見えぬ世界の紹介者として、また大いに神靈の道を社会に行うことをえたはずであつたが、不幸にして国はずでに事大主義、宣伝万能の世となつていたために、割拠したる小盆地の神々は単なる妖怪をもつて遇せられ、いまだ十分にその感化を實現せぬ前に有力なる外来の信仰に面してことごとくその光を失い、神が力を試

みるというせつかくの旧方式も、結局無意味な擾乱じょうらんに過ぎぬことになつたのである。

自分の見るところをもつてすれば、日本現在の村々の信仰には、根原に新旧の二系統があつた。朝家の法制にもかつて天神地祇ちぎを分たれたが、のちの宗像むなかた・賀茂かも・八幡・熊野・春日かすが・住吉すみよし・諏訪すわ・白山はくさん・鹿島かしま・香取かとりのごとく、有効なる組織をもつて神人を諸国に派し、次々に新たなる若宮わかみや今宮を増設して行つたもののほかに、別に土着年久しく住民心をともしして固く旧来の信仰を保持しているものがあつた。荘園の創立は以前の郷里生活を一變し、領主はおおむね都人士の血と趣味とを嗣ついでいたために、仏教の側援そくえんある中央の大社を勸請かんじようする方に傾いていたらしく、

次第に今まであるものを改造して、例えば式しきない内の古社がほとんどその名を喪失したように、力つとめてこの統一の勢力に迎合したらしいが、これと同時に農民の保守趣味から、新たな社の祭式信仰をも自分の兼かねて持つものに引きつけた場合が少なくはなかつたらしい。また右の二つの系統が時としては二つの層をなし、必ずしも一郷の八幡宮、一村全体の熊野社の威望を傷けることなくして、屋敷や一つの垣内かいとだけで、なお古くからの土地の神に、精誠せいせいをいたしていた場合も多かつた。頭屋とうやの慣習と鍵取かぎとりの制度、社家相続の方法等の中を尋ねると今とてもこの差別の微妙なる影響を見出すこと困難ならず、ことに永年にわたつて必ずしも官府の公認するところとならずとも、家から家へまたは母から娘へ、静か

に流れていた信仰には、別に中断せられた証跡もない以上は、古いものが多く伝わりと見てよろしい。それというのが信仰の基礎は生活の自然の要求にあつて、強いて日月星辰というがごとき莊麗にして物遠いところには心を寄せず四季朝夕の尋常の幸福を求め、最も平凡なる不安を避けようとしていた結果、夙に祭を申し謹み仕えたのは、主としては山の神荒野の神、または海川の神を出でなかつたのである。導く人のやはり我仲間であつたことは、或いは時代に相応せぬ鄙ひなぶりを匡ただしえない結果になつたか知らぬが、そのかわりにはなつかしい我々の大昔が、たいして小賢こやかしい者の干渉を受けずに、ほぼうぶな形をもつて今日までも続いてきた。例えば稚わかくして山に紛まぎれ入つた姉弟が、そのころの紋もん様ようあ

る四^よつ身^みの衣を着て、ふと親の家に還ってきたようなものである。これを笑うがごとき心なき人々は、少なくとも自分たちの同志者の中にはいない。

山人考 大正六年日本歴史地理学会大会講演手稿

一

私が八九年以前から、内々山人の問題を考えているということ
を、喜田^{きだ}博士が偶然に発見せられ、かかる晴れがましき会に出て、
それを話しせよと仰^{おお}せられる。一体これは物ずきに近い事業であ
って、もとより大正六年やそこいらに、成績を発表する所存をも

つて、取掛かったものではありませぬ故に、一時は甚だ当惑しかつ躡ちゆうちよ躡ちよをしました。しかし考えてみれば、これは同時に自分のごとき方法をもつて進んで、果して結局の解決をうるに足るや否やを、諸先生から批評していただくのに、最も好よい機会でもあるので、なまじいに罷まかり出でたる次第でございます。

二

現在の我々日本国民が、数多の種族の混成だということとは、じつはまだ完全には立証せられたわけでもないようでありますが、私の研究はそれをすでに動かぬ通説となつたものとして、すなわ

ちこれを発足点といたします。

わが^{おおみかど}大御門の御祖先が、始めてこの島へ御到着なされた時には、国内にはすでに幾多の先住民がいたと伝えられます。古代の記録においては、これらを名づけて^{くに}国つ神と申しておるのであります。その例は『日本書紀』の「神代卷」出雲の条に、「^{やつかれこ}吾は是れ国つ神、^{あしなずち}号は脚摩乳、^{わがつまのな}我妻号は^{てなずち}手摩乳云々」。また「^{たかみ}高皇産靈神は^{おおものぬしのかみ}大物主神に向ひ、^{いましも}汝若し国つ神を以て^も妻とせば、^{われ}吾は^{なほ}猶^{うと}汝疎^あき心有りとおもはん」と仰せられた。「神武紀」にはまた「^{やつかれこ}臣は是れ国つ神、名を^{うずひこ}珍彦と曰ふ」とあり、また同紀吉野の条には、「臣は是れ国つ神名を^{いひか}井光と^な為す」とあります。『古事記』の方では御迎いに出た^{さるたひこ}猿田彦をも、また国つ神と記

しております。

りようじんぎりよう

令の神祇令には天神地祇という名を存し、地祇は『倭名わみょうしよ

鈔』のころまで、クニツカミまたはクニツヤシロと訓よみますが、

この二つは等しく神祇官において、常典によつてこれを祭ること
 になつていまして、奈良朝になりますと、新旧二種族の精神生活
 は、もはや名残なく融合したものと認められます。『延喜式』えんぎしき
 の神名帳には、くにたまこおりたま国魂郡魂という類の、神名から明らかに国神
 に属すと知らるる神々を多く包容しておりながら、天神地祇の区
 別すらも、すでに存置してはいなかつたのであります。

しかも同じ『延喜式』の、なかとみ中臣のはらえことば祓詞を見ますると、な

お天津罪あまつつみと国津罪との區別を認めているのです。国津罪とはしからば何を意味するか。『古語拾遺こごしゆうい』には国津罪は国中人民犯すところの罪とのみ申してあるが、それではこれに対する天津罪は、誰の犯すところなるかが不明となります。右二通りの犯罪を比較してみると、一方は串刺くしやせし・重播しきまき・畔放あはなちというごとく、主として土地占有権の侵害であるに反して、他の一方は父と子犯すとい、獣犯すというような無茶なもので明白に犯罪の性質に文野の差あることが認められ、すなわち後者は原住民、国つ神の犯すところであることが解わかります。『日本紀』景行天皇四十年みことりのの詔に、
 「東夷ひがしのひなの中蝦夷うちえみしもつとこわ尤も強し。男女まじ交おり居かぞこわかり父子別かぞこわかち無し云々」
 ともあります。いずれの時代にこの大祓の詞というものはできた

か。とにかくにかかる後の世まで口伝えに残っていたのは、興味
 多き事実であります。

同じ祝詞のりとの中には、また次のような語も見えます。曰く、「国
 中に荒振神あらぶるかみたち等を、神問かみとはしに問はしたまひ神掃かみはらひに掃ひたま
 ひて云々」。アラブルカミタチはまた暴神とも荒神とも書してあ
 り、『古語拾遺』などには不順鬼神ともあります。これは多分右
 申す国つ神の中、ことに強硬に反抗せし部分を、古くからそうい
 っていたものと自分は考えます。

前九年・後三年の時代に至って、ようやく完結を告げたところの東征西伐は、要するに国つ神同化の事業を意味していたと思う。東夷に比べると西国の先住民の方が、問題が小さかったように見えませんが、豊後・肥前・日向等の『風土記』に、土蜘蛛退治の記事の多いことは、常陸・陸奥等に譲りませず、更に『続日本紀』の文武天皇二年の条には太宰府に勅して豊後の大野、肥後の鞠智、肥前の基肆の三城を修繕せしめられた記事があります。これらもとより海※の御備えでないことは、地形を一見なされたらすぐに分かります。土蜘蛛にはまた近畿地方に住した者もありました。『撰津風土記』の残篇にも記事があり、大和にはもとより国樺がおりました。国樺と土蜘蛛とは同じもののように、『常陸風土記』

には記してあります。

北東日本の開拓史をみますると、時代とともに次々に北に向つて経営の歩を進め。しかも夷民の末と認むべき者が、今なお南部津軽の両半島の端の方だけに残っているために、通例世人の考えでは、すべての先住民は圧迫を受けて、北へ北へと引上げたように見えますが、これは単純にそんな心持がするといふのみで、学問上証明を遂げたものではないのです。少なくとも京畿以西に居住した異人等は、今ではただ漠然と、絶滅したようにみなされているがこれももとよりなんらの根拠なき推測であります。

種族の絶滅ということとは、血の混濁こんこうないしは口碑の忘却というような意味でならば、これを想像することができるといふが、実際に

殺され尽しました死に絶えたということは「景行天皇紀」にいわゆる撃てばすなわち草に隠れ追えばすなわち山に入るといふごとき状態にある人民には、とうていこれを想像することができないのです。『播磨風土記』を見ると、かみさき神前郡大川内、同じく湯川の二処に、異俗人三十許みそたりばかり口ありとあつて、地名辞書にはこれも今日の寺前・長谷二村の辺に考定しています。すなわち汽車が姫路に近づこうとして渡るところの、今日市川と称する川の上流であつて、じつはかく申す私などもその至つて近くの村に生れました。和銅・養老の交まで、この通り風俗を異にする人民が、その辺にはいたのであります。

右にいう異俗人は、果していかなる種類に属するかは不明であ

るが、『新撰姓氏録』しんせんしやうじろく卷の五、右京皇別佐伯直さへきのあたひの条を見ると、「此家の祖先とする御諸別命みもろわけのみこと、成務天皇の御宇ぎように播磨の此地方に於て、川上より菜の葉の流れ下るを見て民住むと知り、求め出し之を領して部民と為す云々」とあつて、或いはその御世から引続いて、同じ者の末であつたかも知れませぬ。

この佐伯部は、自ら蝦夷の俘ふの神宮に献ぜられ、のちに播磨・安芸・伊予・讃岐および阿波の五国に配置せられた者の子孫なりと称したということ、すなわち「景行天皇紀」五十一年の記事とは符合しますが、これと『姓氏録』と二つの記録は、ともに佐伯氏の録進に拠られたものと見えますから、この一致をもつて強い証拠とするのは当りませぬ。おそらくは『釈日本紀』しやくにほんぎに引用

する曆録れきろくの、佐祈毘（叫び）が佐伯と訛なまつたという言い伝えとともに、一箇の古い説明伝説と見るべきものでありましょう。

サヘキの名称は、多分は障しょうがい碍がいという意味で、日本語だろうと思います。佐伯の住したのは、もちろん上に掲げた五箇国には止りませぬが、果して彼らの言の通り、蝦夷と種を同じくするかとどま否かは、これらの書物以外の材料を集めてのちに、平静に論証する必要があるのであります。

四

国郡の境を定めたもうといふことは、古くは成務天皇の条、ま

た允恭天皇の御時おんときにもありました。これもまた『姓氏録』に阪さ合か部あ朝い臣べ、仰おほせを受けて境を定めたともあります。阪合は境のことで、阪戸さかと・阪手さかて・阪梨さかなし（阪足）などとともに、中古以前からの郷の名・里の名にありますが、今日の境の村と村との堺さかいを劃かくするに反して、昔は山地と平野との境、すなわち国つ神の領土と、天あまつ神の領土との、境を定めることを意味したかと思えます。高野山の弘法大師などが、獵人の手から靈山の地を乞こい受けたなどという昔話は、恐らくはこの事情を反映するものであらうと考えます。古い伽藍がらんの地主じぬしがみ神が、獵人の形で案内をせられ、また留とどまって守護したもうという縁起えんぎは、高野だけでは決してないのであります。

「天武天皇紀」の吉野行幸の条に、かりびと者二十余人云々、または

者之首などであるのは、くず国櫨のことでありましょう。国櫨は

「応神紀」に、そのひととなはなはだ其為人甚淳朴也などもありまして、佐伯と

は本来同じ種族でないように思われます。『ほくざんしよう北山抄』『ごうし江

次第』だいの時代を経て、それよりもまた遙か後代まで名目を存し

ていた、新春朝廷のくず国栖の奏は、最初には実際この者が山を出で

て来り仕え、みあえ御贄を献じたのに始まるのであります。『延喜式』

のくないしき宮内式には、もろもろせちえ諸の節会の時、国栖十二人笛工五人、合せて十

七人を定としたとあります。古注には笛工の中の二人のみが、山

城つづき綴喜郡にありとあります故に、他の十五人は年々現実に、もと

は吉野の奥から召されたものでありましょう。『延喜式』のころ

までは如何かと思ひますが、現に神龜三年には、召出されたという記録が残っているのであります。

また平野神社の四座御祭、園そのがみ神三座などに、出でて仕えた山人という者も、元は同じく大和の国栖であつたろうと思ひます。

山人が庭火の役を勤めたことは、『江次第』にも見えている。祭の折に賢木さかきを執とつて神人に渡す役を、元は山人が仕え申したといふことは、もつとも注意を要する点かと心得ます。

ワキモコガアナシノ山ノ山人ト人モ見ルカニ山カツラセヨ
これは後代の神樂歌かぐらうたで、衛士えじが昔の山人の役を勤めるように

なつてから、用いられたものと思ひます。ワキモコガはマキムク
ノの訛なまり、纏まきむく向のあなし穴あなし師そは三輪その東ばだに峙たつ高山で、大和北部の平

野に近く、多分は朝家の思おぼしめし召もとづに基いて、この山にも一時国樞人の住んでいたのは、御式典に出仕する便宜のためかと察しられます。

しからば何が故に右のごとき嚴重の御祭に、山人ごときが出て仕えることであつたか。これはむつかしい問題で、同時にまた山人史の研究の、重要な鍵かぎでもあるように自分のみは感じている。山人の参列はただの朝廷の体裁装飾でなく、或いは山から神霊を御降し申すために、欠くべからざる方式ではなかつたか。神楽歌の穴師の山は、もちろんのちに普通の人を代用してから、山かずらをさせて山人と見ようという点に、新たな興味を生じたものですが、『古今集』にはまた大歌所おおうたどころの執り物ものの歌としてあつて、

山人の手に持つさかき榊の枝に、何か信仰上の意味がありそうに見えるのであります。

五

山人という語は、この通り起原の年久しいものであります。自分の推測としては、上古史上のくにつかみ国津神が末二つに分れ、大半は里に下つて常民に混同し、残りは山に入りまたは山に留まつて、山人と呼ばれたと見るのですが、後世に至つては次第にこの名称を、用いる者がなくなつて、かえつて仙という字をヤマビトとよ訓ませているのであります。

自分が近世いうところの山男山女・山童山姫・山丈山姥などを総括して、かりに山人と申しておるのは必ずしも無理な断定からではありませぬ。単に便宜上この古語を復活して使つて見たまでであります。昔の山人の中で、威力に強いられ乃至は下され物ないしくだを慕うて、遙に京へ出てきた者は、もちろん少数であつたでしょう。しからばその残りの旧弊な多数は、ゆくゆくいかに成り行ゆいたであらうか。これからがじつは私一人の、考えて見ようとした問題でありました。

自分はまず第一に、中世の鬼の話に注意をしてみました。オニは鬼の漢字を充あてたのはずいぶん古いことであります。その結果支那から入った陰陽道おんようどうの思想がこれと合体して、『今昔物語』

の中の多くの鬼などは、人の形を具そなえたり具えなかつたり、孤立
 独往して種々の奇きつ怪かいを演じ、時としては板戸に化けたり、油あぶら
 壺つぼになつたりして人を害するを本業としたかの観がありますが、
 終始この鬼とは併行して、別に一派の山中の鬼があつて、往々に
 して勇将猛士に退治せられております。齊明天皇の七年八月に、
 筑前朝倉山の崖がけの上に踞うずくまつて、大きな笠を着てあご顛こを手で支えて、
 天子の御葬儀を俯瞰ふかんしていたという鬼などは、この系統の鬼の中
 の最も古い一つである。酒顛しゆてん童子どうじにせよ、鈴鹿山すずかやまの鬼にせよ、
 悪路王・大竹丸・赤頭にせよいずれも武力の討伐を必要としてお
 ります。その他吉備津の塵輪じんりんも三穗さんぼ太郎も、鬼とはいいいながら
 じつは人間の最も獐どうもう猛もうなるものに近く、護符や修験しゆげん者じゃの呪じゆも

文だけでは、煙のごとく消えてしまいそうにもない鬼でありました。

また鬼という者がことごとく、人を食い殺すを常習とするような凶悪な者のみならば、決して発生しなかつたろうと思う言い伝えは、自ら鬼の子孫と称する者の、諸国に居住したことである。

その一例は九州の日田附近にいた大蔵氏、系図を見ると代々鬼太夫などと名乗り、しばしば公おおやけの相撲の最手ほてに召されました。この家は帰化人の末と申しています。次には京都に近い八瀬の里の住民、俗にゲラなどと呼ばれた人々です。このことについては前に小さな論文を公表しておきました。二三の顕著なる異俗があつて、誇りとして近年までこれを保持していました。黒川道祐などはこ

れを山鬼の末と書いています。山鬼は地方によつて山爺のことを
 そうもい眼一つ足一つだなどといった者もあります。一方では
 また山鬼護法と連称して、靈山の守護に任ずる活神いきがみのごとくに
 も信じました。安芸の宮島の山鬼は、おおよそ我々のよくいう天
 狗と、する事が似ていました。秋田太平山の三吉権現も、また奥
 山の半僧坊はんそうぼうや秋葉山の三尺坊の類で、地方に多くの敬信者を持
 っているが、やはりまた山鬼という語の音から出た名だろうとい
 う説があります。

それよりも今一段と顕著なる实例は、大和吉野の大峯山下の五
 鬼きであります。洞川どろかわという谷底の村に、今では五鬼何という苗
 字ようじの家が五軒あり、いわゆる山上参りの先達せんだつしよく職を世襲し聖し

ようごいん
 護院の法親王御登山の案内役をもつて、一代の眉目びめくとしており
 ました。吉野の下市の町近くには、善鬼垣内ぜんきかいとという地名もあつて、
 この地に限らず五鬼の出張が方々にありました。諸国の山伏やまぶしの
 家の口碑には、五流併立を説くことがほとんど普通になつていま
 す。すなわち五鬼は五人の山伏の家であろうと思うにかかわらず、
 前鬼ぜんきごき後鬼とも書いて役えんの行ぎよう者じやの二人の侍者じしやの子孫といい、従
 つてまた御善鬼様などと称して、これを崇敬した地方もありまし
 た。

善鬼は五鬼の始祖のことで、五鬼のほか別に団体があつたわ
 けではないらしく、古くは今の五鬼の家を前鬼ぜんきというのが普通で
 ありました。その前鬼が下界と交際を始めたのは、戦国のころか

らだと申します。その時代までは彼らにも通力があつたのを、浮世の少女と縁組をしたばかりに、のちにはただの人間になつたという者もありますが、実際にはごく近代になるまで、一夜の中に二十里三十里の山を往復したり、くれると言つたらひとつはた一畠なすの茄子をみな持つて行つたり、なお普通人を威服するに十分なる、力を持つ者のごとく評判せられておりました。

とにかくに彼らが平地の村から、移住した者の末ではないことは、自他ともに認めているのです。これと大昔の山人との関係は不明ながら、山の信仰には深い根を持っています。そこでこの意味において、今一応考えてみる必要があると思うのは、相州箱根・三州鳳来寺、近江の伊吹山・上州の榛名山、出羽の羽黒・紀州

の熊野、さては加賀の白山等に伝わる開山の仙人の事蹟であります。白山の泰澄たいちようだいし大師などは、奈良の仏法とは系統が別である。それで、近ごろ前田慧雲師はこれを南洋系の仏教と申されましたが、自分はいまだその根拠のいずれにあるかを知らぬのであります。とにかくに今ある山伏道も、溯さかのつて聖宝僧正以前になりますと、教義も作法もともに甚だしく不明になり、ことに始祖という役えんのおづの小角に至つては、これを仏教の教徒と認めることすら決して容易ではないのです。仙術すなわち山人の道と名づくるものが、別に存在していたという推測も、なお同様に成立つだけの余地があるのであります。

六

土佐では寛永の十九年に、高知の城内に異人が出現したのを、これ山みことという者だといって、山中に送り還した話があります。ミコは神に仕える女性もしくは童子どうじの名で、山人をそう呼んだこととの当否は別として、少なくとも当時なおこの地方には、彼らと山神とのなんらかの関係を、認めていた者のあつたという証拠にはなりません。山の神の信仰も維新以後の神祇じんぎ官系統の学説に基づき、名目と解釈の上に大なる変化を受けたことは、あたかも陰陽道が入ってオニが漢土の鬼になったのと似ております。今日では山神社の祭神は、おおよまつみのみこと大山祇命かその御娘のこのはなさくやひめ木花開耶姫と、

報告せられておらぬものがないというありさまですが、これを各地の実際の信仰に照してみると、なんとしてもそれを古来の言い伝えとはみられぬのであります。

村に住む者が山神を祀り始めた動機は、近世には鉾山の繁栄を願うもの、或いはまた狩猟のためというのもありますが、大多数は採樵さいしやうと開墾の障碍なきを禱いのるもので、すなわち山の神に木を乞う祭、地を乞う祭を行うのが、これらの社の最初の目的でありました。そうしてその祭を怠った制裁は何かというと、怪我けがをしたり発狂したり死んだり、かなり怖ろしい神罰があります。東北地方には往々にして路の畔ほとりに、山神と刻んだ大きな石塔が立っている。建立の年月日人の名なども彫ってありますが、如何して

立てたかと聴くと、必ずその場処に何か不思議があつて、臨時の祭をした記念なること、あたかも馬が急死するとその場処において供養を営み、馬頭ばとうかんのん観音もしくは庚申こうしんとう塔などを立てるのと同じく、しかも何の不思議かと問えば、たいていは山の神に不意に行逢うた、怖ろしいので気絶をしたという類で、その姿はまぼろしにもせよ、常に裸の背の高い、色の赭あかい眼の光の鋭い、ほぼ我々が想像する山人に近く、また一方ではこれを山男ともいつているのであります。

天狗てんぐを山人と称したことは、近世二三の書物に見えます。或は山人を天狗と思つたという方が正しいのかも知れぬ。天狗の鼻を必ず高く、手には必ず羽扇を持たせることにしたのは、近世のし

かも画道の約束みたようなもので、『太平記』以前のいろいろの物語には、ずいぶん盛んにこれを説いてありますが、さほど鼻のことを注意しませぬ。仏法の解説ではこれを魔障とし善悪二元の対立を認めたと古宗教の面影を伝えているにもかかわらず、一方には天狗の容貌服装のみならず、その習性感情から行動の末までが、仏法の一派と認めている修験・山伏しゅげん やまぶしとよく類似し、後者もまたこれを承認して、時としてはその道の祖師であり守護神でもあるかのごとく、崇敬しかつ依頼する風であったことは、何か隠れたる仔細しさいのあることでなければなりません。恐らくは近世全く変化してしまった山の神の信仰に、元は山人も山伏も、ともに或る程度までは参与していたのを、平地の宗教がだんだんにこれを

無視しまたは忘却して行つたものと思つております。

今となつてはわずかに残る民間下層のいわゆる迷信によつて、切れ切れの事実の中から昔の実情を尋ねて見るのほかはないのであります。一つの例をあげてみますれば、山中には往々魔所と名づくる場処があります。京都近くにもいくつかありました。入つて行くといろいろの奇怪があるように伝えられ、従つて天狗の住家^{みか}か、集会所のごとく人が考えました。その奇怪というのは何かというと、第一には天狗^{てんぐつぶて}礫、どこからともなく石が飛んでくる。ただし通例は中^{あた}つて人を傷^{きず}けることがない。第二には天狗倒し、非常な大木をゴツシンゴツシンと挽^ひき斫^きる音が聴え、ほどなくえらい響を立てて地に倒れる。しかも後にその方角に行つて見ても、

一本も新たに伐きった株などはなく、もちろん倒れた木などもない。第三には天狗笑い、人数ならば十人十五人が一度に大笑いをする声が、不意に閑寂の林の中から聴える。害意はなくとも人の胆きもを寒くする力は、かえって前二者よりも強かった。その他にやや遠くから実験したものには笛太鼓ふえたいこの囃はやしの音があり、また喬きようぼく木の梢こずえの燈の影などもあつて、じつはその作者を天狗とする根拠は確實でないのですが、天狗でなければ誰がするかという年来の速断と、天狗ならばしかねないという遺伝的類推法をもつて、別に有力なる反対者もなしに、のちにはこうして名称にさえなつたのであります。

しかも必ずしも魔所といわず、また有名な老木などのない地に

も、やはり同様の奇怪はおりおりあつて、或る者は天狗以外の力としてこれを説明しようとなりました。例えば不思議の石打ちは、久しく江戸の市中にさえこれを伝え、市外池袋の村民を雇入れると、氏神が惜んでこの変を示すなどともいいました。また伐木きりきぼ坊うという怪物が山中に住み、毎々大木を伐倒す音をさせて、人を驚かすという地方もあり、狸たぬきが化けてこの悪戯をするという者もありました。深夜にいろいろの物音がきこえて、所在を尋ねると転々するというのは、広島で昔評判したバタバタの怪、または東京でも七不思議の一つに算かぞえた本所の馬鹿ばか囃ばやし子の類です。単に一人が聴いたというのなら、おまえはどうかしていると笑うところですが、現に二人三人の者が一所にいて、あれ聴けといって顔

を見合せる類のいわゆるアリユシナシオン・コレクチーブであるために、迷信もまた社会化したのであります。

私の住む牛込の高台にも、やはり頻ひんびん々と深夜の囃子の音があると申しました。東京のはテケテンという太鼓だけですが、加賀の金沢では笛が入ると、泉鏡花君は申されました。遠州の秋葉街道で聴きましたのは、この天狗の御膝元おひざもとにいながらこれを狸の神楽と称し現に狸の演奏しているのを見たときえいう人があります。近世いい始めたことと思えますが狸は最も物真似に長ずと信じられ、ひとり古風な腹はらづつみ鼓つづみのみにあらず、汽車が開通すれば汽車の音、小学校のできた当座は学校の騒ぎ、酒屋が建てば杜と氏の歌じの声などを、真夜中に再現させて我々の耳を驚かしていま

す。しかもそれを狸のわざとする論拠は、みながそう信ずるとい
う事実より以上に、一つも有力なものはないのです。

これらの現象の心理学的説明はおそらくさして困難なものであ
りますまい。常は聴かれぬ非常に印象の深い音響の組合せが、時
過ぎて一定の条件のもとに鮮明に再現するのを、その時また聴い
たように感じたものかも知れず、社会が単純で人の素養に定まっ
た型があり、外から攪こうらん乱する力の加わらぬ場合には、多数が一
度に同じ感動を受けたとしても少しもさしつかえはないのであり
ますが、問題はただその幻覚の種類、これを実験し始めた時と場
処、また名づけて天狗の何々と称するに至った事情であります。
山に入ればしばしば脅かされ、そうでないまでもあらかじめ打合

せをせずして、山の人の境を侵すときに、我と感ずる不安のごときものと、山にいる人の方が山の神に親しく、農民はいつまでも外客だという考えとが、永く真価以上に山人を買い被^{かぶ}つていた、結果ではないかと思ひます。

七

そこで最終に自分の意見を申しますと、山人すなわち日本の先住民は、もはや絶滅したという通説には、私もたいていは同意してよいと思つておりますが、彼らを我々のいう絶滅に導いた道筋についてののみ、若干の異なる見解を抱くのであります。私の想像

する道筋は六筋、その一は帰順朝貢に伴なう編貫へんかんであります。最も堂々たる同化であります。その二は討死うちじに、その三は自然の子孫断絶であります。その四は信仰界を通つて、かえつて新来の百姓を征服し、好条件をもつてゆくゆく彼らと併合したものの、第五は永い歲月の間に、人知れず土着しかつ混淆こんこうしたものの、数ににおいてはこれが一番に多いかと思ひます。

こういう風に列記してみると、以上の五つのいずれにも入らない差引残さしひきざん、すなわち第六種の旧状保持者、というよりも次第に退化して、今なお山中を漂泊しつつあつた者が、少なくとも或る時代までは、必ずいたわけだということが、推定せられるのであります。ところがこの第六種の状態にある山人の消息は、きわめ

て不確實であるとは申せ、つい最近になるまで各地独立して、ずいぶん数多く伝えられておりました。それは隠者か仙人かであろう。いや妖怪か狒々ひひかまたは駄だ法螺ぼらかであろうと、勝手な批評をしても済むかも知れぬが、事例は今少しく実着でかつ数多く、またそのようにまでして否認をする必要もなかったのであります。

山中ことに漂泊の生存が最も不可能に思われるのは火食の一点であります。一旦その便益を解していた者が、これを抛棄ほうきしたということはありえぬように思われますがとにかくに孤独なる山人には火を利用した形跡なく、しかも山中には虫魚鳥小獣のほかには草木の実と若葉と根、または菌きのこ類るいなどが多く、生なまで食くつていたという話はたくさんに伝えられます。木挽こびき・炭焼すみやきの小屋に尋

ねてきて、黙って火にあたっていたという話もあれば、川蟹かわがにを
持つてきて焼いて食ったなどとも伝えます。塩はどうするかとい
う疑いのごときは疑いにはなりません。平地の人のごとく多量に
消費してはおられぬが、日本では山中に塩分を含む泉いた至つて多く、
また食物の中にも塩気の不足を補うべきものがある。また永年の
習性でその需要は著しく制限することができました。吉野の奥で
山に遁げこんだ平地人が、山小屋に塩を乞いにきた。一握ひとつかみの
塩を悦んで受けてこれだけあれば何年とかは大丈夫といった話が、
『羈旅漫録きりよまんろく』かに見えておりました。

それから衣服であります、これも獣皮でも樹の皮でも、用は
足りたろうと思うにかかわらず多くの山人は裸であったといわれ

ております。恐らくは裸体であるために人が注意することになったのでしようが、わが国の温度には古今の変は少なからうと思うのに、国民の衣服の近世甚だしく厚くるしくなったのを考えますと、馴ならせば無しにも起き臥がしえられてこの点はあまり顧慮しなかつたものと見えます。不思議なことには山人の草鞋わらじと称して、非常に大形のを山中で見かけるといふ話がありますが、それは实用よりも何か第二の目的、すなわち南日本の或る海岸の村で、今でも大草履おおぞうりを魔除まよけとするごとく、彼ら独特の畏嚇いかくほう法をもつてなるべく平地人を廻避した手段であつたかも知れませぬ。

交通の問題についても少々考えてみました。日本は山国で北は津軽の半島の果から南は長門の小串こくしの尖さきまで少しも平野に下り立

たずして往来することができるのでありますが、彼らは必要以上に遠くへ走るような余裕も空想もなかったと見えて、居るといふ地方にのみいつでもおりました。全国の山地で山人の話の特に多いところが、近世では十数箇処あつて、互いに隔絶してその間の聯絡は絶えていたかと思われ、氣をつけてみると少しずつ、氣風習性のごときものが違つていました。今日知れている限りの山人生息地は、北では陸羽の境の山であります。ことに日本海へ近よつた山群であります。それから北上川左岸の連山、次には只ただみ見川がわの上流から越後秋山へかけての一带、東海岸は大井川の奥、次は例の吉野から熊野の山、中国では大山山彙さんいなどが列挙しえられます。飛騨は山国でありながら、不思議に今日はこの話が少な

く、青年の愛好する北アルプスから立山方面、黒部川の入^{いり}なども今はもう安全地帯のようであります。これに反して小さな^{はなれじ}離島^までも、屋久島はいまなお痕跡があり、四国にも九州にももちろん住むと伝えられます。四国では剣山の周囲ことに土佐の側には無数の話があり、九州は東岸にやや偏して、九重山^{くじゆうざん}以南霧島山以北一帯に、最も無邪気なる山人が住むといわれております。海が彼らの交通を遮^{しやだん}断するのは当然ですが、なお少しは水を泳ぐこともできました。山中にはもとより東西の通路があつて、老功なる木樵・猟師は容易にこれを認めて遭遇を避けました。夜分^{やぶん}には彼らもずいぶん里近くを通りました。その方が路^{みち}が楽であつたことは、彼らとても変りはないはずです。鉄道の始めて通じた

時はさぞ驚いたろうと思いますが、今では隧道トンネルなども利用しているかも知れませぬ。火と物音にさえ警戒しておれば、平地人の方から気がつく虞おそれはないからであります。

山男・山姥が町の市日いちびに、買物に出るといふ話が方々にありました。果してそんな事があつたら、衣服風体なども目に立たぬように、済ましてただの田舎者の顔をするのだから、山人としては最も進んだ、すぐにも百姓に同化しうる部類で、いわば一種の土着見習生のごときものであります。それ以外には力つとめて人を避けるのがむしろ通例で、自分の方から来るといふはよくよくの場合、すなわち単なる見物や食物のためではなかつたらしいのです。しかも人類としては一番強い内からの衝動、すなわち配偶者の欲し

いという情は、往々にして異常の勇敢を促したかと思ふ事實があります。

もつとも山人の中にも女はあつて、族内の縁組も絶対に不可能ではなかつたが、人が少なく年が違い、久しい孤独を忍ばねばならぬ際に、堪えかねて里に降つて若い男女を誘うたことも、稀ではなかつたように考えます。神隠しと称する日本の社会の奇現象は、あまりにも数が多く、その中には明白に自身の気の狂いから、何となく山に飛び込んだ者も少なくないのですが、原因の明めいりよ瞭うになつたものはかつてないので、しかも多くは還つて来ず、

一方には年を隔てて山中で行逢うたという話が、決して珍しくはないから、こういう推測が成立つのであります。世よのなか中なかが開けて

からは、かりに著しくその場合が減じたにしても、物憑ものつき物狂ものぐるいがいつも引寄せられるように、山へ山へと入って行く暗示には、千年以前からの潜んだ威圧が、なお働いているものとみることができません。

それをまた他の方面から立証するものは、山人の言語であります。彼らが物を言ったという例は、ほとんどのいってよいのであるが、平地人のいわゆる日本語は、たいていの場合には山人に理解せられます。ずいぶんと込み入った事柄のめぐりでも、呑込んでその通りにしたというのは、すなわち片親の方からその知識が、だんだんに注入せられている結果かと思えます。それでなければ米の飯をひどく欲しがりまた焚火たきびを悦び、しばしば常人に対して好

意とまではなくとも、じつと目送したりするほどの、平和な態度をとったという話が解せられず、ことに頼まれて人を助け、市に出て物を交易するというだけの変化の原因が想像しえられませぬ。多分は前代にあつても最初は同じ事情から、耕作の趣味を学んで一地に土着し、わずかずつ下流の人里と交通を試みているうちに、自他ともに差別の觀念を忘失して、すなわち武ぶり陵りょう桃とう源げんの発見とはなつたのであらうと思ひます。

これを要するに山人の絶滅とは、主としては在来の生活の特色のなくなることであります。そうして山人の特色とは何であつたかというと、一つには肌膚の色の赤いこと、二つには丈たけ高く、ことに手足の長いことなどが、昔話の中に今も伝説せられます。

諸国に数多き大人おおひとの足跡の話は、話となつて極端まで誇張せられ、加賀ではあの国を三足であるいたという大足跡もありますが、もとは長髓彦ながすねひこもしくは上州の八掬脛やつかはぎぐらいの、やや我々より大きいという話ではなかつたかと思われます。北ヨーロッパでは昔話の小人というのが、先住異民族の記憶の断片と解せられています。日本はちようどその反対で、現に東部の弘い地域にわたります。今もつて山人のことを大人と呼んでいる例があるのです。

私は他日この問題がいますこし綿密に学界から注意せられて、単に人類学上の新資料を供与するに止らず、日本人の文明史において、まだいかにしても説明しえない多くの事蹟がこの方面から次第に分つてくることを切望いたします。ことに我々の血の中に、

若干の荒い山人の血を混じているかも知れぬということは、我々にとつてはじつに無限の興味であります。

青空文庫情報

底本：「遠野物語 山の人生」岩波文庫、岩波書店

1976（昭和51）年4月16日第1刷発行

2010（平成22）年3月5日第50刷発行

底本の親本：「定本柳田國男集 第四卷」筑摩書房

1963（昭和38）年4月25日

初出：山の人生「アサヒグラフ 第四卷第二号～第五卷第七号」

朝日新聞社

1925（大正14）年1月7日～8月12日発行

山人考「大正六年日本歴史地理学会大会講演手稿」

1917（大正6）年11月18日

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2013年4月13日作成

2016年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

山の人生

柳田国男

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>